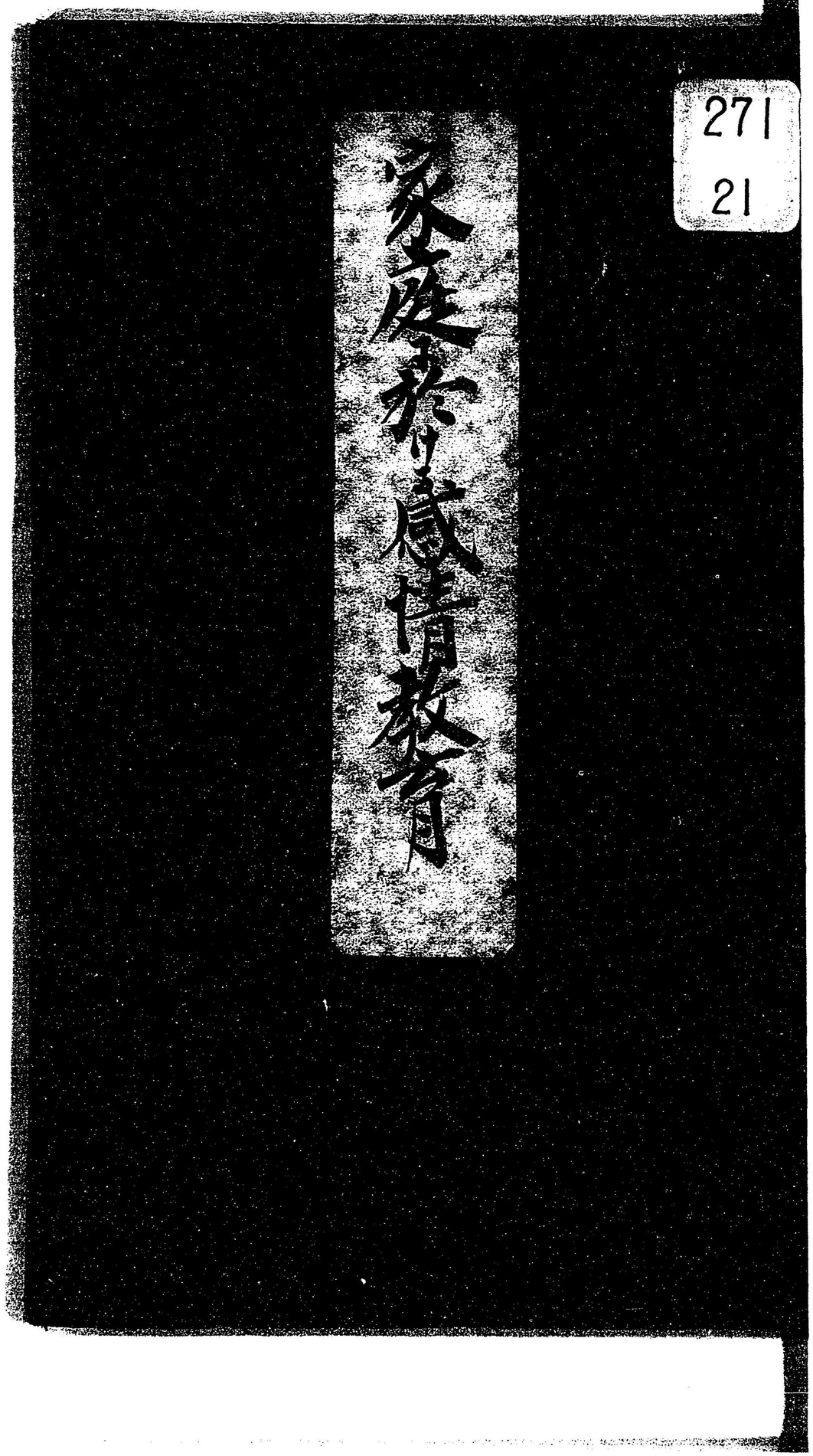

271
21

048498-000-8

271-21

家庭に於ける感情教育

熱田　真吉／著

M33

BEI-0040

291-21

家庭

於ける感情教育

北海道師範學校教諭 熱田眞吉著

東京 秀英舍
三松堂發兌

緒言

西洋の教育を移植して何等の改竄をも加へざりし飜譯時代は何時しか過ぎ去りて今日に至りては兒童研究と云ひ家庭の教育と云ふ如き實地上の教育問題が教育者以外の方面にも謳はるゝに至れり是れ世人が曾て言はざりし問題にはあらざれども從來は口に言ふほど心に其の必要を感せざるもの多かりき近時漸く外人雜居てふ動機より社會が自ら省みて己の短所を知り之を補はんとするより遂に内心に警醒の萌芽を發し社會全般が實地教育に眼を注ぐに至る彼の公德敗頽と叫び人心輕薄と慷慨するも亦之に外ならざるなり

それ外人雜居の準備としては人情の輕薄を去り社會の公德を確立せざるべからざるは勿論必要のことなれども其の第一歩として是等の基礎たる家庭の教育をして確固たらしめざる以上は到底其の正鵠を得難きや必せり實に社會の單位は家庭にして社會の公德は一家私德の集合なり外人雜居の準備それ家庭の教育より先きなるはなからん

家庭に於ける感情教育

目次

第一章　緒論……一
　第一節　現時我國の趨勢を論じて教育の起點に及ぶ……一
　第二節　幼稚園教育……八
　第三節　家庭教育の要點を論ず……一七
第二章　兒童論……二一
　第一節　兒童の身体……二一
　　A、運動器官　B、消化器官　C、神經系統　D、感官
　　1、聽官　2、視官　3、嗅味官
　　E、皮膚　F、體温　G、齒牙
　第二節　兒童の感覺……二二
　第三節　兒童の特性……二六
　　一、活動性　二、快樂性　三、好奇性　四、求知性　五、易信性

緒言

吾人夙に聞く日本人は多情多涙なり其の人と爲り大に好みすべきものありと雖亦慷慨悲憤一時の熱情に制せられて大事を誤ること多きなりと此の言たるや我國人の人情を歸納して當れるや否やを知らずと雖も苟も幾分の此の傾向を有するあらば將來の家庭に於て兒童の感情養成上深く此の點に注意すべきの價値明かに存す特に人情の大部分は幼稚期に於て形成せらるゝものなるを以て家庭の教育が兒童の内界に及ぼす影響は亦感情に於て其著しきを見る然りと雖も吾人の寡聞進むべき方針の標示されたるものを見ず是を以て日課繁劇の間にも筆を之に向け思考を此の問題に注ぐこと屢なりき今や漸く緩りて一篇をなすに至るも固より人に示す如きものにあらず特に早卒の間になりしものなるを以て文章の解し難きところもあらん近頃書肆今關氏の來りて此の稿を乞ふに任せ敢て世に公にすることゝはなしぬ願くは天下の識者示教を惜しひなくんば幸甚

明治三十三年一月三十日

熟田眞吉識

六、模倣性　七、自活性　八、自利性　九、競爭性　十、恐怖性
十一、忿怒性　十二、嫉妬性
第三章　家庭教育者としての父母の資格を論ず……六一
第一節　父母の位置……六一
第二節　愛と嚴との調和……六五
第三節　德義の實踐……六八
第四節　父母の觀察力……七二
第四節　家庭論……七九
第一節　家庭創立者としての父母の權利及び義務……七九
第二節　家庭の精神……八三
一、祖先の觀念　二、家庭の風儀
第三節　兒童教育所としての家庭の價値……八九
第四節　現時の家庭を論ず……九三
第五節　家庭の標準……一一〇

第五章　感情論……一二〇
第一節　感情の性質……一二〇
一、感情の本體　二、感情は自然なり　三、感情發動の原因
A、內部原因　B、外部原因
四、感情の安定不安定　五、感情は演習によりて其の强度を
增す　六、感情は感情を生じ又感情を制す
第二節　感情教育の困難……一三三
第三節　感情教育の必要……一三八
第四節　感情教育の目的……一四〇
第六章　方法論……一四八
第一節　身體と感情との關係……一四八
第二節　子供の食物……一五四
第三節　衣服……一六四
第四節　兒童の運動……一七二

第五節　家庭に於て養成すべき感情……一七六
一、自愛の情　二、同情　三、美的感情
A、有形的美情　B、無形的美情
イ、眞理の愛　ロ、善の愛
第六節　自愛的感情の取扱法……一八三
一、忿怒　二、嫉妬　三、恐怖
第七節　同情の養成……一九三
第八節　美的感情の養成(有形的美情)……二〇七
A、玩具　B、繪畫　C、音樂唱歌
第九節　美的感情の養成(無形的美情)……二一五
A、眞理の愛　B、善の愛

家庭に於ける感情教育目次 終

家庭に於ケル感情教育

第一章　緒論

第一節　現時我國の趨勢を論じて教育の起點に及ぶ

浦賀の砲聲我國人の眠りを覺ませしより以來西洋の文物は鯨波の勢を以て傳來し開國の思想は日に月に發揚せられ諸般の藝術は各其の學理と共に我國人の腦中に移植せられ干戈に於ては政治に法律に將又海陸軍の戰術に其趣きを一新し他方に於ては商業に工業に航海事業に其面目を改むるに至れり夫然り實に此等各般の社會事業の全體を總括する教育事業は學理と其の應用と相並行して全國に普及せられ現今に於ては世界萬國の最も注目する所となり日本人種の一擧一動は皆彼等の一顰一笑となるに至れり此の時に際し教育の基礎を確固抜くべからざる磐上に置き國民の腦髓を一層堅確につくらざるべからざるや論を待たず國民の腦髓を堅確につくらんには須らく天眞爛漫たる嬰兒の時期に於て其精神

を動かすべからざる大道に指導すべし今それ偉人と云はれ道德家と稱せられ勳王家と脅ばるゝ我國一流の人物と雖ども其精神の骨骼は恐らくは幼年に於ける腦髓の未だ嫩芽なりし時に不變の正義高崇なる道德潔絜なる少量の感情を以て構成せられたるに過ぎざらんそれ然り實に眞を好むと云ひ善を悦ぶと云ひ自然の美を愛すと云ふ如き閑雅なる美情も亦其の幼時哺乳の間に手に觸れ眼に映するピー〳〵ガラ〳〵器械の龜の子等の玩具より何時しか植ゑつけられたる萠芽が聊か根を深くし幹を大にしたるものたるに過ぎざらん此の時に於ては其の刺戟や小と雖ども其の印象や深く其の感じ淺しと雖ども其の影響や大なり果して然らば此の幼稚期の如何なる時に之れに着手すべきか之れ教育の起點論の由り て起る所なり

それ人間は如何なる時期より教育すべきかてふ問題こそ教育分割論の由て起る所にして此の發起點にして先つ決定せらるゝに非ずんば教育學は如何に秩序系統の整然たるも之を施して何等の良果をも得る能はざること恰も農夫が地質と肥料とを能く適合せしめて而も其の播種期及び植附けの候を知らざるが爲めに

得易き收穫をも遂に得能はざるが如けん然れば則ち此の必要なる發起點は如何にして之を決定せんか宜しく次の條件によりて之を求むるを至當とすべし

(一)人は人たるが爲めに生理的生活の完全を要す
(二)人は人たるが爲めに精神的生活の健全を要す

此の二件は何人と雖とも肯定せざるはなからん

ロック氏は Asound mind in a sound body なる格言を其の著書 Some thoughts Concirning Education, の卷首に掲げて曰く A sound mind in a sound body, in a short but full description of a happy state in this world: 云々と然りと雖ども人は生れながらにして健全なる心意と身體とを有する者に非ず否孱弱水の如く泣叫するの外何事をもなす事能はざるなり是に於てか保護養育の必要起る而して主として之れが任に當るものは嬰兒の父母なり、それ愛情中最も神聖にして最も確固たるものは親子の愛なりとす此の感情たるや絶對的にして兒女の安全を保持し生長發達せしことを希望することと切なり是に於てか教育的動作起る此動作たるや兒女の幼稚なる間は益々懇切を極むることと愛の心理より考ふるも明かなりとす故に余は曰はんとす教

育の起點は生兒の身體が母體を離るゝ瞬間にあり人類の敎育は凡て此の時より始まらんとヘルバルト曰へるあり「敎育の至誠至高なる動機は小兒を愛憐する情に存す」と

今暫らく進化論を假用して詳論せん

宇宙自然の現象は適者生存の理を生じ一切の生物は自然の大法に隨ひて其種族を保續繁榮せしめんが爲めに成るべく其の環境に適應せんとするに至る是に於てか激烈なる生存競爭は始まり自然淘汰の强大なる勢力は遂に雌雄牝牡をして各其の種族間に結鎖をなさしむるの天性を賦與するに至れり「燒野の雉子夜の鶴」母子の愛情の切なること如何なる種屬の動物と雖も最も著しく最も可憐の現象として之を表示せざるはなし然れども此等の愛情たる其の幼子の稍々成育して獨立するに至れば復繼續せざるのみならず否寧ろ反對の情を表はし之れと戰ひ或は放逐するに至るべし龜類の或種族、鳥類の多くは雌雄の動物其の季節に限り子を撫育すれども其の他に於ける父動物の如きは固より全く其の子たるを認知せざるなり

人類間に於ける家族結合も亦造化の大法に隨ひて其の目的たるや種族の保續に外ならず、されど人類に於ける親子の關係は他動物に於けるものと大に趣きを異にする所あり

之を事實に徵するに子女の出生は實に家族存在の理由の存する所にして又同種繼續の目的の存する所なり蓋し赤子は生れて直ちに獨立して生活し得べき體格を具へず叫聲を發するの外一事だも爲す能はざること他動物の生れて直ちに走りて食を求むるに比して大に其身體の微弱なることを見るべし彼の卵殻を出でたる雛の巧みに穀粒の存在を認めて之を啄むは能く人の知る所なり抑も動物の生るゝや十分に發達せる神經機關は直ちに其の作用をなすと雖も人類に於ては其の機關未だ完全なること能はずして唯外部よりの印象により幾多の練習を經て始めて完きを得るものなり是に於てか母子の關係は亦益々免るゝことを得ざるものとはなれり、ジャネー氏曰く「自然は子女の爲めに母の身體中に其の生存の源泉を備へ母子の間また免るべからざる明々の繩索ありて纏つることを吾人に示せり」とそれ然り實に幼兒の獨立するに至るまで保護敎育の時期人類より長き

はなからん是れ動物進化の高等なる程度を示すものにして最も進歩せる人類は最も長き幼穉期を有し從ひて敎育時期の久きに亘るを必要とするを示すものなり

母子の關係は已に此の如く必要なりされど子女は此の長期間母の保護にのみ一任し得べきや父母共に其の子女の保護を負擔すると何れか能く生存競爭に堪へ得べき母たるものは女子なり女子の身體は其の構造上より其の生理上よりつねに赤子を保護するに充分なるものなるが此等の疑問が直ちに肯定せられざる所以は何人も能く其の理を解することを得べし否事實は明かに家族の唯一の保護者は母に非ずして父なることを吾人に示せばなり是に於てか男子は一家に缺くべからざる保護者なり一家の生存は男子にあらずんば能く安全なることを得ざることゝなるべし

以上述ぶる所によりて人類が自然淘汰の大勢力の下にありつゝ種族保存ノ目的を達せんが爲めに父母が其の子に注ぐ動作は第一に其の身體の保護となりて顯はれて久しく繼續すると共に一方に於ては幼孩者が己の理性に從ふことを得ず

他人の理性を頼むの必要あるを以て精神の陶冶てふ動作となりて顯はるゝを見る蓋し前者は下等動物にも多少存在する、一種の本能的動作なれども人類に於ては生理的生活の完全を要すると共に更に心意の健全をも要するを以て精神的生活の完了を告ぐるに至るまでは後者に求むるもの大なり是に由て之を觀れば人類が協力して其の子に對して爲す所の有意的具案的動作は穉兒の出生の日即ち父と母との日なり

蓋し敎育の効果は被敎育が幼稚なるほど益々顯著なるものなるを以て古來國家を料理し社會の改良增進を計らんとするもの皆眼を敎育の一方に注ぎ敎育の良果を希ふもの眼を家庭敎育に注がざるはなかりき述べて是に至れば我國現時の家庭に對して轉た慨嘆に堪へざるものあり吾人は暫らく之を後章に讓ることゝなし家庭敎育の補足として堂々設置せられある幼稚園敎育の如何につき聊か卑見を陳せんとす

第一章　緒論

第二節　幼稚園教育

夫れ幼兒をして身體と心意との健全なる發育を遂げしめ善良なる習慣を得しめて家庭教育の不足を償ふは之れ幼稚園教育の要旨なりとす

現今數多の幼稚園に於ける設備が果して此の要旨に適應し得るや否や吾人大に疑はざるを得ざるなり保育室の構造及び大さは如何に遊嬉室の設備は如何に此等の事たる現時の小學校と雖も不完全ならざるにあらず然りと雖も學齡以前に於ける軟弱なる幼兒にありては其の影響決して學齡兒童の比にあらざるを見る吾人が特に幼稚園に責むる所以實に此の點に存す

幼稚園の保育を受けて小學校に來れる幼兒を單に家庭に於て父母の手にのみ育ちて小學校に入學せる幼兒に比して幾許の優れる點かある否之を現今の事實に徵するに幼稚園を經て小學校に昇れる兒童は自治心割合に少なく一も先生二も先生とて何も彼も教師にのみ依頼せんとする傾向ありて初め一二年間は此の弊習を除くが爲めに教師に面倒を掛くること少々ならざるは吾人の常に目擊する所なり

現今幼稚園に幼兒を托するものは何れも上等の生活をなす者にして多くは下婢乳母等の附添人は保育時間中は休憩室か扣所に於て自己の勝手の編み物及び世間の痴話に其の閑を消すを常として更に小主人公の方を顧みず而して其實母たるものも亦其の幼稚園を訪問するの暇は曾てなきもの多し何となれば毎朝の新聞の小說欄と雜報欄とを見るの時間を之れが爲めに投せざるべからざればなり斯かる些細の理由を以て其の最も大切なる自家の愛子が狹隘なる空氣の不流通なる採光法の不適なる保育室と名づくる一小室に閉ぢこめられ怪しき保姆一人の手に附せらるゝの不幸を救ふことを得ず嗚呼兒童を害ふものは母か保姆か、之を一見すれば隨意の遊嬉やら共同の遊嬉やら判斷に苦しむのみならず六七十人の幼兒は各自の好むまゝを之を行ひ倒るゝ泣く噪はぐ保姆は適ま參觀人の前を繕はんが爲めに百方之を保護し倒るゝを見れば私に之を懷き起して慰むるをこれ事とす其の手技の如きに至りては殆んど全く保姆の手に製作せられ而して幼兒の作に裝はしむるもの決して少なきにあらざるものゝ如し固より微弱なり身

第一章　緒論

體を有する幼兒なり經驗に乏しき幼兒なり座作進退運動手技に至るまで長者の補助を仰がざるべからざるは勿論なり其倒れて起ち得ざるを見て之を助けざるは酷なり殘忍なり其自ら作り得ざるを察しながら之を補助して導かざるは不親切なり幼兒の保育者にはあらざるなり然りと雖も幼兒の特性として徃々他人は如何なる事をも己の爲めになすべき義務を有するものと誤解し易きものにして後年の依賴心は全く是等に基因するもの多し吾人夙に吾國人の一般に依賴心に富むを患ふ幼は長に綰り老は壯に綰る是に於てか遂に人をして吾が人口の四千萬は人口と云ふ人の口が四千萬あるにて働く手の數にあらずと曰はしむるに至る此時に際し幼兒保育の任に當るもの徒に忠めに世話したるのみにて幼兒の將來を考へざるは少しく其責務を完ふせりと言ひ難し之れ獨り保姆其ものゝみの罪にあらず宜しく幼稚園其ものゝ吾國に置かれたる根原を研究せざるべからざるなり以上は余が見聞せる一例を示すに過ぎずと雖も是等に類せる弊習は亦決して少々にあらざらん嗚呼幼稚園の監督今日の如くそれ急務なる時はなからん」吾人常に疑ふ吾邦の幼稚園は果して幼兒の爲めに設置したるものかを若し吾人

第二節　幼稚園教育

をして之を言はしめんか左の二件に歸せざるを得ず

一、教育者が初等教育てふ概念を充實せんが爲めに此の擧に出でたること

二、西洋諸國に於ける幼稚園の價値を聞き之を直ちに試驗的の目的を以て設置したること

幼稚園設置の目的が果して右の二條件に歸するとせば其の保育如何にして家庭教育の不足を補ふことを得んや何となれば教育の動機は被教育者の爲めに出づるに非ざれば正當と認むることを得ざればなり果せるかな此等の幼稚園に對する我國の教育者の意見をして次に述ぶる如くならしむるに至れり其重もなるもの一二を擧ぐれば

能勢榮氏　（同氏著學校管理術）

「現今の如き有樣にては縱令文字を教へざるも其の教導方嚴正に過ぎ幼稚の發育を助長することなきに非ず全體幼稚園なるものは彼のフレベル氏の稱道せし如きの利益あるものにあらず之を小學校へ登る楷梯と爲すときは寧ろ害ありて益なきなり云々

氏の評によりて觀れば氏は絶對的に幼稚園を排斥したるものにして現今の狀況より之れを見れば少しく酷評に過ぐるの疑なきにしもあらざれども苟も實地教育に從事せるものにして當時の幼稚園を見て其の實況を知らば恐らく此の感なきものなかるべきなり

國府寺新作氏（同氏著普通教育學）

國府寺氏は彼の沿革論に於てフレベル六ヶ條の主義を擧げ之れによりて創立せられたる幼稚園は頗る文明世界の好評を博したること同時に歐洲各國の當時に於ける上中下流の社會が如何に幼稚園の必要ありしかを說き重ねて女子教育の盛んなる英獨今日にありて幼稚園の振はざる所以を述べ最後に佛墺二國の幼稚園の概況を述べて曰く

「佛國墺國等にては幼稚園は主として貧民の小兒の預り場處にして父母たるものが朝から晩まで其の職業に從事し其の子に注意する閑暇なきか爲め多くは其の稼きに出掛くる途次之を此に托し置き終日勉勵して其の勞を卒へたる歸路之を伴ひ還るものなり蓋し是れ幼稚園の眞面目ならん」と氏の幼稚園に對する理想亦

以て見るべきの價値あるを信ず氏は、又直ちに語を我國の幼稚園に轉じて曰く

「我國の現況にては中等以下の小兒輩は依然として大道の傍にうろつき廻はり徃來の烈しき市街にては其の危きこと累卵の如く且つ通行の障碍となり氣の毒と面倒との混合の情を生ぜしむるに反し又笑ふべきは縮緬の振り袖綾羅紗の洋服などに纏はれたる若君達が特別の附添人と諸共に馬車人力車にて幼稚園に乘り込み居れり然れども是れ果して笑ふべきことなるや必ずしも然らざらん何となれば言はずして明瞭なる理由あればなり」と

嗚呼氏の言はずして明瞭なる理由とは何ぞと問ふものあらんか若し吾人をして之を解釋せしめば必ずや我國にて所謂上流者と自稱し居る家族の貴夫人達が多くは如何なる社會より出でゝ現時の玉の輿に乘られしか彼等の品格は如何に彼等の感情は如何に彼等の教育は如何にかを察せよと云ふを憚らざらんとす

氏は又更に論歩を進めて幼稚園の內部を評して曰く

「尙一層怪しむべきは謂ゆる幼稚園內部の有樣なり即ち其の有樣は殆んど小學校と異なる所なく椅子テーブル教臺等は規律正しく幷び立ち一二三の號令で人形

使の眞假をなし嚴然たる干渉課業を執行し毫も怪しむ所なきものゝ如きこそ實に怪しむべきの至りなり若しフレベルをして此に蘇生せしめば其の驚愕の躰裁はシェークスピアルの筆を假るに非ざれば之を寫すことを得ざるべし」云々、

此等の批難は固より過去にありて現時の幼稚園を評したるにはあらざれども之を當時に比して數層の進歩を經たる現時の幼稚園に於ても猶は幼稚園内部の現況は如何にとフレベル氏に問はれたらんには吾人また答ふるに言なきなり特に上流社會の子女が競うて盛裝し車馬にて往復するは事實にして幼稚園なるものゝ現時は高等社會の子女の專有物たることの感あるは何人と雖も異論なからん況んや現時の幼稚園が左の如き弊を脫することを能はざるに於てをや

清水直義氏（家庭雜誌百十五號）

(一)母たるの道を知らざる少女をして保姆たらしめたるもの、辛ふじて僅かに文字を書し得る位の者を保姆としたるもの、御役目に保姆の事に從ふものゝふる事

(二)家屋狹隘空氣の流通あしく光線の具合よろしからざる室内に於て遊戲せしむるもの腰掛けを用ゐて冬時に於ける防寒の備へなきもの、諸器具の光射格構に少しも注意することなきもの

(三)強いて恩物を使用せしめんとするもの強いて製作物を成さしめんとし出來ざれば保姆之を作りて出來たるが如く裝はしむるもの、甚しきは文字を教へ算法を教うるに至るもの

(四)西洋傳來の器具を用ゐ又は其の方法にのみ依り少しも其の我が邦の兒童に適するや否を考へざるもの

我が國の現在に於ては右の如きもののわるがゆへに兒童を幼稚園に入れんとするものは須らく先つ其の幼稚園の眞正なるものなるや否を視て然る後其の眞正なるものに入らしめんことを期すべきなり」云々

それ或は時に稍々其の保育の宜しきを得たるものなきにしもあらざれども全體より之を觀れば少くも一般家庭教育を補足するの資格を欠くや明かなり故に余は敢て曰はんとす。吾國の幼稚園は家庭教育を償ふ所の訓育所にあらずして寧ろ教育學者が初等教育の概念充實と試驗的方便との二條件を以て外國より輸入せる形式的飾り物たるのみと

然らば我國に於ては徹頭徹尾幼稚園の必要なきか幼稚園は徒に形式的贅澤物として之を拋擲し去るべきか否々然らず吾人は絶對的に幼稚園を排斥するものにあらず否むしろ早くより幼稚園らしき幼稚園の設立あらんことを希望せしなり殊に內地雜居は限前に許可せられ商業に工業に諸般の社會に激烈なる平和的戰爭は開かれんとす此の時に當り中流以下の社會に於ける生存競爭は尙一層の强激を加ふべく家庭敎育の必要は益々其の急を告ぐると同時に一方に於ては又增々困難となるべし吾が文部省は此に見あり本年六月省令第三十二號を以て幼稚園保育設備規程を發布せられ保育の時間、育兒の數をも示され保育の要旨と共に其の方法注意をも加へられ保育に關する四大綱目を擧げ一々其の目的の存する所を明かに示され最後に幼稚園の設備に關する規程を揭げ大に幼兒の衛生に注意せられたりき

もし將來の幼稚園にして適當なる養成を受けたる保姆が兒童の特質を充分に洞察し是等の規程に準據して其の設備を完にし社會の全部就中勤めて中流以下の子女を集め專心保育の任に當り兒童の身體と心意との健全に注意し道德的の根本を此の間に造り獨立の氣象と從順の性情との基礎を固めて之を小學校に送るに至らば是こそ將來に望ましき幼稚園にして又幼稚園らしき幼稚園たることを得んか

第三節　家庭敎育の要點を論ず

今夫れ將來の幼稚園にして如何に完全なる保育をなすと雖も幼兒は只之れに托したるのみを以て充分なりとせざるを得ず否寧ろ幼稚園に托したるの日より家庭の敎育は更に一層の注意を加へざるべからざるなり吾人已に前節に於て述べたるが如く敎育は幼稚園を以て始むるものにあらず其の子の出生の刹那より始まり生長の後に至るまでも繼續すべきものにして其の經路に於ては諸種の敎育に遭遇するものなりと雖も其の最も多くの時間を經過するは家庭にして最も種々なる事件に關係する所は家庭なり然れば則ち家庭は幼年者に對しては時間の上に於て經驗の上に於て最も多くの部分を領有する最も必要なる敎育所にして又最も善良なる學校なりと云ふべし故に敎育の最高目的なる品性陶冶てふ仕事も

第一章　緒論

亦其の源礎を正確に家庭に要めざるべからざるべく家庭も確かに之れが需めに應ずるの資格を有することは論なきなり

サムエル、スマイルス氏謂へるあり曰く「家庭に於て品性が形成せらるゝは恰も降雪の積むが如し其の積むや徐々にして人其の蓄積に氣附かずと雖も積り積りて非常のものとなるなり若しそれ父は嚴にして母は慈一は斷じ一は智を與へ一は情を養ひ兩者の配合宜しきを得るに至りては之れ實に品性陶冶の生きたる資料たるものなりと云ふべし」云々それ然り品性の陶冶は家庭に於て其の正確なる基礎を作り得べきは勿論なりと雖も家庭教育の事たる其の範圍殆んど凡ての教育を包含し其の領地極めて廣漠たるを以て吾人の淺學固より全部に渉りて詳論し能はざれば茲に其の要を摘みて之を述べんとす、然らば家庭に於ける教育的仕事の最も主要なる點は何ぞ曰く、最も和平なる絶潔なる而も敦厚にして温き且つ高尚なる感情を有する子弟を造くるにあり何となれば人の品格の基礎は感情にあればなり

それ内部に發動する感情は或は言語となり容貌となり掩はんと欲して掩ふこと

能はず、坐作進退感覺の諸機關も必ず之が影響を蒙むるものにして口に眼に四肢に顔色に人は常に其の胸中の秘密を知らず識らず他人に語りつゝあるなりされば古人も情うちに盛んにして詞外に顯はると云ひ古歌にも「ものや思ふと人の問ふまで」と詠ぜられしにあらずや社會の交際も感情によりて圓滿に職務上の公平も之れによりて維持せらる、知力の働きも感情の伴ふによりて一層の強力を加へ道德も感情の隨伴によりて其氣品を尊くす之をジョールジワシントンニ比シテ吾人は何れをか尊崇するナポレオンは絶世の豪傑なり然れども之をフランクリンに比すれば如何に於ける一新方向を開きたる學者なり而も之をベーコンは哲學人は其の人の事業其の人の學識其の人の見識を貴重せざるに非ず然れども眞に貴重し眞に尊崇する所以のものは蓋し其の人の内心に發動せる高尚なる感情が溢れて其の人の氣品となり吾人其の人と爲りを想像するに際し面り現はれ來りて吾人の快感と敬慕との念を起さしむるの一點に存す

然るに感情の價値たる從來は殆んど忘れてれ等閑に附し去られたりしが一度品格の基礎が感情より形成せられ道德も之れに伴ひて始めて尊き所以を覺らば焉

ぞ輕視することを得ん吾人が特に此の論題を提去し家庭に於ける教育事業の主要なる點は圓滿なる感情を有する子弟をつくるにありと主稱せし所以のもの亦實に茲に存するなり以下論ずる數章は垣氏の教育學分割の法式に則とり大略之を五章に區分し一々其の主要の點を掲げて述ぶる所あらんとす

第一章　緒論

第一節　兒童の身體

第二章　兒童論

垣氏教育學分割論の第一歩は誰を教育するかの疑問にあり之れが疑問に對ふるは本論文に於て最も先きに研究せざるべからざるの條件にして特に兒童論が他の章に先ちし所以なり何となれば吾人は「誰れを」なる疑問に對しては「兒童を」なる答を以てせざるべからざればなり

それ兒童をして身體と心意とを健全にし之れが發育を助け健康にして且つ善良に活潑にして有用なる女子とを得んには徒に其の教育法と管理法との研究のみを以て滿足すべからざること論を待たず必ずや天下の父母は其の子女の身躰、營養と其特質とに着目し第一の注意を此に置き秩序的に之を研究して身體は如何なるものか彼等の榮養は如何に衛生法は如何に彼等の精神は常に如何に活動しつゝあるか如何なる點に偏向し易きか彼等の感情は如何に發達するかを十分に研究し而して後に其の方法に及ぶべきなりフランシスワーナー氏曰く「眞正の教育は兒童の身心を會得して後に行はるゝものなり」と」實に然り是等の研究は啻に教育者か之を行ふのみならず寧ろ父母專ら之を行は

ざるべからず吾人は人物を造くるてふ事業に於ては其の主とする所は蓋し家庭に存し學校及び幼稚園は聊か之れが補助たるの價値を有するに過ぎずと認むればなり

第二章　兒童論

第一節　兒童の身體

兒童の身體は如何に發育するものなるかを論ずるは本論の第一歩にして之が精細なる研究は固より專門家に非ずんば能くし得ざると必然なり特に吾人の寡聞兒童の身體の發育に關し精密に記述されたる著書を見ず以下述ぶる所のものは二三の小兒科に熱心なる醫家の所説を參考し茲に其の主要なる數點を掲ぐ

A、運動器官

身體運動の器官の第一は骨にあり骨は小兒に於ては極めて血液に富み從ひて柔軟なることは人の知る所なり其發育の狀態は全く數理的の律に從ひて之に働らく所の壓力引力等によりて長くも偏平にもなり曲直も亦自在にしてそれに作用する外力の如何によりて如何樣にも變形す其の發育たるや個處により一樣ならず

可なり早く硬りなる部分あり二十五六歳の頃に至りて始めて全く發育を終るものありて最多くの骨は十六七歳の頃ひ已に大概硬まり了るものなりと云ふ、

運動器官の第二は筋肉にあり筋肉は骨に附隨して之を上下左右に運動せしむる綾釣糸にして初生兒に於ては其發育尚微弱なり大人に於ては筋肉の重さ大凡體重の十分の四に相當し出産の當時に於ける嬰兒の體重は大凡九百匁に過ぐるは稀れにして筋肉の重量大略其の四分一に當るに過ぎず加之其の色薄く其質弱く其の働き亦至て僅かなりされども最初に於ては躰重は非常に增進し筋肉は非常なる進歩を以て增し其の質も亦強きを加ふ特に筋肉の發育は之を鼓舞するの方法によりては其の年齢の老衰に至らざる限りは隨分增大するものなることは現今我國の力士を見て知るべきなり

B、消化器官、兒童に於ける消化器の重もなる作用は吸収にありて器械的化學的等の食物の分解作用は猶極めて薄弱なるものゝ如し要するに消化管の吸収面は比較的に廣く消化液を分泌する所の腺体及び消化管を形成せる筋肉組織は割合に後れて發育し其の面の廣き粘膜が大に血液に富み從て刺戟され易く損傷を蒙り

第二章　兒童論

易し

唾液は其の量極めて少く從ひて初生兒口內は著しく乾燥し澱粉を化して砂糖となす固有の働きも甚弱く生后二三ヶ月を經て稍く增加を見るに至る

胃は幼兒に於ては位置狀大に大人と異なれり其の當初に於ては垂直の位置を取るを以て食物を嘔吐し易く漸時發達して斜位を取り遂に大人の如く橫位を取るに至る其の壁薄くして其の產する所の液は巳に出產當時より多少分泌せざるにあらざれども其の乳汁を哺む間は消化力遙かに大人より劣れるを知らざるべからずそれ小兒に特有なる生理作用は嘔吐にして僅かの刺戟にて之を催ふすに至る哺乳の量少しく過度なれば少しの動搖にても彼等は容易に嘔吐を來し恰も自然に逆流し來るが如し之れ畢竟胃の形狀大人と異なりて基底を欠如せることゝ位置の直或は斜なることと抵抗力孱弱にして刺戟を受くること容易なるによるならん

肝臟の大さは解剖學者の云ふ所によれば初生兒に於ても比較的大にして左右の兩肺を合せたるよりも尙大なりと云ふされども肝が分泌する膽汁の性質は未だ

第一節　兒童の身體

十分研究し居られず只概して有機鹽類に乏しく且つ稀薄なり特に膽汁酸に乏しきを以て從て脂肪に對する乳化作用微弱なるを知るのみ膵液も亦澱粉を糖化するの力を欠けり

以上述ふる所によりて小兒が食物を消化するの機能は大人と同じからず唾液の力甚微弱なるを以て澱粉性の食物を糖化して之を吸收するの作用は充分に行はれず故に澱粉性の食物を與ふるは大に小兒の消化器の作用に反して大害を來すことあるべし又小兒の胃は脂肪に富むものには堪ふること能はず如何に單純なる乳汁なるも若し之が脂肪に富めるときは其脂肪は吸收せらるゝことなくして遂に胃腸の害を釀すに至るべし是に於てか乳汁檢查の必要起るべし

要するに消化器諸部の發育は十五六歲に至りて略ぼ大人と均しきに至る就中蛋白質を消化するの機能は割合に早くより發達すれども澱粉脂肪の如きに至りては幼兒は勿論後年に至るも遙に大人に劣れりとす

C、神經系統、

初生兒の神經系は解剖的に他の体部と其の容積との比較に於ては大に發育し又

其の重量も体重の十三乃至十四ペルセントあり大人の腦は其の体重との比に於ては二、三七ペルセントに過ぎず

神經系統の發育生長する有樣は最も強盛にして初めの一年間の發育の分量は之より以後成年に達するまでに發育する量に等しと云ふ其の第一年の終りに於ては其の重量大人の腦の半ばに達し十四歳頃に至れば大人に比して只僅に六分一の重量の輕減あるに過ぎず、生後最も著しく發育するは小腦にして六七歳に至りて主として發育するは大腦の前部にあり中樞器特に抑制中樞の如きは極めて不完全なるものなり之れ父母たるもの、最もよく注意すべき點なりとす

之を要するに生後數年間は腦脊髓及び神經等は何れも水分に富み、其の質柔軟にして堅固ならず從ひて神經系は刺戟され易し蓋し小兒が僅少の刺戟の爲めに全身痙攣を起し或は腦の痰疾に罹り易きも畢竟之れに基因するものゝ如し

D、感官

1、聽官、初生一兩日間は聽器未だ奮起せざるが如く極めて鈍し之れ皷室の粘膜が膨脹して鹹を起して皷室内に充塞するのみならず皷膜が傾斜して殆んど水平の

位置を取るを以て音響の振動を受くるの力弱く且つ外聽道短きを以て空氣の振動を十分に傳ふることを得ず一兩日を經れば粘膜の膨脹は次第に消失し乳汁を飲み空氣を呼吸するよりして稍聽覺を起し次第に發達すと雖も皷膜及び耳小骨は外部より來る音響を適當に腦に傳導すること能はず腦も亦甚弱くして此等を受取るに適せず要するに音を聽くことの困難は永き間引き續くものなり之れ幼兒に取りては最も必要なることにして大人の如く音を聽き得たらんには其の初期の非常に休息を要するときに當りて過度に之を攪亂せらるゝの恐あり

兒童の初めて音を感ずるは一週間の後なりと云ふ六、七週を經れば適度の音の方に頭を向くるの徴候ありされど三四ヶ月の後に至らざれば眞正に笑顔をつくりて其の方向に面を向くること稀なり幼兒は強鋭の音には恐怖を起し稀れに反射的振顫をなし時として全身痙攣を起すことあり例へば雷鳴の時の如きは往々恐怖の狀を現はすを見る之れ敢て雷を恐るゝことを知るものにあらずして其振動の過度なるに刺戟せらるゝのみ

2、視官、初生兒の眼は犬猫の子と異なりて開眼し得るを以て盲にあらざれども當初に於ては差明卽ち眼を閉づるを常とす二三週間を經て始めて明處に開眼することを得るに至る或る精密なる觀察家の言によれば生れて五六分間を經ればるあれば瞳子の收縮することあり是れ既に光に感ずることを現はすものなり又輝々閃々たる光線射入するときは生れだての赤子も眦を閉づるは人の知る所なり是に由りて之を觀れば人類は他の哺乳動物と異なりて眞に初めより光の感受性を有し生るゝや否や直ちに明暗を辨ずるの證なり」と

されど四五月の後に至らざれば諸物を見別くること能はず且つ其の色を區別することも自ら順序あり第一に黃と赤第二に白と黑第三に綠色と藍色とを漸時知るに至る

初生兒の眼は概して近眼にして時を經るに從ひ角膜の穹隆が退減して遠視眼となる、されど學齡に達し學校に入るに至れば衛生的不良の感應によりて屢々近視となるものなり現時中學生徒に近視眼の多きは大概ね小學校に於ける不衛生的

感應に歸因するもの、如し父母たるもの最も注意すべきことならずや

3、嗅味感官、是等の感官は生る、と同時に之を有し甘きものを知り藥の味を知り又乳汁の味を鑑別し母の乳房と雖も之れに臭氣あるものを附着するときは決して吸はざるべし

E、皮膚

生後の當初は白色粘性の脂成分を以て全身を被はる之れ Vernix Caseosa と稱して重もに脂肪より成るものなり之を洗ひ降して後皮膚は始めて赤色軟美となり柔毛を生ず初生數週間は上皮の剝離と皮脂腺の分泌とは旺盛にして殊に頭部の上皮の剝離は著しきものなり故に少しく清洗を怠るときは脂肪は堆積して汚穢甚しきのみならず一種の痂層となりて頭皮に附着するに至る

汗腺の機能は皮脂腺の機能に比すれば盛んならず故に小兒は大人の如く發汗せざるものなり只溫袍の度に過ぐる場合に於て少しく發汗するあるのみ故に嬰兒にして發汗甚しきときは必ず病體と見做すを至當とす之れ畢竟身體の衰弱營養不良等に於て然るものとす

F、體溫

初生兒の體溫は母體の溫度よりも高きを常とすれども產浴後は直ちに下降し一晝夜を經れば亢進して平溫に歸す而して幼兒の平溫は大人に異なることなし

幼稚の小兒にありては溫を調節する所の中樞が未だ發達不完全なるを以て些少の感動によりても直ちに體溫に變化を來し易きものなり啼泣の後哺乳の後に於ては溫度は多少上昇し睡眠のとき及び永く暗室に居るとき等は下降し概して體溫は變動し易きを常とす

小兒は溫を製造する量も大なれども消失することも亦多し之れ蓋し小兒の身體の表面積は其體重に比して大人よりは比較的に大なるを以て隨て冷却することも亦大なるによるならん要するに小兒に於ては高溫に耐ふる力は大人よりも少く低溫に抵抗する力は大に弱く溫に感ずるも強く冷氣に感ずるも亦甚銳敏なり

G、齒牙

兒童の身體が大人と異なるの點は今一つ齒牙の發生之れなりそれ齒牙の發生は兒童身體の發育に非常なる關係のあるありて小兒科專門醫の言によれば齒牙發

生の狀態は小兒身體の有樣をトするに足るものにして健全なる小兒にありては一定の時期に一定の順序を追ひて發生し營養不給、先天梅毒等に於ける小兒にありては齒牙の發生は著しく遲慢するか或は順序錯倒するを常とするものなりと今齒牙萌生の時期と順序とを表に示せば

下內門齒	生後三ヶ月より十ヶ月に至る間	通常五ヶ月乃至八ヶ月
上內門齒	生後五ヶ月より十五ヶ月に至る間	通常前者の後一二ヶ月
上外門齒	同十ヶ月乃至十六ヶ月	通常前者の後直ちに生ず
下外門齒	同十二ヶ月乃至十七ヶ月	上外門齒發生後一ヶ月
上下の前臼齒	十二ヶ月乃至二十一ヶ月	
上下の犬齒	十六ヶ月乃至二十五ヶ月	
上下後列臼齒	二十ヶ月乃至三十六ヶ月	

故に乳齒は二年の終りまでには發生し終るものにして健全なる小兒に於ては必ず左右同時に對生するを規則とす若し齒牙の發生にして遲滯するか順序を異にするのみならず對生せずして片生するものあるときは之れ

身體の異變を示すものにして小兒科に於ては病徴と見做すべきものなりと云ふ乳齒の發生終りて小兒は暫らく之れによりて食物を咀嚼し六七年の頃に至れば第二生齒期に至る

小兒か五年乃至六年の頃に至れば乳齒は發生の順を過らずして脫落し其の跡に再び齒牙を發生し始む此の時期は第二生齒期にして之より生ずる所の齒牙は永久齒と稱して生涯保存す其の最も早く生ずるは第一大臼齒にして十二年乃至十三年にして交換全く終り十二年乃至十四年頃に至りて第二大臼齒を生じ十六年乃至二十五年にして最後の列齒即ち第三大臼齒を生じて齒牙の發生は終りを告ぐ

以上述べたる如き幼兒の身體の發育及び其狀態に關しては主として專門醫の任じて研究すべきことなれども父母は預め其の要旨を知り置き應分の保護を講せざるべからず

第二節　兒童ノ觸覺

前節に於て兒童の身體の特徴につき主要なる二三を掲げたりしが兒童の觸覺ても亦問題に及ばざりき之れ觸覺なるものは所謂普通の感覺とも稱すべきものにして觸覺神經の梢端は視聽等の特別の機關と異にして一定の局部に止まらず身體到る所として存在せざるはなく隨ひて其の感受する面積の廣き個處の多きこと決して他の感官の比にあらざるなり極言すれば眼球の網膜は光線を感ずる所の觸官にして鼓膜は振動を感ずる觸官なり味覺も嗅覺も亦觸覺の一部として論ずるを得べきなり然れども斯く論究せざればとて觸覺が兒童の心意を形つくる上に於て其の重要なる大部分を搆成することは盲者が色彩の感を除く外は殆んど五官の完備せる人に劣らざる者あるを以ても知るべきなりされど皮膚は發育甚遲々たるものにして其の初めに當ては僅かに寒熱を知り疼痛を知るに止まるのみ故に痛苦の感受性は大なるに比して殆んど無感覺の情狀に在るが如けれども只之を表はす度と其の時間とに於て少量なるのみ尚且つ其の無感覺樣の情態は決して永く續くものに非ずして乳房の哺吸によりて唇舌の觸官は屢其の經驗を反復し漸時に敏捷に趣き手腕の運動よりして指頭の觸感は益々其の感受性を鋭くするに

第二節　兒童ノ觸覺

至るべし顔面の皮膚及び手掌の表面等も亦漸々自然の動作によりて練習せらるゝに從ひ物体を識別するの作用を生ずるに至る今主としてフレデリックトレシイ氏の引證せるものを略述して幼兒の觸覺特に舌唇に於ける觸覺の實驗を示せば「舌は味覺の唯一の局處たるのみならず觸覺に於ても亦身体の他の部分に讓らざるなりクスマウル氏の實驗によれば初生兒の口中に滑かなる玻璃棒を入れて舌頭を摩するときは之れに應じて敏活に運動し其運動の性質棒の觸るゝ所により て異なれり即ち舌端に觸るれば唇は突出し舌の兩端は棒を圍みて之を卷き即得に吸乳的運動を始め快感を指示する情狀を呈し之を後方舌根に觸るゝときは不快の狀を呈し嘔吐の徴を示せり此の如き實驗は曾に氏のみにはあらざれども何れも同一の結果を得又此の動作は空腹の場合に於ては特に著しと云ふ之により て舌面の感受性は味感とは獨立して別に生前已に之を有し其の作用亦顯著なることを知るべし

唇の感受性は舌の如く出生後直ちに著しく且つ鋭敏なり生後六日目に赤兒の醒起し且つ空腹なる時に於て羽毛又は指頭にて輕く觸れしに吸乳運動をなし或は

同樣の事を六日以前に於て實驗せしに同一の結果を得しと云ふ蓋し生前胎兒たりしとき胎兒自身の身體の一部が或は胎膜液かゝ屢之を刺衝しつゝありしによるならん特に上唇の反射的感受性は其の生後一兩日に於ても活潑なる狀貌を呈すること實に驚くべきものありと云ふ」

以上は生後直ちに觸感の徴候を呈するものなれども學者研究の報告によれば鼻孔の粘膜眼の睫毛結膜角膜並に鼻の尖端の如きも最も鋭敏にして僅少の刺戟にも能く應ずる運動をなすものにして前額を顰蹙し或は手を以て面を拂ひ或は眼瞼の開閉をなす等稍防禦的の反射作用をなす其の他掌に指を置けば之を握り指頭を以てはぢけば手を縮め脚底に指を觸れれば脚指を開き打つときは膝を屈す特に顔面の皮膚に至りては亦一層鋭敏なるが如し

之を要するに外部に暴露せる部分は其の初め鋭敏なるも日を過るに從ひて比較的に遲鈍となり多少保護せらるゝ部分は其の感覺殆んど當初と異なることなし即ち初生兒にありて其の觸覺は反射的運動によりて之を表はせども聽官及び視官が專ら使用せらるゝに至ると同時に一方に於ては皮膚神經の外圍の末梢は寒溫

等の外界より觸接によりて却て魯鈍となるものなりされど觸覺は之を敎育するときは特殊の發達をなすものにして生來の盲者が觸覺にのみよりて讀書に熟達し得るが如き特別なる例は偖て措き吾人の舌頭指端等が特に身體の他の部分よりも感觸に鋭敏なるを見ても常に物體に觸れつゝ之を練習したる結果たることを明なるを知るべし

それ心理學者は知識收得の上に於ては觸覺は欠くべからざることを吾人に敎へたり實に觸覺は視覺と伴ひ筋覺と合して空間時間等の關係を知らしめ又大に自他の識別は兒童に覺らしめ自我の觀念を得しむるのみならず兒童敎育の基礎は專ら受動的觸覺の經驗にありて兒童の快苦は此の方面より得ること少〳〵ならず是に於てか專ら其の作用を反復し或は變化して大に其の能力を鍛鍊し發達せしめ周圍の容觀界を知得するの點に至りては到底他の感覺の及ぶ處にあらず

第三節　兒童ノ特性

それ兒童は生長しつゝある所の人間にして大人は既に成長したる小兒なり故に大人の世界と小兒の世界とは其の要素に於ては決して異なるものにあらず大人の爲す所のものは常に兒童は遊戲に於て之を爲し居ることは何人も知る所なるべし然れども其の身心共に萠發の時期にあるを以て已に成長したる大人の强壯なる身體と堅固なる腦髓とを具ふるものとは自ら其の度に於て其の範圍に於て其の性質に於て多少の差異なき能はず今特に兒童に著しき偏性とも稱すべきもの丶二三を擧げて之を略述せん

一、活動性、

兒童は常に自由獨立を渴望するの天性を有し健全なるものにありては其の睡眠時間を除く外は瞬時も靜止することなく眼に觸れ四肢に觸るゝ品物に向ひて活潑なる動作を起し或は走り或は躍り耳目の運動をなせば忽ちにして口手の運動に移り握り、打ち、投げ、倒す等の激烈なる動作あれば必ず之れに續きて喰ひ、饒舌り歌ふ如き喉頭内の運動となり諸種の堪能は適意に交代して彼等をして鋭敏に激烈に動作せしむ蓋し小兒の身體は時々刻々發育生長し腦髓も亦此の時期に於て長足の進歩を以て發育し從ひて心意は敏活に發動して常に彼等を驅りて身體の

諸機關を練磨せしむるものにして身體上より見るも精神上より觀察するも靜坐默視して一事一物にのみ其の精神を注ぐ如きは彼等の天性の毫も許さゝる所なり

第二章 兒童論

二、快樂性

兒童は能く戲れ能く遊び能く喰ひ能く談し能く他人の爲すことに關涉して毫も憚らず偶々不快の感あるも涕泣一過更に憂苦の痕を止めず眼に觸れ手に觸るゝ天然物及び人工物に對して自由に活潑に運動する所以のものは單に活動性あるのみならず內界に於ける快樂の隨伴するにこれ由る蓋し小兒の想像力は非常に活潑なる者にして木馬は眞の馬にして而も亦駿馬なり人工物たる雛人形は眞の小兒にして自分は眞に之が友たり親たるなり此の活潑なる想像の爲めに彼等は其の身邊に存在するものに對し常に快樂を感ず動作は之れが爲めに益〻活潑となり身體は之れが爲めに益〻發達をよくす夫れ心身の關係が密接なることは何人も知る所にして心意の快樂は肉體の勢を增進し其の生長發達を遂げしむべき造化の要法にして彼等の身體が疲勞し易き狀態にあるも彼等の心意は薄弱なるも而もよく困難に打ち勝ちて勇進不撓事を遂げしむるは只此の快樂の情の盛んなるによるのみ

三、好奇性

兒童の好奇性と大人の好奇性とは大に其の性質を異にす大人の奇とする所のものは奇なるが故に奇とするなり故に一度奇とせる所のものは生涯之を奇とするの傾きあり小兒の奇とする所のものは奇なるが故に奇とするにあらずして寧ろ奇とする所のものの多きにあるなり赫々として六合を照らす日輪も奇なり玲瓏として乾坤を照らす明月も奇なり水中に躍る魚鼈も空中を翔る鷲鳶も衣服も飮食も眼を開きて見る光色、耳を傾けて聽の音響も一として彼等に奇ならざるはなし大人は液體靜學の理を解せざるも手を水中に入れて孔を生ぜざりしとて敢て奇とせず然れども小兒は之を奇として驚き動物生理學を知らざる大人と雖も金魚の水中に呼吸するを見て怪まずされど小兒は之を怪む蓋し小兒の知識は其の範圍甚だ狹隘なるを以て其の見聞する所のもの概ね新奇にして彼等は常に見るもの聞くものに此の快感を惹起しつゝあるものなり

之を要するに事物の經驗未だ深遠ならず神經の發動も亦活潑にして毎に無爲に苦しむものなれば見るもの聞くものに對し此の情を惹起し易きは自然の然らしむる所にして生長するに從ひ尋常一般の經驗を過るに至るまでは彼等の快感實に制御し能はざる所のものありて存するや明かなり

第二章　兒童論

四、求知性、

未だ曾て見聞せしことなき事物を示さるゝときは之を知らんと欲し已に知れば其の理を尋ねんと欲するは人類固有の性情なり而して眞にその知らんと欲する知識を收得し新に一理を學び之を明らむるときは其の快樂實に筆すべからざるの度に達す凡て人類は此の性を具ふればこそ知識學藝を研き開明に進むことを得るなれ

されば小兒は海は誰が堀りしや山は誰が築きしぞ月星は如何なる人が製したる か天の上には何物かある等の疑問を出し熱心に執拗に其の答を要求して父母教師を困らすものなり蓋し小兒は四五歲に達すれば驚くべき速度を以て知識を追求し耳目に感ずる事々物々皆之を知らんことを希ふに至る之れ則ち兒童の疑問時代にして此の時代に收得する知識は後年大學に入學し刻苦勉勵して得たる知識に比して其の量に於て優れるのみならず人世生活に必要なるの點に於て優ること數等なりと云ふ以て知るべし後來眞を愛するてふ高尚なる感情も亦全く基本を此の性に求めざるべからざることを

五、易信性、

兒童は好んで疑を懷きて之を發問すると同時に亦一方に於ては欺かるゝてふ經驗に乏しきを以て容易く事物を信ずるものなり例へば大人の言とし聞かば一も二もなく之に信を置くの弊あり之れ固より當然のことにして天眞爛漫たる兒童が好奇性と求知性とに驅られて問ふ四面玲瓏たる神腦を有する無邪氣なる兒童が其の答の當否を撰擇吟味するの暇あらんことをのみ之れ事とするの時期に於て其の答をや

や況んや常に信じ常に敬愛する所の父母教師の言に於てをや

それ知識技能を得るの初めに當ては此の性の價値あること固より論を待たずと雖も一方に於ては父母自身は勿論苟も兒童の身邊に立ち振舞ふ婢僕乳母等の言行に於ても大に注意を加へて監督せざるべからざるの必要の存するを見る

六、摸倣性、

兒童は大人となるの準備に汲々たるものなれば大人の行爲を見て之を摸擬せんと勉めざるはなし是れ一方には長者の爲す所を倣ひ早く長者に近接せんとするの慾望と他方には精神の活潑なるが爲めに常に無聊に苦むより消閑の材料とせんと欲するとに出づ故に兒童の模倣中には滑稽的遊戲的のものにして單に他人を笑はしめ以て自己の快樂を得んとしてなすものなきに非ず四五歳の小兒が腰の曲れる老人を見ては之に眞似し傴僂者を見ては之をなし獨眼者を見ては己の一眼を閉ぢて他人に示し他人之を笑ふときは喜悅面に溢はるゝ如きは恐らく後者に屬するもの多きに居らん此の如き滑稽的行爲は敢て咎むべきにあらざれども決して看過すべからざるなり後來人を嘲笑し人を輕蔑するの不德は多く此等の萌芽の發育したるものなればなりフェキロン氏曰く「Mocking は下等の好尚を含む善良なる感情に反對のものなり」と

されど模擬の多くは此の如き滑稽的に出づるもののみに非ずして寧前者に屬す漁師の子は漁を模擬し商家の子は賣買の眞似をなし神官の子は祭祠の遊びをなす等一擧一動常に見る所のものを倣ひ男子は父の如く女子は母の如くならんとするの情切なり、されば食事の時などには或は自己の常に用うる小なる茶碗を嫌ひて飯を喰はざることあり其の理由を靜に問へば曰く「御父樣の茶碗のように大なるに非されば坊は厭やなり」と余の友人某氏は常に箸を以て鼻下の髭を抑へて汁を吸へたりしが氏の長子は四歳のとき之を見て常に箸を己の上唇に當てゝ汁を吸ひしと云ふ其の他兒童の模擬の實例數ふるに暇あらず言語も之によりて練習せられ禮儀も道德も之によりて成る元來學ぶと云ふことは眞似の義にして兒童の全生活は殆んど此の眞似を以て充たされ大人事業の有ゆるものは兒童の世界に於て殆んど具備せざるものなし只模擬と本物との差あるのみ此の模擬によりて一度人事社會を稽古し成長するに從ひ漸次其の本物と交換するに至るべし」

兒童已に此の性に富む是を以て徒に敎訓を與へ或は賞罰を行ふよりも寧ろ善良なる模範を示す方其の價値遙に大なるものなり蓋し兒童は其の道理を說きて感化するよりは實例を示して之を感化することの容易にして且つ効力あることは何人も疑ひなからんアリストートル曰はく「人間は眞似をする動物にして人間の

知德は模倣によりて進歩するものなり」とさもあるべきことなり孟母も隣を擇んで處りしと云ふに非ずや

七、自治性、

人は此の社會にありて如何に知識あり如何に才能あり如何に財產あるも自治の心なきときは其の趣く所に從ひ遂に放辟邪侈至らざる所なきに至らん人若し思ふことは盡く之を實行に顯はしたらんには之れ發狂者のみ人の價値は眞に自制の如何に存するものなり然るに兒童の本性として活動を好み快樂の情に富み好奇性甚しきを以て從ひて常に極端に走り易く自己を省みて其の適度に止まることは長者の敎導と干涉とを待ちて始めて爲し得る所にして自他の差別を考へ其の身心を制するは知識經驗を積み重ねたる後にあらずんば能はず兒童は學校にありては靜肅にして其の課業を受くべきものなることは疾く理解し承知しあるにも係らず動もすれば他人の所爲に干涉し敎師の隙を窺ひては聲調も稍ゝ喧しきを加ふるはよく知られたる事實なり然れども彼等は毫も惡意ありて然るにあらず前節已に述ぶるが如く腦の

抑制中樞の發達の頗る不完全なること、活動性に富めること、聲を發し無意に身体を動すものなりされば兒童の監督者たるもの能く其の兒童の身體と心意との發達の度を察し之れに從ひて漸次に反省力を促かすの外なし徒に其の理を說き之を抑壓せんとするは却て兒童の天性に悖とり品性を害ふものと云はざるべからず

八、自利性、

小兒は天性自儘にして甚だ利己に急なり愛情の如きも其の大部分は自愛的なり所有の慾も强くして早くより發達し自己のものと他人のものとを區別することは能はざるのみならず寧ろ他人てふ觀念は殆んど皆無にして自己の觀念獨り强盛なり是故に一言の褒貶も彼等の心情には非常に大なる感動を與ふるものにして兒童は此の性あるが爲めに非常の困難にも能く堪へ非常の束縛にも能く忍び得るなり成長も之が爲めに得立身も之によりて得らる若し夫れ誘導方其の宜しきを得れば此の性を利用して自他併立の幸福を得るの道も亦以て覺らしむることを得ること恰も熟練なる漁師が逆風を利用して船を風上に進め得るが如し

九、競爭性、

競爭性に關しウキカルシヤム氏は人の自然性にして人は此の性あるにより眞に人たることを得べきを論じて曰く(能勢榮著、學校管理術)抑競爭の念は古今萬國の人に於て互に皆顯はれざるものなければ國は互に競ひて貿易、工作、學術、兵制を盛んにし人は互に競ひて或は戲れ或は商ひ或は辨じ或は學び或は戰ひ孩兒と雖も亦必ず相競ふの姿を爲すに至る故に凡そ兒童の遊戲は何者を問はず皆其の優劣を試みるより快樂を覺え人民交際の快活なるも亦競爭の念に因り營業の道に於けるも其の家に於けるも其の教へに於けるも亦皆競爭の念を顯はさゞるなく而して斯く古今各地に洽布心力は學校の室内に於けるも強ひて之を抑制する能はざる者とす故に若し強ひて之を抑制せんとする時は人類を作りし上帝の智を疑ひ人の性情に戻ると謂ふべし蓋し此の人の彼の人に於けるや其不幸を見て之を喜び或は他人を害して以て己れに利するが如きは兒惡たる敢て言を待たずと雖も人類は互に相競ふの念あるより亦互に相勵み相護り以て其の生涯を送るを得故に曰く鐵を鋭ならしむるものは亦鐵なるが如く人の身體を

强壯ならしむる者は亦人なり云々

實に然り徒に人類のみならず如何なる生物と雖も恐らく競爭なきはなからん兒童は此の念に一層激烈にして之れが奬勵の方法によりて或は非常に好果あるべく或は非常の弊害を釀すこともあらん兒童の感情につき其の念の取扱に關しては後來大に研究せざるべからざるものあり現時社會の趨勢によりて鑒みるも世界は競爭の世界たるにあらずや萬國は非常なる競爭を以て進行しつゝあるに非ずや此の時に當り我が國民を養成するに唯に些少の弊害を顧慮して之を直ちに排斥せんとするは吾人の容易く採らざる所なり

十、恐怖性、

恐怖心は一般の生物に存する所の感情にして兒童に於ける此の感情たるもと先天的なるか經驗的なるかにつきては古來學者間に異論少なからず現今もなは定論のあるあるを聞かず惟ふに兒童の研究は未だ初歩たるを免れざれば吾人が將來大に研究を要するもの特に此の感情にありとす

それ然り人の恐怖心は先天的なるか經驗的なるかは暫らく容易に斷言し難しと

雖も聊か現今自己の信ずる所のものを述べ最後に此の感情が如何に兒童の身體及び心意を支配するの勢力あるかを研究せんとす

第二章　兒童論

夫れ動物に於ては生來自然に敵を有し小鳥は曾て知らざる無經驗の鷹を恐れ一度も遂はれしこともなき猫の叫聲を聞きて戰慄せざる鼠なく其の恐怖たるや眞に遺傳的のものあるが如し蓋し彼等の恐怖は種族保存の大則より自然が賦與したる本能にして尺蠖が木の芽に似たる寒地の兎が降雪の候に白色に變毛するとも更に其の理に於て異なることなく天然は種族保存と共に生存競爭なる活劇を生物界に演じつゝ一方に於ては之を攻擊するの武器を與へ一方に於ては之れに對して防禦の術を賦與す然りと雖も人類に於ては蛙の蛇に於ける小鳥の鷹に於ける鼠の猫に於ける如き天然の敵手あることなく隨ひて本能的に恐怖心の存在する如きことは少しく疑なき能はざる所なり、スパルヂング氏の實驗せる所の雛雞は鷹を恐れたるも少しも鳩を恐るゝ樣子なかりしが如き例は固より他動物には天然に本能的恐怖心のあることを證するに足るも之を以て直ちに兒童が未だ曾て經驗せざりし突然の音響によりて叫聲を發したるに比して兒童の恐怖は先天

第三節　兒童の特性

的なりと斷論するは恐らく早計の感なき能はず然れども雷鳴等によりては兒童が往々恐怖の狀を現はすことあるものなれども之れ亦恐怖とは云ひ難し吾人が本章第一節に於て述べたる如く之れ恐怖によるにあらずして寧ろ其の振動の過激なるが爲めなり兒童は雷の恐るべきを知りて恐るゝにあらず要するに其の聽官神經の過度の刺戟に基づきて此の狀を呈するものなり

チャールスベル氏は幼兒の實例を擧げて恐怖の先天的なることを主張して曰く

「幼兒を腕に乘せて下より上に擧ぐるときは手足共に靜止すれども下ぐるときは然らず強く全身の筋肉を收縮す之れ明かに危害を恐るゝ先天的感情の徵候なり」と

然り幼兒は之を懷きて下さんとするときは往々筋肉を收縮することもあらん然れども果して危害を恐るゝ先天的感情の致す所なるか否かは吾人疑はざるを得ず或は兒童の不快を起す原因となりしにはあらざるか吾人は之れにつきては大に其の研究を要することゝ信ず氏は又曰く

「子供が始めて立ち歩かんとするときに母若しくは他人の膝か若しくは甚遠から

ざる所即ち嘗へ倒るゝことあるも之れによりて保護を受け得べき程の距離に於て直立を試むるは之れ明かに經驗より來らざる恐怖によりて筋肉を支配したるなり」云々ベル氏の實例未だ吾人に服し難きものあり左に其の理由を述べん

それ幼兒の未だ歩行せざる間は固より一人にて存在するものにあらず必ずや其母若しくは他の保護者の身邊にあるものなり故に其の立ち始むるも亦其の身邊に於て試むべく遊ぶも亦母及び子守の膝なぞは彼等には最もよき丘陵ともならん腰掛けともならん然れども之に倚りて立ちたりとて以て恐怖心が先天的なりとするを得るや否や彼等は立つに先ちて必ず匍匐すべし匍匐する間の幾分かの經驗は後日彼等が始めて立たんとするときの先導をなすや明かなり是に於てか其の第一歩として身邊のものに倚りて立たんとするは見容きの理なり故に余の姪は常に弄べる大皷によりて立ち余の友某氏の子は米櫃に倚りて始めて直立し又障子其の他の建具に倚りて立つもの少なからず之れ其の容易なるが爲めに之れによりて試むるものにして身體の發達より自然に生ずる運動の順序なり恐らくは其の倒るゝことを豫想して之れに倚るに非ざらん且つ氏の如き例を以て果して恐怖心が先天的なりとの證となすに於ては之れに反對の例證も亦世間に決して少なからさらん

第二章　兒童論

第三節　兒童の特性

之を要するに吾人は兒童の恐怖心の起原は何れにあるかは未だ正確に研究し能はずと雖も之を先天的なりと信ずべき程の滿足は說明を聞かざるなり若し吾人の斷定にして大に誤るにあらずんば吾人は信せんとす兒童の恐怖心は少なくも所有と云ふ觀念が生じてより後にありて、幾分か自他の區別を知り少なくも我或は我がものと云ふ觀念を有して此の我或は我がものが現在或は未來に於て他人或は他物の爲めに危害を蒙るべきことを豫想するの瞬間に之に抵抗するの力なきことを想像するか或は必ず之を保護し得ると信ずるに足るべき保護者に乏しきときに於て起る感情ならんとされば「サレー」氏は「恐怖は情の本原的のものにして直接に心的活動によりて起り現に存在する物體によりて生せられたる感覺の外に知識想像及び漠然たる歸納的思想の存するものなり」と述べられたり實にさもあるべきことなり

兒童は大人よりも一層此の情を惹起し易きものにして此の感情たる之を起した

第二章　兒童論

る瞬間に於て肉體上に及ぼす影響は決して少々にあらず筋肉の働きは魔痺し甚しきに至りては全身痙攣を起し心臟の皷動は變し血液の循環を害し顏面の筋肉は血色を變し一見爭ふべからざる畏懼の狀を顯はし神經力と活動力とを沈衰せしめ從て智力意思の活動の上に大なる影響を與へ心身共に畏縮し精神上には大なる苦痛を感じ凡ての快樂は其の瞬間に於ては全く之れが爲に包沒せらる特に身心共に發達の時期に於ては消化營養等の機能に非常の變動を與へ從ひて無力の狀態に陷らしむるものなり兒童が此の情を惹起する動機は多くは兒童の內界に存し之れが外界の或るものと不意に結合するの機會に於て起るものにして知識經驗の不足により其原因を識らざるより不安心の感を起し又屢々妄信の之れに伴ふものなり是等及び是等と性質を同じくする恐怖は徒に兒童のみにあらず人類が野蠻の時代に於ては知識經驗の足らざるが爲めに大に此の情を惹起せしことありし例は今尙ほ奇談として世に存するに非ずや是等の情を引き起すには幾分かの經驗と自愛性の萌芽とを有せざるべからず何となれば曾て人跡至らざりし山野に住する動物は人を畏避することを知らず虎に掠はれし幼兒が笑顏を

なして虎口にあるを怖れざりし物語もあるにあらずや故に余は曰はんとす恐怖は知識經驗の幾分を有し想像力も亦或る度に發育し而して尙未だ大に足らざるものあるより之が虛を衝きて發起するものなりと怪物に對する恐怖及び暗黑に對する恐怖の如きは實に之れに基因するもの多々なり

次に兒童をして最も恐怖の情を惹起せしむるは死と云ふこと之なり之れ人生を攻圍する百般の襲撃中其の最も恐るべき者は死なり釋迦は之を利用して血の池地獄極樂淨土を說き基督は天國の安樂世界を說きたり是れ徒に人類のみの弱點にあらず生物一般の弱點なり自然の大法が此の死刑の宣告を下すなり果して然らば生あるもの必ず死ありと云ふことを得るか否々進化論は吾人の生殖細胞の如きは祖先より子孫に傳はりて生活し毫も死することなく下等の滴蟲にありても亦其の細胞の分裂あるのみにして親子の懸隔を立つる能はずして又曾て死なるものあるを見ずと吾人に敎ゆもし此の如き意味を以て云ふときは或は死なからん然りと雖も人は己の生殖細胞を以て我れと考ふること能はず生殖細胞は如何に子孫に繁殖すと雖も今日の我てふ精神は我が身體が破滅するときに我が身

第二章　兒童論

體を離れて再び我が肉體を指揮することなかるべし吾人の稱して死と云ふは此の精神が自己の肉體をはなれて有機的活動の止みたるときにあるなりされど兒童は此の如き意味を解して死を畏るゝにあらず彼等の多くは眞の死と云ふ觀念を有せざるなり余の實驗する所によれば或る兒童は死を以て非常なる苦痛と解し又或るものは焼き場に運ばして火葬せらるゝを以て死を恐れたり蓋し兒童が死を恐るゝは實に些細の理由たるに過ぎず而も彼等は大に之を嫌ひ病床にある兒童が厭ふ所の苦藥をも甘んじて飲むも亦死を恐るゝに出づるもの多し然れども彼等は眞に死と云ふ確實なる觀念はあらざるなり其の確念なきも彼等は人の死を聞き人の哀みを見て漠然死の最も恐るべきものなることを知る之れ兒童の自愛性の最も強烈なることを見るに足るべし

十一、恐怒性、

此の情たるや亦自愛性に基つくものにして前に述べたる恐怖とは少しく關係を異にす恐怖せりとて他人には無關係なり然れども恐怒は他人の利益を破壞せんとするものなり恐怖は內心大に沮喪す然れども怒は內心大に奮興す恐怖は未來の危難に對する感情なれども恐怒は現實に經驗する事實に對す恐怖は全然苦痛の感なり恐怒は快樂の元素を包有す即ち恐怒は己の苦痛其の起點となり他人即ち我に苦痛を與へたる人に苦痛を感せしめて快樂を得んとするにあり故に恐怒は苦痛に始まり快樂に終る

恐怖は之を起す原因が有心物たると無心物たるとに論なけれども恐怒は明かに有心物に對するにあらずんば其の目的を達すること能はず時としては無生の物體も之れが對稱物となることなきにあらず兒童往々柱に頭を觸れて泣き且つ怒るも大人が之を慰むるに際し其の柱を打ちて懲らしむること恰も有心者に對する如くせば彼等は滿足して止むに至るべし彼の獵師の射撃せる彈丸が近傍の岩石に衝れるを見て之に噛み付く獅子もまた恐怒の變形にして內心の恐怒なり若し屢其度を重ぬるときは益々其の根抵を

第二章　兒童論

深くし到底拔くべからざる恨となるものなり要するに此の情は人と人とを拒反せしむる所のものにして明かに反社交的感情なり

兒童が忿怒の情を感ずるは何れの頃より始まるかは現今尚未だ知了することを得ざるも苦痛に連結して極めて少時より表はるゝものなりされど其表彰たるや苦痛の表彰と混同し易くして單なる苦痛やら忿怒やら之を知ること難し凡そ半年餘を經過するときは他人の行爲てふ漠然たる意識を生じ身体上の苦痛より分化して此の眞情を發起するに至る一ヶ年餘を經過するときは已に有害なるものに對し復讐の萌芽を含有する行爲を以て此の情を表彰す此のときに當り兒童は食物、玩具等を投け捨て時としては乳を與ふるも更に吸收せずして叫號し甚しきは母の膝より身を脱して疊上に轉々して此の情を漏らすに至る此の時に際して此の情の起點たる苦痛の原因物が無意なるか有意なるかを區別するの暇なく罪もなき人形も心もなき玩具も之が爲めに一擊の下に破壞し盡さるゝに至るべしされば心理學者は進化論の所謂個人の發達は人種の發達に均しと云ふ說を採用して兒童の此の狀を目して小なる野蠻人なりと云ひ怒れる猛獸に類似せりと

第三節　兒童の特性

云ふに至れりされど兒童の忿怒は忽ちにして勃興し忽ちにして消滅す獰惡なる野蠻人と大に異なる所あるべし特に動物の如き感覺上の勃怒に止まらずして已に反對せる一種の力が他人の所爲に出づることを了解し自我でふ意識も亦一層の確實と一層の高尚とを加ふ

已に述べし如く兒童の怒りは野蠻的なり動物的なり然らば兒童の怒りは完全なる意味に於て之を不道と云ふことを得るか吾人は茲に於てか暫く兒童の內界を觀測するにあらずんば直ちに之れに答ふるを得ざるなり何となれば已に述べたる如く兒童の忿怒は忽ちにして發し忽ちにして變轉し容易く鎭靜するものなればなり是れ前に吾人が野蠻人の故意に復仇的獰惡を働らくとは大に異なる所ありと云ひし所以にして兒童にありては意思も薄弱にして理性も亦確まらず感情特り强大なるのみならず尚且つ活動の性に富み利己に强く自制に乏しきは彼等の天性にして此の情の發する瞬間に於ては毫も反省熟慮するの暇なく苦痛の發すると同時に彼等の有する自護自衛の本能は迅速に反動し來りて此の擧動を呈するものなり故に余は曰はんとす兒童の忿怒は只之

れのみを見て直ちに惡なりとは云ひ難しと、されども兒童の怒り易きは事實なり怒れば往々激烈なる殘酷なる振舞をなして顧みざるも亦事實なり惡なりと云ひ難く不道なりと斷言し難き點ありと雖も之を拋擲して此の慣習を得しめば遂に眞の不道ともなり嚴格なる意味に於て惡とも稱し得べき程に至らざる事は保し難し是吾人が後章に於て此の感情の取扱方につきて論ずるの必要ある所以なり」

第二章　兒童論

十二、嫉妬性、

此の情たるや或る種の禽獸にも亦盛んにして忿怒の情の沈靜的變態の一種なり此の情は忿怒と異なりて單に不快のみを感じ更に快感の要素を伴はず其の最も著しき衝動は愛戀之れなり愛戀に基づける嫉妬は嫉妬中最も根柢の深きものなれども些細の原因も亦嫉妬の情を勵ますに足るものなり此の情たるや自負即ち俗に勝ち氣なる人に於て起され易く要するに他人よりも自己のみ獨り幸福を得んとするものには振起され易し兒童に於ては著しき此の情の表彰あるを以て最も觀察し易し何となれば兒童の特性として活動、快樂、模倣の諸性質は玩具の必要を生じ玩具の必要は所有の欲の原因より所有の欲は遂に彼等の第二の本能となる此の本能てそ此の情を釀す所の酵母とはなれるなり見よ、兒童の嫉妬が如何に所有の欲と相伴ふかを、

それ然り嫉妬は所有の欲が財產と云ふ一の本能と化して之より起るものなれども兒童に於ける所有の欲は猶別に獨立して彼等の心意を支配すること大なるものなり故に所有の欲は嫉妬と隨伴して同一の目的に向ひて發せらるゝこと屢なりと雖も之れと混同され易きものなれば少しく區別し置かざるべからず兒童は他人の有する玩具を得んことを父母に要求するに大凡そ二つの衝動あり一は之を得んと所有の欲、一は他人の持つことを好まずと云ふ嫉妬心之れなり斯る場合に於ては父母は縱令其れと同樣の玩具を別に買ひて與へたりとて決して兒童は滿足せざるべし何となれば所有の欲は已に之れにて充し得べきも他人の持つを好まぬと云ふ嫉妬心は毫も之れによりて滿足せられざればなり兒童の此の場合に要求する所は父母が他人より其の玩具を奪ひ取りて自分に與ふることにあるなり

又嫉妬は往々模倣性と混じて兒童によりて標彰せらる彼等が人の革盤を見ては

之を父母に要求し姉兄等の字を書くを見れば紙筆を母にねだり女兒が他の女兒の美服を見ては之れと同樣のものを得んと要求する如きは即ち之れなり大人にありては愛戀に衝動せられて此の情を起せども之れに對して兒童は自愛により て此の情を盛んにす兒童は己のみ母に懷かれ己のみ愛せられんとするものにして他の兒の之れに懷かるゝを見るときは己の懷かれ居ると居らぬとに拘はらず他を排して己獨り愛を專らにせんとするの情切なり

第二章　兒童論

之を要するに此の情は人によりて厚薄を異にし或る人は非常に強く或る人は非常に靜穩なり兒童に於ては一般に利己に強く他を顧みるの暇なきを以て特に此の情の盛んならざるは稀れなりとす

以上述べ來りたる兒童の特性は後來最も品性をつくる上に於て參考すべきものなれば茲に揭げたれども兒童によりて其の快とする所のもの不快とする所のもの決して同一にあらず甲の快とするところ必ずしも乙の快ならず丙の不快とするところ必ずしも丁の不快にあらず其の性質に於て其の程度に於て非常に差あるは固より當然のことなり今以上を一括して其の通性を攷ふるに彼等の感動は

忽ち活潑に起り忽ち消失す、見よ、兒童は突然一泣して淚未だ眼瞼を濕すも尙且つ笑ひ苦痛も喜悅も急激にして急變し心目に影する物に應じて常に新より新に移變しつゝあるにあらずや故に其の經過する時間も甚短かくして只目前の現影によりて感動せらるゝのみ要するに彼等の感動は心意の根柢に達せず只外皮を刺戟するに止まりて內部に深刻するに至らずして而も其影響は激烈なり恐怖も競爭も嫉妬も細事によりて非常に激奮し刺戟物の目前を去り新事物の之に代はると同時に前の激發せる感情は今や其の痕跡をだも止めず一言以て之を蔽へば兒童の感情は百色めがね的一文花火的にして其燃ゆるや激其の變はるや迅速なり

第三章　家庭教育者としての父母の資格を論ず

第一節　父母の置位

前章已に兒童の特性を揭げたれば更に論歩を進めて「誰が敎育するか」の疑問に答へんとす之れに答ふるは本章の本領にして必ずや子女の敎育をなすに最も適當

なる資格を有し得べき位置の人を撰びて其の任を委ねざるべからず

吾人は曩きに進化論を假用して家族の結合は子女教育の起點なりと論じ離るべからざる繩索によりて自然に繫鎖せられて其の子に營養を與ふるものは母なりと唱へ其れを全うせん爲めに或は將來の供給を持續せんが爲に主として勤勞の地位に立つものは父にして一家の安全は全く此の繫鎖によりて維持せらるべきことを論じたりき是れ親子の關係の離るべからざる道の生ずる所以にして一家の團體は徒に資產の結合のみならず肉體の結合のみならず精神上の結合を要する所以の道亦之より生ず

是に於てか家族間には一種云ふべからざる恩愛の情湧き出でゝ相互交際上の脂油となり勞を厭はず力を惜しまず互に相助け相補ひ其の圓滑なる苟も利得を獲んとする念慮の決して爲し得ざる所のものあり此の如き温き空氣中に生じ來れる兒童はそれ果して誰の手に教育せらるゝを適當とすべきか

母は實に愛情深く柔和にして注意亦至れるを以て其の子女の教訓者としては固より適任なりと雖も吾人は曾に母のみを以て滿足し能はざるは緒論に於ても述べたりしが將た又前章に擧げたる如き特性を有して生れ來れる家族の新人物たる兒童は威嚴の十分之れに加はるにあらずんば決して其の堅確なること能はざるは何人と雖も認むるところならん此の母の慈愛、母の熱情を善く威嚴と裁智とを以て調節し其の中庸を得しめんには父たるもの之に力を盡すにあらずんば能はず要するに兒童の教育は確かに其の父母の協心一致を要求するものにして如何なる條件を以て之を辭せんとするも決して許さゞる所なり蓋し家族の結合が自然の大法に出でたりとすれば父母が協心して其の子を教育せざるべからざるは亦自然の要求なりと云ひて可ならん父母已に其の子を教育することが自然の要求に出でたりとすれば確固動かすべからざる天然の義務のありて之を拘束せざるべからず然るに世には其の身の放恣を專にせんが爲めに或は私慾を滿たさんが爲めに親子相離別して更に此の義務を念慮に存せざるものなきに非ず然りと雖も之れ固より親子間の破るべからざる天理を破壞したるものにして此の如きは道德を以て論ずることを得ざるものと信ず

確固動かすべからざる天然の義務とは何ぞ曰く愛之れなり父母の其の子女に對

第一節　父母の位置

する愛は純粋の愛なり其の子女を愛して求むる所は只子女の幸福なり自己の幸福にはあらざるなり然れども愛は自然の感情なり吾人之を義務と云ふ所以は抑も亦說なきに非ず其れ然り愛は自然なり自然なりとて決して之を義務と見認し義務として其責を父母に求むる能はずと云ふ理由の存せざればなり吾人は固より自己の感情中に毫も其萠芽を有せざる新感情を創製する事能はず花を見て美を感せざるものには如何に之を精細に說明し之に雄雌の惹を示し其の孱弱なる有樣花冠の色彩の調和搆造等を示して之を敎うるも徒に分解したるに過ぎず實驗的知識を與へたるに過ぎずして如何に苦心して之れに力を盡くすも美の感は到底與ふること能はざらん自然に存する感情の萠芽ありてこそ之を修養することを得べく之を導びくことを得るなれ特に愛の情に至りては屢過度に陷るの弊あり過度の弊に陷れば愛の眞正の意味に對して缺點を生ず徒に自然なりとして之れに責任を有することなからしめば恐らくは過度に走るか然らざれば反對に愛の念は漸々其の勢力を弱め消滅するに至るべし吾人が之れに責任を附して義務としたる所以のもの他なし實に愛の中庸を得んが爲めなり愛の天理に背かざらんが爲なり故に父母は其の愛情が其の子女の幸福を妨害する場合においては其の快樂を犧牲として可愛き子にも旅をさせざるべからざるなり夫れ愛は父母の至情なり道德も之れによりて成り敎育も之によりて立つ父母が其の子の幸福を求めて他を顧みざるは此の至情の致す所なり人の人たる所以の道を完うせんことを求め其の子女の人品を高尙にせんことを望むも亦此の至情なりカント及びヘルバルト等が敎育の最高目的は品性の陶冶にありと主張せる所以も亦實に此の至情を認めたるに外ならず彼の親子相離別して其の子を顧みざる父母の如きは此の至情を欠くものにして道德を以て論ずるものに非ずと云ひしも亦此の理に基づけるなり果して然らば此の義務を完うせんには父母たるものが其の資格を十分に具備せざるべからず以下三節は其の資格の最も重要なるものと信ず

第二節　愛と嚴との調和

自然が萬物を化育するや時には其の氣候を温暖にし時には之を寒冷にし春あり夏あり秋あり冬あり四季の變候によりて禽獸草木以て其の体を養ひ其の身幹を

伸長し以て其の根を深くし其の体を鞏固にす駘蕩たる春風沛然たる驟雨は皆之れ天地の愛なり炎暑大地を焼き朔風梢を拂ひ寒氣骨を凍らしむる如きは之れ天地の嚴なり自然の母が示す所の化育豈に愛と嚴とに外ならんや

孱弱なること嫩芽の如き赤兒父母の愛にあらずして何ぞよく生育することを得んや未だ自由に匍匐すること能はざる幼者父母の慈にあらずして何ぞよく肢體の成長を完うすることを得んや然りと雖も物を見て忽ちにして恐れ忽ちにして怒り自愛利己の性獨り盛んにして自治心もなく節制心もなき幼兒をして堅忍剛毅の精神と健康活發なる自體とを得しめんとするには父母の嚴あるにあらずんば能はず吾人が前節に於て愛の中庸と云へる所以のものの實に此の愛と嚴との調合を意味するものにして愛の心理より之を致ふるときは屢過度に陷り易き傾向を有す之を調節するものは嚴なり此の二者相和して眞に愛の義務を完うすることを得んか

世人往々愛と嚴とを誤解し優柔不斷姑息の愛を以て自然の至情なりと思ひ殘酷苛激子女の堪へ得ざることを課して嚴の心髓を得たるものと思惟するものあり

第二節　愛と嚴との調和

然りと雖も吾人の謂ふ所の愛は決して優柔の愛にあらず姑息の愛にあらず確實にして而も永久の愛なり一時の愛にあらざるなり彼の單純なる思想を有し一つの希望起るときは他を顧みるの暇なく是非を區別せず善惡を判せず之を要求して毫も憚ることなき兒童に向ひても制すべきは制し許すべきは許し理の示す所に止まりて之を處理するの愛なり決して溺れたる愛にあらざるなり有智正當の愛を云ふなり要するに吾人が云ふ所の愛は自然的のもの本能的のものを理性を以て調和したるものなり之れ蓋し愛の中庸ならんか

愛に伴はざる嚴は酷に陷り易し吾人の云ふ所の嚴にあらざるなり內心滿腔の愛ありて始めて嚴なることを得べし此の嚴道に繫ぐことを得て愛の眞相を失はざらしむ以上論ずる所によりて父母の資格中愛と嚴とが兩々相待ちて車輪の如く二者一に偏すれば共に其正鵠を誤まること必せり

此の二つのものにして父母の腦中に十分に蓄積せられ常に溢れて其の愛子に注

がるゝにあらずんば未だ以て子を子として教育することを得ざるべきなり昔者支那に於ては父は自ら其の子を教へず之を他に代へて教ふるを常とすと孟子は之を勢行はれざればなりと說けりされど之を以て父母の愛と嚴とが其の子の感情と衝突し相背くに至るべしとは普通に於て思はれざるなり說をなすもの曰く之れ普通の子を教へざるにあらず天性惡しき子を代へて教ふるの義なりと此の說或は附會に近しと雖も而も尙理に於て然らざるべからざるを見るされば孟母は其の子孟軻を教へ孔子も其の子伯魚を教へたるの證左は嘖々として世に知られて明かなり三字經にも養不教父之過と云へるに非ずや

それ父母は人類の愛情中最も眞正なる至情を以て其の子を撫育す此の愛情にして飢ることなからんか保育を永續するに必要なる條件たる勤勞の義務も完うせらるべく節儉の德も實行せられ生計の準備自ら整ふに至るべきなり

第三節　德義の實踐

道德の事たる單に善を認めて善とし惡を認めて惡とし惡たるのみにて風教に何等の功績をも有することなし其の惡たるを見て之を斥け善たるを認めて之を實行に表出して始めて德の價値あらんベーコン氏は當時の學者が單に其の教理にのみ止めて其實踐の方法を教へざるを批難して曰く「世間多數の倫理學者は尙其の弟子に美麗なる臨本を授け而して運筆の法と字形を模する法とを教へざる習字先生の如し」と（ジャネー氏倫理學教科書）

氏は亦哲學者が徒に純粹の理原をのみ尋ねて其の方法を示さゝることを述べて曰く哲學者は吾人の前に極めて美麗なる莊大なる模範即ち誠實貴重なる善と云ひ德と云ひ義務と云ひ幸福と云ふものゝ肖像を擔出せり然れども此の如き完美に達する方法に至りては一も吾人に告ぐる所なき彼等は吾人に目的を示せり而も之に達する道路を知らしめざるなり」云々（同上）

それ然り吾人は徒に理論を攻究して以て德を進むること能はざるはベーコン氏を待ちて知りしにはあらず吾人は天下の父兄をして倫理學者たらしめんことを望むものにあらず而も實踐道德者たらしめんと希望すること切なり基督が如何に教を施こし世界の人民を救はんとして三十餘年彼が卓見を以て能辯を振ふとも基督にして基督の實行なからんか何ぞよく現今の人までも之に感動を與へ之

を泣かしむることを得んや孔門の子弟が德行に篤きは論語を一度繙きたるもの心に染銘せざるものなからん之れ儒教の善美を盡せるに因るもの多しと雖も偏へに孔夫子其の人の實踐躬行一度言を以て子弟を導きし結果に歸せずんばあらず行顧言を以て子弟を導きし結果に歸せずんばあらず

されば內藤耻叟翁も曾て

「私は理屈學は大嫌ひである孔子の書物は一切理屈を云はぬ言行を愼しむそれさへ出來れば理屈は知らぬも宜しい世の中を理屈で行ふとすると行けぬ云々」

と云へることありき頭上雪を頂き言動苟もせざる翁の志すところ亦見るべし

嗚呼天下の父母、父母の率うる小兒は熱心に其の欲する所を願望し緊急に其希望する所のものを要求す多情にして又多感なり怒を制すること能はず些事を忍ぶこと能はず名譽の念は高く激し易く慢心強し而して未だ經驗に乏しく事々物々直ちに信を置き其の指導者の爲す所ろに倣ふを之れ事とす子女は只父母の言行を見父母の氣性に感染し一言一行周圍のもの皆彼等の模範たらざるはなし是の時に當り父母たるもの、感化は彼等の生涯を支配するの勢力あるは言を待たず

して明かなり

果して然らば父母たるもの如何にして之れに如何なる模範を示すべきか他なし曰に言ふ所の敎訓は直ちに之を實行に表はして之れに倣はしむるにあり常に道德實踐家として立ち道德的行爲の生き〳〵したる善良なる模範を示し古の誰は此の行あり何處の某は斯々の善行ありと訓誡するよりは常に父の如くあれ母の如くあれと言ひて德義の實行を奬勵するにあり敎訓上德義の實行の重んずべきこと此の如く子女の腦裏に影響すること此の如くなりとせば若し父母にして恭儉の德を缺き夫婦間の素行修まらず德義上の欠點を有するものならしめば如何に愛あり嚴あるも何處に之を施してか其の功を奏することを得んや果して然りとせば彼等を正當に撫育し得ざるのみならず子女の父とし母として吾人は全く其の資格を有せざるものと認めざるを得ず

是故に天下の父母たるもの宜しく先つ國家を愛するの念に於ては己先づ內心に燃へて而して子女を燃やす人たらざるべからず君に忠なること之を楠公の境遇にあらしめば赤坂千窟に於て天下の擧兵を一城の下に集め稟として王業を輔け

湊河に戰死するの覺悟あらざるべからず親に孝なることは若し其の位置にあらしめば小松平中將の如くあるべき決心なかるべからず公利公德を重んじ社會に盡くすの實を擧ぐる人たらざるべからず夫婦和親、温良篤行の人たらざるべからず常に正義に同情を厚くし苟も義の存する所行ひて盡さずんば止まざるの人たらざるべからず親愛の情に厚く家族は勿論親戚朋友に慕はるゝの實あらざるべからず利によりて事をなさず信義を重んずるの人たらざるべからず獨立の氣性を有し人に依頼せざるものたらざるべからず自己に對するの義務は常に善く守り適度に攝制し得る忍耐あらざるべからず是等の覺悟と實行とを有し至誠至忠勤めて倦まざるの人にして始めて父母たるの天職を掌どるの資格に合することを得んか

退て我國の父たり母たる人々より組織せらるゝ現時社會の有様を觀れば吾人轉、大息に堪へざるものあり

第四節　父母の觀察力

父母の資格の第三は其の子女の性質を洞察し得るの明あることを要すそれ兒童

を撫育せんとするもの宜しく兒童の身體及び心意につきて充分の觀察力を有せざるべからず其の觀察力にして不十分ならんか又に其の子女の不幸を招くべし蓋し幼時に於ては身體は其の骨格未だ堅まらず筋肉未だ發達せず營養の機關も亦甚軟弱なれば是の時に於て之を觀察するの明あらざれば些細の誤りより其の子の將來の事業の根抵を失はしむるに至るべし特に心意の內情特性を確實に知り置くことは其の子女を教育する上に於て最も必要なることにして之を確實に洞察し得んには幼稚期に於て父母が熱心に絶ねず心を之に注ぐに非ずんば能はざるべし何となれば他人及び教師等は其の子の稍長じたる後にあらずんば之れに直接するの機會を得ること難し父母は彼等の生れたる日より直接に之れが保護の位置にあるものなれば其の之を觀察するの時間も永く尚且つ子女は安んじて父母の膝下に於て思ふことを欲することを吐露すればなり年齢稍長ずるに至れば天眞の性質を隱蔽するの弊あるのみならず自裁の能力も增加し外力の觸接を厭ふに至り成るべく之を避けんとする傾向あるものなれば其の內心にまで立ち入りて之を洞察するは頗る困且つ難なりとす盖し家庭の教育が他に優りて價値

あるは其の幼稚期に於て彼等の柔軟なる腦髓に大なる影響を與ふるを以ての故なれば也も亦其の性質を能く洞察して其の個性に適したる教育を施すを得て後來其の子女の方針を定むる上に大なる利益を與ふればなりされど兒童の心意觀察の事たる甚の專門の心理學研究者と雖も恐らく容易の業に非ず特に兒童の感情の如きに至りては一種大人と異なる點のあるありて其の觀察を誤り易きは止むを得ざることなり

是を以て吾人は天下の父母に對して心理學者的に其の兒童を觀察するの明を有せざるべからずと云ふにあらず進化の理論を證明するの材料を學者社會に供給するの義務を負擔せよと云ふにあらず心理學的に觀察する固より望む所なり進化論の證明の補助となる固より願ふ所なり然りと雖も斯る希望は現今の狀勢に於ては到底達し得べくもあらざること火を見るより明かなり然らば如何なる觀察力を有せざるべからずとするか然り吾人が父母の資格として要求せんとする觀察力は理學的觀察力されなり即ち理學者が理學上の現象を觀察するが如く虛心平氣に憶測を交へず感情に眩まされず正確に在りの儘を判斷するの力あらん

ことを望むものなり

それ熊を獲んとする獵師は熊の皮を被り鵝鳥を獲んとする熱帶の土人は鵝鳥の皮を着ざるはまく人の知る所なり俗人風とならざるべからず兒童の觀察者は宜しく兒童の位置に其の心を置かざるべからず斯くてこそ始めて其の實相を偵察し得べし吾人が屢々言へる如く父母が子女に注ぐ愛情は決して他の感情の比にあらず此の愛情ありて茲めて自己を兒童の位置に置き兒童の心を以て己の心となし能く其の心情を洞察し得べきものにして其の觀察する機會の多きも亦決して他人の比にあらざるなり

天下の父母此の愛あり此の機會ありて而も之を觀察し得ず否之を觀察することを好まず一方に於ては四五歳の兒童に直ちに大人の所作を命じ一方に於ては子供なりとして放任し更に頓着せざるものあり特に現時の母親の多くは動もすれば強烈なる愛情の爲めに却て虛心平氣に觀察することを妨げらるゝの恐あるなり愚者を見んと欲せば己の親を見よと云ふ俗諺は父母が子供の愛即ち嚴に伴はざるの愛に溺れたることを云へる詞にして吾人は此の俗諺が決して少數の父母に

のみ當るに非ざるを嘆せずんばあらず

父母の弊として、其の子を愛するの餘り屢、此の情に制せられ子女の言ふこと、爲すこと、遊ぶこと等に至るまで他人の子女に優れる點のみ發見せられて其の弱點を洞察すること難し之れ吾人が理學的觀察力を要求する所以なり此の觀察力ありて始めて好而知其惡、惡而知其美の實を擧ぐることを得んか

要するに父母の天職の一として先つ其の子の身體の如何を觀察するの明を要するは勿論、其の心情を洞察するの能あらざるべからず怯懦なるか大膽なるか優柔なるか、頑固なるか事をなして其の結末をつけ得るか然らざるか約束に對する義務の念は如何に模倣することの巧拙は如何に喜怒の狀態は如何に擧げ來れば日も亦足らざるべしと雖も是等は其の性質の幾分を表出するものにして四五歳の時に於ては特によく觀察し得べし

三つ兒の魂百までとは古來より傳ふる詞なり此の時に當て其觀察に誤りなからんか大に其の子の幸福を增すものにして優點と劣點とをよく見抜きて後敎育に着手して始めて其の短を補ひ長を進むることを得べし

子女の智識に關する觀察は比較上容易にして誤りも亦少なきものなれども其の感情の觀察に至りては最も幼少なるときより之を觀察し置くにあらずんば決して其の好果を得難きものにして是の時に當り十分之を觀察するの能あらば恐らく其の子の幸不幸の大部を支配し得んと云ふも不可なからんと信ず

岡目八目とか云ひて他人の子の優劣は少しく注意すれば大抵見難きにあらざれども自分の子の優劣は之を見分くること至て難く父母は之を愛するの餘り優點をのみ見て己の子を稱贊するものあるは中外異なることなし、されば大學にも人莫知其子之惡莫知其苗之碩と謂ひて人性は其の親愛する所に於て辟すと述べられたり

天下の父母は只管其の子の他に優れるを望んで飽くことを知らず之れも未熟なり何も不滿足なりとして幼年の兒童に爲し得ざる事までも要求するの癖あり之れ大に顧みざるべからざる事にして兒童の心意を害する多くは此の種の要求にありとす誰か其の子の悧發なるを望まざるものあらんや、されど其の要求を大にして兒童の力に適せざることを以て苦しむるは之れ助けて長ずるものにして寧

ろ宋人の苗に於ける結果あるを豫想せざるべからず

吾人は一般の父母に對して理學的觀察力を具ふることを要求せり之れ敢て出來難きことを望むに非ず要は只辟変なり過大の希望を懐かず時々刻々接する毎に年齢に應じて其傾向を認むるの謂にして十分の教育なきものと雖も決して有し難きの資格にあらず古人も臣を知るは君に如くは莫く子を知るは父母に如くはなしと云へるにあらずや然りと雖も現今の父母たるもの多くは此れを欠き其の觀察を他人即ち教師にのみ委ねんとすもし夫れ充分の愛あり嚴あらば何ぞ他人に此の大事を一任するを自ら其の局に衝り十分の好果を得べきなり特に學齢以上に至れば父母教師は一致して專ら之れが監督と觀察とに力を注がざるべからざるは勿論なるに家庭と學校との連絡が未だ以て不十分たるを免れざるは抑も亦父母の罪と云はざるべからず何となれば現時の學校教師は勉めて家庭と連絡を謀るも之を滿足することを能はざるにあらずや之れ偏に責め父母に存する所以なり

第四章　家庭論

第一節　家庭創立者としての父母の權利及義務

上章已に論じたる責任と資格とを有すれば茲に其の血族生存の爲めに一つの小團体をつくり一定の居住を構ふるは勿論なりとす一定の住居あれば此に所謂家庭なるものを生ず、されば家庭は一の血族團体が一定の住所を備へたるの謂にして之を形つくらんには須らく其の團體の首領なるものが其の勤勞の義務を負はざるべからず何となれば一定の居住を構ふれば其の收入によりて生計を營むものと勞働によりて生を營むものとに論なく相應の財產なかるべからず相當の監督なかるべからず此の財產と監督とは力に於て智識に於て最も卓越せるものが此の義務を負擔するは當然なり是に於てか家庭中に保護者と被保者との別を生ず其の保護者たるものは父母なり即ち父母は其の團体の主領にして勿論勤勞の義務を有し保育の任を帶ぶ故に之れに伴ふ權利を有す之れ所謂親權にして父母の共有權利なり兩親に於て決して輕重あるものに非ず蓋し幼兒は微弱にして自

護自營の道なり父母の之を養育するにあらずんば一日も生育すること能はずよし發育すとするも之を敎育せざれば眞の人となること能はざるべし之を愛し之を敎育するは兩親たるもの、任にありて親權の基づく所は其の子女の利益にありて父のみ之を私することを得ず母たるも亦同等の權を有すれども雖も命令二途に出で一家庭に二ケの權勢あるは子女を敎育し家庭を保持する上に於て大に障害を來すべきものなれば特に此の權利の執行者としては父を以て適任とせざるを得ず勿論母と雖も決して此の權を失べるにあらざるを以て父の不在若しくは死亡の際に於ては其の親權執行者となるは論を待たず斯くして父は自然に一家の利害子女の保育上の都合より家庭に長たるの地歩を占めて從ひて家族は之れに服從するの義務を有するは古今東西共に異なる所あるを見ず一家の和平が其主權者たる戶主の命に從ふにより得らるゝことは恰も一國の治平は國民が其の君主の命令に服從するによりて始めて望み得るが如しそれ然り父たるもの、は一家の主權者にして家族は之に服從し行かざるべからざるは上に述べたる如くなれども母たるもの、地位たる亦決して自餘の家族と同等の地位にあるものにあらず頗る重要なる義務を負はざるべからず即ち內は以て家主を補助し老少婢僕の長となり一家團欒して幸福なる家庭をつくりて之を保持することをつとめ外は以て他人朋友との交際の禮を全うし一家の對面を保たざるべからず社會の未だ進歩せざるに當てや衣食住皆自ら之をつくりて生活を營めり然れども人類漸く增加し生存の競爭起るに及び並ぶ方には大小の團體を形成し他方には分業の法起る是れ社會發達の歷史に徵して明かなる理法にして一家の事業生計の術其の繁を重ねるに隨ひて之を處理するに分業の法を以てせざるべからざるは自然に起る要求なりされば夫は外にありて專ら其の職に勉勵し婦は內にありて內政を掌どるは固より當然の事なり特に家庭に於ては婦人の力に依賴して始めて全きを得るもの多く飮食衣服兒童の養育の如きは主として一家の主婦の任に歸すべきものにして亦女性に適する天稟の職掌なりと云はざるべからず世には男女同權論を主張いて男子と競爭して公然たる職務を執らず交際場裡に

運動せざるを以て婦人の恥辱婦人の卑劣なりと考ふるものあり之れ大に誤まれる議論なりと云はざるべからず福澤翁は男尊女卑の弊は專ら外形にあり其の内實に至りては時としては女權強大にして十分の勢力を逞うするものなきに非ずと論せられき吾人惟ふに内政を處理したりとて決して婦女の恥辱とするに足らず外に出でゝ專ら公職に當れりとて決して男子の誇るに足らざる所なり何となれば内にありて家政を整理するも要は只一家の事業にして事を外に執ること能はず事を外に執るにあらずんば家内決して安全ならず各身體の強弱と智慮の深淺とにより其の適する所便なる所を撰び天禀に從ひて之を分擔したるに過ぎず若しそれ女子の天職を盡して男子に行はしめんか實際に於て非常の不便あるのみならず其の實功を擧ぐること固より難事なるは世人の常に歌ふ所にあらずや是に於てか家事の圓滑と愉快なる家庭とをつくらんとせば宜しく思想綿密なる女性の力によらずんばあらず述べて茲に至れば母たるもの妻たるもの任務豈に決して男子に讓らん何ぞ必ずしも僥々しく男女同權論を唱へて形式を之れ立つるの要あらん

格氏曰はく(家庭叢書第四卷)

「母親は勞苦を厭はず身命を惜しまず一意專心家務に從事し夫に仕へ兒女を養ひ常に愛情を以て家内を調和し彼我の心を一團に結合するに孜々として怠らざるものなれば母親は實に家族生活の中心とも稱すべし」云々

氏は亦一家の主人たるものゝ位地及び職務を叙して曰く(同書)

「一家の主人は其の職業の爲めに多くは家外に在りて勤勞し社會に對して家族を代表し及び自己の家族と他人の家族との關係を處理し社會國家に對する位置を含む斯の如き事情より日々宅に居て細事に立ち入るの暇なく常に嚴格なる職業的事業に從事する等の事情によりて益々其威權を增大にし家族に對しては最高の裁判者にして母と雖も之に服從せざるを得ず」云々以上述ぶる所によりて家庭に於ける主權者の權利と義務の存するところを大略明かにするを得たり以下此等によりて形成せらるべき家庭は果して如何なるものたるべきかを論ぜんとす

第四章　家庭論

一祖先ノ觀念　祖先を敬愛し其の德を慕ふの念は敎育上大に必要なるものにして家庭の精神は此の觀念に基づきて生ずそれ祖先がなし行ひたる善德善行は口碑として記錄として子孫の目に或は筆に遺され其の祖先の名譽は大に子孫の面目となり其の一家に屬する名譽幸福は全く己の名譽幸福と一致せしむるにより始めて家庭の精神なるものを生ず

我國は古來より祖先に對する觀念は他諸外國に比して一層の深きものあり祖先の名を穢す程其の子孫たるものが腑甲斐なきことはなく父祖の業を嗣ぎ父祖の行を行ひ父祖の遺訓を守るを以て無上の義務とし來りたるものにして士道の盛んなるときに當りては此の觀念も亦最も勢力ありき然るに維新以後に至り大義名聞の敎は地を拂ひて其の跡を止めず人情は浮薄に流れ子は父の罪を發き父は子を法庭に訴ふる如き不德の輩續々現出し己の名利にのみ汲々として毫も祖先を思はざるに至る之れ一は社會の進歩と共に國家の單位が個人となりて家庭を以て單位となさゞるによると雖も偏に明治の革命より以前の舊藩を廢して士族に一時其の職を失はしめ衣食に窮厄し路途に迷はしめたるの結果にして彼等が

第二節　家庭の精神

從來有したる士風は早や此の時に當りて已に彼等の腦中に存せず祖先の功勞は全く是の時に至りて何等の勢力をも其の子孫に及ぼさゞるに至れり彼等は是が爲めに曾て屈せざる膝を屈して恥とせず卑賤なりとして嘲けりし職業をも忍んで之を執るに至れり彼等の家風は之が爲めに破られ彼等の節操は之が爲めに挫かれ數十代維持し來れる御家の精神は茲に消滅の運に歸することゝはなれり當に士族に於けるのみならず農工商に至るまで維新の革命より西洋熱に眩まされ耳に聞くものは西洋を畏れ目に見るものは西洋に感服して遂に此の有形的の活動機關の爲めに彼等の腦中より過去でふ考を取り去らしめ將來のみ豫想せしむるに至れり此に於てか祖先の觀念は一般に輕薄とならざるべからざるは覩易きの理なり現時地方山間の村落に於ては尙未だ家風なるもの存し嚴にして且つ禮ある祖先の習慣を依然尊守せるもの少なからざれども都市の人の多くは祖先に對する觀念の薄きこと二三代の先祖をもよく知らざるもの多きに非ずや

加之現時の官公務に從事せらるゝ人士にして細君の出產と稱して欠勤するものあり子女の病と稱して其の勤務を欠くものあり然りと雖も祖先の供養をなすが

爲めに一日の休勤をなせるもの祖先の墓參の爲めに欠勤を請ふもの殆んど少しと云ひて可なり斯く論じ來れば現時に於ける紳士の腦中に宿せれる祖先の觀念亦微々たるを見るに足らん此の點に關しては、將來敎育者たるもの、一考を煩はすの價値大に存す

人にして祖先の觀念なからんか決して着實なる業務につくを得ず往々社會の危險なる分子となるの恐あり之を近來の道德上の統系に徵するに兒童の犯罪が私生兒中に最も多きを見る以て家庭は祖先の觀念が其の重もなる志想を支配して苟も此の觀念に乏しきもの即ち來歷ある家庭に生活し得ざるもの、多くはまた着實なる人物となることを得ざるを知るべし特に祖先の觀念に乏しき家庭にありては多くは家風なるもの、存する事なり從ひて一定の法規もなく家庭の各員は各仕度き事をなして一家庭と云ふもの、上に資產の結合と肉体の結合とはあらんも更に精神上の統一なく之が柱礎主權も有名無實に歸するの傾きあり

今や各社會に於ける競爭は益其の激烈を加へ優勝劣敗の活劇を演ずるに至れるを以て賢は益賢愚は益愚と云ふ如き有樣となり社會の下層に位する人民は益其の活路を狹められるいの觀あり隨ひて家庭の快樂は益得難きに至ると同時に祖先の觀念は亦愈、消耗せざるを得ざるなり

バルメル氏は家庭の精神を分けて Familie Sence と Familie Spirite との二ッとし前者は靜かなる性質を有し家庭の生活を愛し家庭の善美なる點を受け染みて其の家に忠實なる精神を指すものにして後者は進歩的の性質を有し一家の名譽利益を力強く進めんとするの元氣なりと云へりそれ一家の名譽利益を進めんとするは其の祖先の名譽を進めんとするの精神より出で一家に忠實なるは祖先を愛するの感に出づ此の精神此の感じ從來我國に於て士氣の盛んなるときに表はれしも今や此の風地を拂ひて無し嗚呼我國四千萬の人士果して今昔の感なきや否や

二、家庭の風儀、夫れ祖先に對する觀念は家庭の精神を確固たらしむる大要素にして之れにつぎて家庭の風儀は家庭の精神を堅むる第二の要素たらざるべからず、それ風儀の正しきと然らざるとは一家の幸不幸の由て來る基にして世の尊重を受け他人の敬慕を招き其の家庭に生活する各をして實着なる行爲を奬めんとするには茲に風儀の純良なるものなかるべからず孟軻は如何にワシントンハ如

何に此等の人物一として純良なる家風の下に養はれざるはなきに非すや此の如く風儀は一家に必要なる者にして祖先より代々養ひ來りて之を子孫たるものが遵奉する程其の根抵の固きはなけれども主權者其の人の性質如何によりて新に一の良習をつくり一家の不文憲法とも稱すべき勢力を有せしめ之が實行を怠るなくんば以て家人を導くに足るべく以て一家の和樂を求め得べし蓋し一家の老少男女が家風の內裡に生活するは恰も鳥雀の篁叢に於ける魚鼈の深淵に於けるが如く家風濫るれば彼等は一日も安息することを得ざるべきなり

若し夫れ正良なる慣行を守り言語を丁寧にし家族の實行すべきこと及び實行せざるべからざることは主權者先つ之を實行し常に祖先の遺風を重んじて之に敬慕の意を表し家內の內情を察して老少となく共にはなはだ談じ說諭して同意同感を得て之を一つの法則となし一家內の秘事は何處までも內部的として之を家庭內に止めて外部に漏らさゞるの風を養ひ家族間に於ては主權者は勿論自餘のものと雖も心中更に隔壁を置かず毫も表裏なく常に親切を主として相助け相補ひ外に對しては頗る鄭重と好意とを旨とし不遜の言語擧動等は毫も許さず演不親切の

行爲は最も擯斥するの風を造らば溫良の風習自ら一家に滿ち恭敬の美求めずして家族間に顯はれ一家爲めに和平にして始めて家庭生活の神髓を得たるものと云ふべし是に於てか家庭の精神は益々鞏固たることを得べし

第三節　兒童教育所としての家庭の價値

パウルゼン氏曰く「技術的及び知識的發達に於ては家庭は常に公會の場所の補助を假らざるべからざれども德育及び公德を養ふにつきては家庭は特に適當の場所なり何を以て家庭は公德を養ふに適するか宜しく社會に於ける關係を見るべしそれ社會の關係は之を左の三者に歸することを得

一、高位者より下位者に對する關係

二、下位者より高位者に對する關係

三、同等者間相互の關係

是等の關係は家庭に於て已に模型的に存在す父母が子に對するは第一の關係を示し子女が兩親に對するは第二の關係を示し夫婦兄弟姉妹間の關係は第三に相

當す是等の關係は家庭はど最も親密なる純粋なる形に於て顯はるゝは他に其の比類を見ること能はず」云々

それ然り實に家庭ほど上下の關係の親密なる團體はあらざるべく家庭程相互間の同情に厚き團體はなからん之れ實に祖先を同うし互に相係屬し恰も喬木の枝葉あるが如く自然的の關係を有し社會てふ團体の中に於て家庭てふ一小部分を堅く形成すてふ感情を有するに非ずんば何ぞよくバウゼン氏の言の如きを得んや思ふに家庭内に於ては一の勢力者即ち主權者なるものありて家族は之に服從し係屬すてふ感情は何人にも存在する所にして一家統一して主權者の監督の下に一致して動作することは將來社會に立ち秩序を保ち交際を親密にする上に最も必要なりとすればライン氏は家庭の價値を擧げて之を三點に歸着せしめたり今其の大意を陳ぶれば

第一、家庭に於ける人々は相互に關係し善く統一す、それ統一は教育上最も重要なる條件なれば家庭は教育に最も良き地歩を占むること明かなりと云ふべし蓋し家族は血族を同うする所より互に相關係して凡ての事皆恩愛の情より起る此の

恩愛の空氣こそ兒童の心中に温順の風、同情親切等の德を養ふの基なれ若し不幸にして家族圓滿の生活をなすこと能はずして是等の諸德の萌芽を養ふこと能はざる如きことあらば後日救ふこと能はざる害毒を殘すべし惟ふに家族内に於ては其の範圍狹小なるを以て同情を及ぼす區域も亦從ひて廣からず是れ同情親切及び將來必要なる公德を養ふに必要なる條狀を具へたるものと云ふべし

第二、家族は互に係屬し居るものにして父たるものは一家を主宰し外にありては凡て一家を代表して職務を執り母は内にありて家事を勵み兒童を撫育するを以て兒童は日々此の事を觀察して自ら父母に服從し行くべき感情を生し從順の德を養ふに至る此の感情たる此の德たる社會に最も必要なるものなり此の感情よりして長は幼を助け幼は長を敬するの美風を薫陶し他日社會に出づる適當なる準備を與ふ

第三、家庭生活に於ては家庭中の幼少なるものにつきての最も信用すべき智識が得らるべし是は其の幼少なるもの始めて生れてより漸々進歩し行く有樣を知ることが家庭に於ては充分に出來ると云ふこと及び家庭に於ける人々の關係が他

に見得ざる如きはなほ親密なることよりして自ら生ずるものなり云々

實に兒童陶冶に關しては家庭が有力なる教育所たることは以上によりて明かなり吾人は前章に屢々述べしが如く家庭の特色は兒童の特性をよく洞察し之に隨ひて教育を施すにあり兒童の特性を確實に知ることは教育上最も重要なる點にして農家が土地の地味を知らざるべからざるが如く其の性質をよく知りて特殊の教育法を適用することは只家庭に於て之を望むことを得べし學校教育は多數の生徒を一級として之を管理し之を教授するものなれば固より普通一般の陶冶を施すに過ぎざれば其個性を矯め天性特有の良質を沒せしむるの傾あるは止むを得ざることなり特に兒童の感情に至りては其の天賦各人によりて甚しき差違を呈するものなれば教師が兒童の目前に物體を並列して言語の媒介と五官の觀察とに訴へて直接に兒童の智能上に其作用を施す如き智的開發とは大に其の趣きを異にし教師の力を及ぼすこと決して智能上に於ける如きを得ざるべし是れ在來の學校教育が兒童の感情を教練せんが爲めに分毫も力を用うることなく善良温和慈愛等の教育は只兒童をして之を口に言はしむるに止めて眞に感せしめ心に染み込ましむることをなさいりし所以ならん此に關しては吾人は家庭を措きて他に此の萌芽を養成する所なきを信ず勿論學校に於て授くる脩身科の如きも多少生徒の感情をつくるに影響すべけれども其の時間の少なき其の感動を與ふる機會の少なき之を朝に夕に物に觸れ折に觸れて最も親しき最も尊敬する父母の感化によりて彼等の心情をつくるに比しては到底同日の論にあらざるを知る

家庭に於ける教育上の價値は以上によりて略ぼ其の大要を述ぶるを得たり然ら ば如何なる家庭が最もよく彼等の心情を養成し得るか如何なる習慣が彼等を感化し得るか是れ暫らく吾人が採用すべき家庭につきて論ぜざるを得ざる所以なり

第四節　現時の家庭を論ず

現時の家庭たる之を概觀して其の正否を判ずるは頗る困難なることにして未だ世に立ち一家も組織したることなき無經驗なる吾人が其の當否を論ずるは聊か

生意氣の誹りを免れざるも吾人の眼に映ずる吾國現時の家庭の有樣は亦以て以下の議論を起さゞるべからざるに至れり卽ち吾人は現時の家庭の積極的方面を見たるにあらず寧ろ消極的方面を觀察し之れを過去の家庭に對比して少しく論せんとするあるのみ

第四章　家庭論

從來我國の風として祖先を敬ひ一家の主人は必ず毎朝祖先の位牌に對して敬禮を行ふの風能く行はれ從ひて子女に於ける祖先の觀念は知らず識らず腦裡に感染し祖先の遺訓は大なる勢力を以て彼等の心情を支配したりきされば貝原篤信著家先生の如きは益〻其の風を奬めんとして次の如く述べられたりき(貝原篤信著家道訓二の卷)

「先祖は子孫の根本なり年へたゝり遠しと雖も思ひしたひて忘るべからず時節の祭つゝしみてあつくし本に報ずるの心おこたるべからず木の根につちかひ養へば枝葉はしげける先祖にあつくすれば子孫さかふる理あり」云々、

と之れ世人が祖先を尊敬するは只家の榮へんことをのみ願ふに傾かんことを恐れ本に報ゆるの念よりすべきを敎へられたり又(同書三の卷)、

「人の子孫たるものは其の家の先祖の家法をよく失はざればたとひ其の子孫才力なしといへどもよく其の家をたもちていつまでも長久なり其の故は其の家を始めて持ちたてたる先祖はそれほどの才智あり其の上わかき時より事に多くなれ艱難をへて萬事に熟し世のありさま人の心の善惡人のうへ苦をよく知れり此の故に其の人の立たる家法は心ず堅固にしてやぶれなし子孫よく其の法を守ればやぶれなくわざはひなし其の子孫才力聰明すぐれたる人ありともはじめて家を持ち立てたる先祖にはおよばざるとて其祖をないがしさだめ置きたる法はむかしのことにて今の世にあはざるとて其祖をないかしろにして其の法をやぶり新法をたつればかへつて其の家亡ぶ先祖の法を手本にして守り行かば其の家いつまでも長久なるべし」

と述べて子孫らがなまじひに祖先の家法を改むるの非なることを論じて祖先の遺訓は之を永く家庭に實行すべきことを奬められたりき要するに家道堅固にして且つ祖先を尊敬するの情の厚きは當時の社會に於ける士氣士風の確立せるをも以ても知るべし彼等が如何に祖先の面目と自己の面目とを保持せんとするの精

神を固守せしかを見よ彼等は借金の證書に「若し期日に返濟致さゞる時は大勢の前にて御笑ひ下さるとも苦しからず候」と云ふが如き文句を以て證書を遣り取りして少しも疑はず又人と誓文を取り交はす時に於ても「弓矢八幡照覽あれ」と云ふ如き句を記して誓の堅固なることを證する等現時の社會の風儀現時の有樣を以て見れば實に想像外なること尠なからず特に封建割據の時代に於ては各互に他に及ばざるを恥ぢ軋轢競爭の結果德義の制裁の整理せる各個家風の純潔なる義は泰山よりも重く生命は鴻毛よりも輕く腸中玲瓏として一點の曇りなく廉恥心の強きこと武士は食はねど高楊子とか云ひて不義に食まざるの覺悟ありき此等の節義を維持せし原動力は只一の祖先てふ觀念ありしのみ是は過去に於ける士風の一端を掲ぐるに過ぎざれども之れ當に男子にのみ止まらず女子の精神の健氣さも亦當時の男子に讓らざるものありしは敢て吾人の喋々することを要せざらん

以上は士分以上につきて述べたれども以下の町人等に於ても彼等は學問に於ては武士には及ばざれども胸中一の信ずるものありて神に佛に善の善たる惡の惡たるを知り其のなす所眞誠朴直にして商估は暖簾にかゝはると云ひて決して粗末の物を賣らず百工其の名を重んじて一物を製するにも決して苟もせず名を顧みて利を顧みず常に勤儉を之れ貴び毫も今日の如き奢侈なることありしを聞かざるなり

女子の敎育は江戸幕府時代に於ては多少寺小屋手習指南所等に於て就學したるものなきにあらざれども概して家庭に於て父母の敎訓を受けて生長せるものゝ如しそは益軒先生の童子訓五の卷に

「男子は外に出で師にしたがひ物をまなび朋友にまじはり世上の禮法を見聞するものなれば親の敎のみならず外にても見きゝすること多し女子は常に內に居て外に出でざれば師友に從ひて道を學ぶことなし、ひとへに親の敎を以て身を立つるものなれば父母の敎を忘るべからず親の敎なくて育だてぬる女は禮儀を知らず女の道にうとく女德を愼しまず且つ女功の擧びなし是皆父母の子を愛する道を知らざればなり」云々

以て如何に家庭の敎訓が女子の心を維持せしかを見るべし江戸幕府時代に於け

る家庭に於ては吾人は大に見るべきものあるを信ず特に貝原善兵衛氏の如きは益軒先生の著書數部を鬻きて先生が一代の生計を送る費用を賄ひしと云ふ信偽未だ知らずと雖も兎に角當時如何に家庭に於て女子の教育に意を注がれしかを見るに足らん

舊時代に於ける家庭の精神は大概之を窺ふを得たり吾人は之に比して現時家庭の精神が大に薄らぎ祖先の名譽とか暖簾を重んずるとか云ふ如き誠心の固からざるを憾みざるを得ず之れ吾人が今日の家庭を其のまゝ採用し得ざる第一の點なりとす

吾人は更に眼を轉じて現時の家庭に於ける統一如何を考へんとす何となれば前屢述ぶる如く家庭教育は統一ありて始めて其の價値を顯はすものなればなりそれ現時の小學校及び中學校に於ては一定の方針と一定の主義ありて規律も亦確然として具はりあるも會々其の統一を欠くが爲めに生徒の不穩を來し學校騒動の新聞に雜誌に其の醜聞くに堪へざるもの多々なり況んや現時の家庭の有樣を以てしては特に主義もなく規律もなく父は父の意見を以て其の子に接し母は母

の意見を以て其の子に對す祖父も祖母も皆然り此に於てか一の連絡あるなく統一あるなし兒童は常に種々異なれる方針の教育を受け明日は祖父祖母より放任主義の教育と感化とを受け今日は父母より干渉主義の教育を受け明日は祖父祖母より放任主義の教育を受け或は父は其子に優柔なる教育をなし母は其の子に嚴重なる躾方を行はんとする等其の無統一なること實に現時の家庭はなはだ甚しきはなからん之れ吾人が感情教育を施すに當り現時の家庭を採用し得ざる第二の點なりとす

吾人が次に論ぜんとする家庭の欠點は一般に奢侈に流るゝこと之れなりそれ維新以前に於ては戸々皆節約を本とし特に家庭に於て女子を教育する上に最も注意せる所のものなりきされば益軒先生も其の童子訓の五の卷に

「人の妻となりては其の家をよくたもつべし妻の行おしく放逸なれば家をやぶる財を用うるに儉約にして費へをなすべからず奢を戒しむべし衣服飲食品物など其の分にしたがひおひにあひたるを用うべしみだりにかざりをなし分限にすぎたるを好むべからず妻をごりて財を費やせば其の家必ず貧窮にくるしめり」云々

と云ひて萬事奢を戒しめられたりき又同書の五の巻に

身の飾りも衣服の染色摸様も目にたゝざるをよしとす身と衣服とのけがれずしてきよげなるはよし衣服と身の飾にすぐれてきらを好み人の目にたつはなるはあしゝ（中略）すぐれてはでやかに大なるもやうは目に立ていやし我が家の分限にすぎ衣服にきよらを好み身をかざるべからず云々

と述べて女子が美服をつけ身の飾りをはでやかにすることを戒しめられたり之れ徒に益軒先生の說として擧げたれども當時の人情質朴にして其の節儉に注意せられたることは現時年老ひたる人の如何にも忠めやかにしてよく經濟の道に長け儉約にして萬事に念の入りたるは當時の餘風の致すところなるは吾人が今更云ふまでもなけれども維新以前には庶民儉約を以て第一の務めと心得只の紙片一枚にても決して無用視することなく一切れの絹紐が佩刀の下げ緒を結びしは決して奇談とするに足らず、そは舊幕府時代の庶民の風として百姓の如きは子生れば必ず屋敷の周圍か畠の明き地を求めて桐を植ゑて其の子成人の後嫁入り婿入りの簞笥長持ちの用材とせりと云ふ如き一例を以ても明かならん此

等の事を以て現時の人情に比すれば果て如何の感かある贅澤に家具を飾り子女を飾り已を飾り以て他に誇らんとし目前の小利に汲々たる現時の人情誰か二十年後の功を期して今日より其の子女の爲めに桐を植うるの迂をなすものある二十年後の計すら猶然り況んや百年の計と稱する子女の敎育亦以て其の難きを見るなり吾人は敢て桐を植うるを以て強ちに是とするにあらざれども概して當時の儉約の風を見るに足るべし古封建時代に於ては數十萬石の大名が小倉袴に木綿單衣を着けたるの例もあるに非ずや現時一日の賃錢十二三圓の黑塗馬車を假り豪富を裝の紳士輩果して慚愧の感なきや否や特に今日の家庭稍〻中等の生活をなし得るに至れば些細の事にも美服をつけしめ驕奢に其子女を導くの風あり實に心得ざるの甚しきにあらずや或人は之を評して錦の袋に子女を包みて絞め殺すに異ならずと叫び或る人は子女高慢心養成的家庭なりと評せり吾人は此等の評の一々的中せりと云ふにはあらざれども漫りに格外の美を飾り一家の經濟をも顧みず相競ひて貴族的に傾くは子女の品性をつくる上に於て決して忽諸にすべからざるの點なりとす之れ吾人が現時の家庭を採用し得ざる第三の點なり

とす、

現時の家庭に於ては母親たるもの一般に教育の足らざるが爲めに兒童の唯一の親友として唯一の指導者として大に遺憾なき能はず、それ吾人が父母の資格の一にして理學的觀察力を有せざるべからざることを述べたりき、若し父母の觀察力が恐らくは此の資格に適する丈けの修養ある母親は少數ならんさりとて過去の家庭と雖も敢て此の資格を有する母親の多かりしと云ふにはあらず、吾人は只現時の婦人は教育を受けんと欲せば受け得ること易く書を讀まんと欲せば讀むことを得、新聞に雜誌に隨分婦人に必要なる家庭に貴重なる題目を以て懇切に記載せられ、説明せらるゝもの、多き世の中に生活せざる割合に幕府時代に於ける自家の母親の教訓位を以て滿足したりし時代即ち現今より之を見れば殆んど無教育とも云ふべき無機關の時代の婦女に比して其の大に優らざるを見るのみ否女子の德義品格等に於ては或は數歩を讓らざるべからざるやも知るべからず、其の德義品格等を高めんには教育をすゝむるより他に良法なかるべきなり吾人は敢て

一般女子に生理學を學べ心理學を研究せよと云ふにあらず只兒童は發育しつゝある薄弱なる身體と心情とを有するを以て生後數年間は最も注意に注意を加へざるべからざる大切の時期なる事を自覺し此の時期に感染したる事柄は其の兒童の生涯の所有物となりて行く事及び人間の德性は幼時に於て專ら養ひ得べきものにして此の時に是ける毫釐の過ちは成長の後千里の差を生ずるに至る最も危き時期なることを察し機に臨み變に應じて己の子女を試驗して其の知力及び筋肉の發達の模樣等によりて相當の具案的動作をなし得る丈けの修養わらんことを臨む然るに現時の女子の教育果して此の點に深く注目せるものなりや否やとを舉げて曰く（同氏著家庭小訓）

吾人は其の効果の誠に奇變なるものあるを嘆ず德富蘇峰は現時女子教育の流弊

「彼の女學校生徒の卒業したるものを見ずやその二三の例外は暫らく措き如何に彼女等が一家に於ける迷惑者なるよ、厄介ものなるよ彼女等は一通り讀書も出來曲りながらも手紙を書くことが出來新聞を讀むことが出來或は英語にて天氣の挨拶は出來るなり此の點よりすれば餘程調法なるが如しと雖も彼女等は實際的

の修棟乏しくして切に云へば六疊敷の部屋をすら思ふ樣に支配すること出來ぬなり手近く云へば彼女等字を知る野蠻人のみ何となれば彼女等は自ら治め且つ人を治むること能はざればなり彼の最愛の女子をば五年乃至七年學校に一任し偶々家に歸ればその父母たるもの之れに珍客の待遇をなし唯だその御機嫌を損せざらんことをのみ是れ務むるものその結果は如何あるべき彼等が偶々其の苦學を終り學校の門を出でたる後は氣高く不經濟にして不調法なる我儘にして不精細なる一の厄介女を產するものと氣附かずや云々

是れ現時の女子敎育の弊を逃べて盡せるものと云ふべし惟ふに家を治むるの道は外國語に通曉すると然らざるとにあらず學藝あると然らざるとにあらず要は身を修め心を正しくし婦女の天職に字を知り文を綴るをのみ云はんや

現時の女子敎育の有樣を以てして未だ足らざるものあること此の如し況んや現今の社會を形成せる各戶の主婦は其十中八九は無敎育者を以て滿たせることは明かなる事實なり今後大に爲すあらんとする二十世紀の日本國民をつくるに必要なる感情敎育所に於ける唯一の指導者としては豈に足らざるものなきを得んや是れ吾人が現時の家庭を採用し得ざる第四の點なりとす

現時の家庭は敎育眼を以て觀察すれば放任なり有意的具案的にあらざるなり父母は其の子女の漸く言語を發せんとする時は「カアサン」「トウサン」位は敎へ玩具の如きも其の始めに於て「オシャブリ」位は買ひて授くれども其の後に至れば言語は幼兒の發するまゝにして放任し玩具も其の好みに從ひて更に其の性質思考等には注意せざるものゝ如し加之よく兒童を愛す其の愛たるや吾人或は盲愛に流るゝかの疑なきを得ず當今社會に立ち相當の地位を占め人を管理する嚴格なる人物にして而も其の家庭の裏面を窺ふときは子女の我儘に任せ置きて更に顧みざるものあり時としては不敬の言も可なり不穩の擧動も可なりとして看過し他にありては不晴れ大人と見做さるゝに至れるものをも家庭に於ては之を小兒の如く見做して汰々を揑ねさせ置くものあり是れ決して許すべからざる弊と云はざるべからず子女を愛するは如何程愛するも吾人は不可とせず然れども父母は己の快樂の爲めに子女を愛するは如何程愛するも吾人は不可とせず然れども父母は己の快樂の爲めに子女を愛せんことを望む子女一身の爲めに子女を愛せん

ことを希望するなり子女を愛せば必ずや吾人の前に述べたる如く其の愛に伴ふ嚴なかるべからず此の嚴に伴はざる愛を吾人茲に盲愛とこそは云ふなれ家庭に於て父母が盲愛に陷るは其の子女の一身上如何に不幸なるか如何に社會の厄介物なるか教育上如何に之を矯正するに困難なるか要するに如何に振ち繰れたる感情を有する兒童をつくり出すかを知らんと欲せば吾人をして能勢榮氏の言を假りて之を述べしめよ氏は曰く(能勢榮著學校管理術)

父母の性質温柔不斷なるが爲めに其の子を我儘に爲すか或は父母の大切なる獨り子なるが爲めに甘へかして生長したるか或は幼時病身なりしが爲めに何事も隨意にし曾て苛責を加へざりしかいづれも我儘增長し自己の空想通りに事を處することを能はざるときは即ち怒り即ち泣き或は泣き面をなすものなり且我儘も一步進みて狡猾をなり平素能く父母の弱點を看破し自己の目的を達し自己の空想を滿足せしむるの最良法は怒聲を發するか泣聲を試むるに如くものなきを知りて直ちに之を用ゐて以て其の願望を遂ぐるを常とす此の手段を以て能く其の親を支配し得たれば今や一步を進めて同一手段に依て以て教師を摘にせんことを企つるものなり」云々

それ人の情として朧を得て蜀を望むは固より當然のことなり已に父母に我儘を通すときは必ずや之れを以て學校へ入學するの後も教師に通さんとするは勿論なり何となれば兒童の特性として一度習慣となり父母が之を唯諾しつゝ過ぎ來れる事柄は例令其の子が自己の不善なることを知ると雖も他人は自己に對して之を默許するか或は之を公然許す義務あるものと考ふること往々あるものなればなり果して然りとせば學校教育時間の全部を投じて之を矯正せんとするも能はざるべし蓋し學校の教育は如何に秩序正しく正課として課するも其時間たるや固より五六時に過ぎず其の餘の大部分は家庭に於て之を破壞するの機會たれば決して其の効果なきは明かなり吾人は現時の家庭が未だ此の如き盲愛にのみ陷れりと斷言するにあらざれども內では全く放任主義です」と云ふ如きことを其の子女の面前にて來客に對して云ふ如き父兄の多きは只吾人が觀察したる方面にのみ現はれしにはあらざるべし恐らく我邦全社會を通じて此の傾きあるにあらずや抑も教育は兒童の天性に隨ふべしとは決して放任主義を意味するものに

おらず兒童の天然の傾向必須の欲願より出でたる動作は成るべく之に背かず永久の福素を進むるの具となし天然ならず必須ならざるものにおりては深く其の資質を研究して之を除かざるべからざるを云ふなり況んや肯愛に陷りて其の尊ずがまいに傍觀するのみならず之に公然の許容を與ふるをや吾人が此の論文において最も眼を注ぎて觀たるは社會家庭の此の方面にあり嗚呼內地雜地後の家庭としては何ぞ喜んで之を採用することを得んや之れ吾人が現時の家庭に於ける第五の弱點と認むる所なり

以上は吾人が現時の家庭を消極的の方面より見たる重なるものにして之を其の內面に立ち入りて觀察したらんには或は那點に於て吾人が採用じ得ざる欠點を映出するやも知るべからざれども兎に角現時の家庭を以ては兒童を養育するに適せずと斷言するも敢て酷に過ぐるの恐なきを信ず然らば吾人が採用すべき家庭は果して過去にあるか是れ暫らく研究せざるべからざる問題なりとす、それ過去の家庭たる遠く足利以前の時代はさて措き其の江戶幕府時代に於ては最もよく注意せられたるものにして女子の敎育所は概して家庭なりしなり是を以て父

母たるもの實踐に重きを置き德性を涵養するも品格をつくるも學問によるよりは寧ろ祖先の遺風によりて之を感化したりき彼等はよく忠孝の何ものたるを感じ貞節の何ものたるを理會して之を實行したりき、されど其の多くは無敎育にして社會の組織も不完全にして思想の發達も亦一般に幼稚たるを免れず要するに士族以下町人百姓の多くは間居して不善をなさいるを之れ務めたるものゝ如し約言すれば過去に於ける家庭は沈重にして厚く一家の子をつくるに適じて未だ一國の民をつくるに不十分なりと云はざるべからず之れ徒に家庭そのものゝ罪にあらず當時一般の思想が忠とし云へば其の直接に仕ふる大名か旗本に對して行ふ忠にして未だ以て國家に對するの忠にはあらざりしなり社會の有樣已に此の如きを以て當時の家庭は自ら其の希望亦狹小たるを免れず其の思想の範圍固より現今の如きものにあらざること明かなり況んや之を以て直ちに內地雜居後の家庭の摸範となすに至りては到底其の不適なるものあるは言を待たず、されども吾人が大に採用すべき點は恐らく現時の家庭よりは過去の家庭に於て其多きを見るなり現時の家庭已に採用すべからず而して又過去の家庭も悅んで採用し

能はざるの點多々なり然らば如何なる家庭を以て其の標準となさんか請ふ吾人をして少しく今後採用すべき家庭即ち吾人が少くも此の點までは進めざるべからずと信ずる家庭の要點を述べしめよ

第四章　家庭論

第五節　家庭の標準

吾人が將來の家庭に於て進めんとする所の標準は泰西耶蘇教的家庭にあるか將又東洋儒教的家庭にあるか是れ暫らく攻究せざるべからざる點なりとすされど已に述ぶるが如く如何に完全に家庭の形式を確定するも之れが主權者たるものの資格に於て缺くる所あらんか決して何等の効益をも見ること能はざるなり以下擧ぐる所の數點は吾人が現今最も必要とする所のものにして其細密の點に至りては後章方法論を待たざるべからず本節に於ては稍其端緒として其の要項を述ぶるに過ぎず

第一家庭に於て專ら確立し置かざるべからざる必要なる精神は祖先の面目に對する觀念にして前數節に於て提出したる問題なりき此の祖先の觀念なるものは

子孫たるもの即ち其家族の相續者たるものゝ品位をつくるに最も必要なる柱礎にして一家の私德は之れによりて維持せらる此の精神を以て未だ社會の外氣に觸れざる子々孫々の腦髓をかためざるべからざるなり其の精神の依て表はるゝは一家の風儀にして此の模範は暫らく過去の家庭に採らざるべからずそれ家庭に於ける風儀は其の祖先と子孫との觀念及び感情を續き合はす自然の良媒介にして一家の子弟は之が爲めに祖先の面目と自己の面目とを一致せしめ一個人としての品格は自然に此の觀念と感情とより確立することを得故に家庭は此の觀念と感情とより家内に於ての德義即ち一家内相互の德義を實踐躬行するを以て第一とし茲に屋漏に恥ぢざる人物をつくらざるべからず現時社會が公德に關しての欠點を有することは少しく西洋諸國の風を見たるものは等しく感ずる所なれども之れ決して警察の手を以て盡く矯正せんと欲するも到底なし得ざる所なり之を根本的に改良して其の善美なる社會をつくり便益なる世界を見んには宜しく先づ個人の私德を涵養し幼尉の時より善行は他人の前に於てのみなすべきものなり人の耳目の及ぶ範圍に於てのみ止むを得ず爲すものなりと云ふが如き

似て非なる形式的善を撤去して他人の知らぬに論なく己は已に有する義務を盡さいれば以て安眠し得ざる如く感ずる私德實踐家をつくるへし果して然らば社會の公德は求めずして得へしそれ西洋諸國に於て此の德が見事に實踐されつゝあるは畢竟彼等相互の制裁大に與かるに相違なしと雖も抑も亦宗教が一個人の私德をつくり各個は皆正心誠意以て世に立たんとするの致す所ならずんばあらず吾人我國に於て此の公德の完美を望むに當て先づ第一歩として個人の道德を確實にせざるべからずと信ずるは家庭にあり而も其の家庭は精神の確立せるものたらざるべからず述べて茲に至れば吾人は徒に新聞に雜誌に其の弊を鳴らすと雖も警察が朝に夕に其の非を矯正せんとすると雖も家庭の内部に於ける德義の確實ならざる以上は決して之を矯むることは能はざるを信ず外人雜居後の家庭亦大に責任あるにわらずや家庭に於ける私德の教育は社會公德の由て生ずる基にして此の德を養ふには其の指導者たる父母が完全に其の資格を具へ家庭の精神を確立するにわらずんば能はず家庭の精神をつくらんには祖先に對する感情を厚くせざるべからず吾人は現時大に薄きたる此の感情を挽

回して家風を維持せんことを奨めざるを得ず

第二、一家の經濟に關する觀念を精密にすることは家庭に於ける私德實行の端緒にして父母たる者常に綿密に之を取扱ひて其の模範を示し且つ之を混雜なき樣取扱はしめざるべからず此の習慣は自他の觀念を明瞭にし他日世に立ちて獨立の氣性を得しむる第一段なれば家庭に於ける金錢の出入は特に綿密ならざるべからざるなり今や外人は全國各地方に散入せんとする時期に際し家内の經濟上の精密なる觀念を兒童に得しめ置くことは今後の社會に最も必要なる習慣とす」

第三、規律を正しくし時間を貴重し時間に關する約束は必ず其の時に後れず之を實行するの習慣をつくらざるべからず現時我國各地方に於て如何なる集會樣のものあるも其の指定したる時間に於て會員は決して出席することなく「午前十時御出席下さるべく候」と云ふ案内狀に對しては先つ十二時頃まで用事を務め而して後に出席す否其の頃は朝より空しく遊び居るにも拘らず集會へは必ず數時間を後れて出席するを通例とす此の弊たるや決して現時のみならず從來より存在せるものゝ如し之を其の源に溯りて考ふれば決して單にするけ時間の貴きを

知らずとのみ云ひ難し勿論時間を浪費するは我國人の古來より持ち來れる弊習たるに相違なしと雖も亦一方より之を見れば古來東洋倫理に於ては謙遜の德を非常に賞讃し我國の如きは最も此の德を養ひたるものにして成るべく人を先きにし己を後にするてふ恭謙の風行はれたりき此の風の盛んなる時にありては固より人先きに出席する等の動きは幾分か此の德に欠くると云ふ感じより暫く後れて大體席定まりたるを待ちて出席するをは大に長上に對しても敬を失ふのそしりなきなり蓋し此の風漸次轉化して其の主眼なる骨髓たる謙遜の意は全く消失して徒にするけて時間を徒費するの形式のみ現時にまで殘存せしものゝ如し其の根原は兎に角現時の此の風は之を矯正し得る家庭たらざるべからず若し夫れ社會の事業繁劇なるの時に當りて此の弊習を持續せんか吾人は其の事業に遲滯を來し社會進歩の妨害となるまた少なからざるを知るなり之を矯正せんには家庭に於ては起きてより寢るまでの間其の時間の大體を定め幼兒のときより之を實行するの習慣を得しめざるべからず是に於て吾人が要する家庭は一の規律を正立せざるべからず此の規律の正立せる模範は吾人は之を歐洲家庭の

風儀に依らざるべからず彼等の家庭は毎朝の起床時間の確定せるは吾國の家庭と異ほ異なることなしと雖も彼等の風として朝食後より夕食に至るまで善く働き善く休ひ寸時も無駄に費やさず幼少の兒童と雖も空しく家庭にありて時間を經過することなく時間に對する彼等の觀念は實に嘆賞に堪へざるなり已に夕食を終れば一家相集ひて終日の勞を慰め愈快なる談話をなし定刻に至れば一同直ちに寢に就く等家庭に於ける規律の嚴密なる實に採て以て模範となし吾國の家庭に之を實行せしめずして何ぞよく子弟に此の觀念を與ふるを得んや

第四、家庭に於ける言語は宜しく純潔なるものを用うべし我國の家庭に於ては昔より一家を構へて祖先より傳はり來れる習慣を遵奉しつゝあるものにありては言語も亦丁寧にして決して野卑に流れ猥褻に陷らず相互に敬語を以て言語を交ゆれども新に一家を設け夫婦二人に下婢一人位のものゝ生活にありては其の裏面に於ては言語野卑に流れ聞くに堪へざるもの少なからず西洋の諸國に於ては親族朋友は勿論下女下男と雖も苟も弱年の子女の前に於ては淫穢賤汚の言行に關する談話は嫌ひて之をなさゝるのみならず胸部より以下の事は毫も之を

口にすることを恥づるの習慣ありと聞く勿論我國に於ても之を戒しめざるにあらざれども隨分立派なる生活をなし高等なる職務を奉ずる人達の奥の間に於ても亦淫穢に亘れる談話をも度々耳にするは吾人の往々慨嘆する所なり況んや下等社會の家庭何ぞ其の言語の潔白なるを得んや今後の家庭には務めて之を矯正し兒童の腦中より一層の嫌忌を以て之を去らしめざるべからず然らずんば後來此の家庭に於て養成せらるゝ兒女の性情をして潔白清純ならしむること能はざればなりこは言語の意味につきて云べきものなれども國語學上より見たる言語の正否も亦大に其の人格に關する所少なからず宜しく土風の誤語を早くより除き取りて出來得る丈け普通の言語たらしめざるべからず東北地方の人士の言語が往々小兒の話しの如き感じを吾人に與ふるは發育の不正と音の誤用とより來るもの多し現に是等の小學校中學校に於ては切りに之に注意すと雖も家庭に於て已に其の子の言語を發する初めより使ひ習はしめたる方言は終身之を除くこと能はざるもの〻如し是れ家庭に於て子女養育上最も注意すべき點なりとす

第五、家庭に於ては衛生を重んじ之に關する知識を充分に有せざるべからず、さり

第四章　家庭論

第五節　家庭の標準

とて吾國現今の婦女をして決して醫學を學ばしむべしと云ふにはあらじ只一家内の病原は多く何れの部分より來るや衣服物品の不潔は身體の健康に如何なる害を與ふるか些細の病氣、輕少の負傷に應じて相當の看護法を心得速急の手當を施こす位のことは決して知り難きに非ず少しく注意して其の方法を聞けば直ちに實行し得るものなり勿論是等のことをなしたりとて醫師を招ぐの手數を省くことと能はざれども何もかも醫師にのみ一任して臨機の策を施し得ざるは實に不便なる習慣と云ふべし西洋諸國に於ては少しく恒の產ある者は其の看護法と些少の診察位はなし得る婦人少なからず特に看護法は彼等の中以上の社會に於ける婦人は義務として之を習ふと聞く加之彼の國に於ける公衆の利害に對する觀念の確固たるは實に我國にも慕はしき限りなりもし患者にして傳染性の徽候あるときは親戚知友と雖も之に近接するを嚴禁し其の病毒の蔓延を防ぐ等毫も醫師警察の手を煩はさず之を我國現時の實況に比しては如何殆んど都鄙を擇ばず警察にのみ一任し時としては衛生に關する注意を厭ひて之を實行せざるものさへあり實に戒しむべき陋習と云ふべし今後の家庭は專ら一家の衛生に心を盡

し一家の利害に關する觀念を實行上より導き以て公衆の利害に對する觀念の基礎をつくらざるべからず

之を要するに一家の面目てふ觀念即ち家庭の精神を確立するてふ點に於ては吾人之を我國古來より發達し來れる家庭に其の模範をとらざるべからずと雖も吾人は今後の家庭は大に其の形式を西洋に採らざるべからと信ず西洋風に家庭を組織するも吾人は決して徹頭徹尾之に模すべしと云ふにあらず要は其の規律習慣の粋を採りて之を適用するにあり詳論すれば吾國の父子老少相集まりて樂しく暮す如き一家團欒の美風は歐米なきにはあらず彼にありては父母は其の子の結婚するに至れば別居して生活するを常とし中以下にありては老父母は其の子の家に日雇をなして以て一日の賃金を得て生活をなすもの少なからず子も亦之を見て異とせず父母も亦敢て之を怨みずと云ふ曾て聞く一日吾が紳士米國にありて其の知る所の老婦に我國家族團欒の風を說き父母老ゆれば其の子は終身之に使へて孝養惰らざるの實況を語りしに老婦之を聞き半ば信じ半ば疑ひて曰く斯かる國柄が何處にかある若し眞にありとせばそれをこそ天

國と云はめなど云ひて疑を含みつゝも大に嘆息して吾が風を慕ひたりと吾人が採用せんとする西洋風とは決して此の如き親子別居的家族制度までも採用せんとするにあらず只現時の弊として前節掲げ來りたるものを去り之に代ふるに彼等の規律正しき公德に厚き公衆の利害に強き觀念及び衛生上經濟上の習慣を持ち來らして一家團欒的家庭に之を實行する事を得ば之を從來に比し內地雜居後の我國の家庭として或は子女敎育に益する決して勘少ならざるを得んか又或は曰はん西洋にて發達せる風習直ちに以て我國に施すも何ぞよく其効果を藏むるを得んと然り然りと雖も現時我國の大勢として此の風を要求するの切なる今日の如くそれ急なるはなからん吾人が之が改良を促すも固より決して直ちに之を行はんと云ふに非ず要は社會を改良すると同時に之を改良せざるべからざるの謂ひにして決して一朝一夕に此の風を望むべからずされど二十世紀の新天地に大に活動せんとする現今の兒童の心情を鞏固につくらんには家庭そのものゝ良否如何に關することを考ふれば吾人は小にしては現時の家庭大にしては現時の社會の風習を改良するの必要に迫まれりと信ずる

なり

以上述べたる所の家庭を以て如何に兒童の心情を敎育するかにつきては後章方法論に於て之を要めざるべからず

第五章　感情論

第一節　感情の性質

一、感情の本體　感情の性質たる知力及び意志とは、大に其の趣きを異にし外界に反動し發表する上に於ても之を推測することの困難なる固より知意の二作用の比にあらざるなり勿論感情そのものは常に心の深奥に潜みて他の心意作用と伴生して之を表示するに過ぎず尙且つ人によりて其の表現を異にし種類も亦同一ならずされば古來心理學者中大に其の見解を異にしルーソーの如きは人の感情は盡く惡ならざるはなしと主張するに至れり是等の議論たる畢竟一は感情を以て高尙なる情操の根本は凡て善ならざるはなしと論定しヘーゲルの如きは感情は盡く惡ならざるはなしと見做し一は賤劣なる熱情の本源と見做し互に其の極端を取りたるによるベンザム及びミルの如きは快樂は善にして苦痛は惡なりと主張し人の快不快を以て道德の標尺とせり要するに二氏の如きは感情には善と惡とを包有すと見做し彼のルーソーヘーゲル等の見解に一步を進めたるの觀あり

此の如く感情は學者によりて其の見解を異にすされば吾人は暫らく玆に快樂及び不快樂か人の道德に如何なる條件に於て關係するかを研究し更に感情そのものゝ本體に及ばんとす

それ感情の發生は概して己の身體と其の外界境遇との關係に基づくものなること明かなり斯くして發動したる感情は快ならざれば必ず不快なり其の外界境遇によりて起る所の刺戟が己の有機體の性質に適合するときは快感となり之れに反して不適合なるときは之を不快感と云ふ故に不快感なるものは自然淘汰の爲めに漸々滅亡せざるを得ざる傾向を有す之を生物保存の大法より考ふれば快樂は善にして不快樂は惡なりと云ふことを得べし然れども單獨に快樂なるもの不快樂なるものを考ふることを得ず全然物質的狀態を離れて快不快を考ふることを得ず何となれば原因もなく影響もなき快不快てふものは實際上存すること能

はざればなり

已に原因ありて感情之によりて生ずること明かなり感情生ずれば茲に影響を及ぼすされども其の原因によりて如何なる種類の如何なる程度の感情が發現し來るかを豫め知ることは吾人の到底なし得ざる所なりそれ然り感情は其の原因によりて其の發現すべき狀態を測定するを得ず只其の原因たる動機即ち外界の刺戟と之れによりて起されたる影響とを考へて其の性質を定むることを得べきが如く想像せらるゝのみ其の實際に於ては原因そのもの結果そのもの等は決して之を精細に測定すること能はざるものにして快樂は善なり不快は惡なりと云ふと雖も吾人は之れに伴ふ原因と結果とを測定し得ざる以上は未だ以て善なりとも惡なりとも斷定し難きなり惟ふに快苦は人の感じなり人の感じは人により其の場合によりて異なれり同一の原因によりて同一の感情の起り得るものにあらず否今日の快樂の原因は明日に至り不快の原因となること往々あるものにして其の原因と其の結果とを以て之が本體は決して知り能はざるものなり、されば韓非子卷四說難の篇に

「昔者彌子瑕有寵於衛君、衛國之法竊駕君車者罪刖、彌子瑕母病、人聞往夜告彌子、彌子矯駕君車以出、君聞而賢之曰孝哉爲母之故忘其刖罪、異日與君遊於果園、食桃而甘不盡以其半啗君、君曰愛我哉忘其口味以啗寡人、及彌子色衰愛弛得罪於君、君曰是固嘗矯駕吾車、又嘗啗我以餘桃、故彌子之行未變於初也而以前之所以見賢而後獲罪者愛憎之變也」云々

人の感情の發動によりて其の本體を知ること能はざる此の如し甲乙二人が同一の原因によりて同樣の快苦を感ずること出難きのみか其の同樣なるか否かを知ること到底能はざればなり故に吾人は他人の感じを測定し得ざるのみならず自己自身の快苦さへも之を豫想し之を測定することを能はず

之を要するに吾人は感情そのものゝ本體は之を知り能はざること恰も電氣その ものは本體を知ること能はざるが如しされど電氣に陰陽の兩極あるが如く感情にも亦必ず快不快あり今暫く進んで人の感情は如何にして心裡に發現するか其特性は如何に如何なる傾向を以て人心を支配するかを研究せんとす

二、感情は自然なり、已に述ぶる如く感情の發するは必ず之を發せしむべき原因

第五章　感情論

あり其の原因あるも吾人はそれによりて如何なる種類の感情が發現するかを演繹によりて知ること能はざるなり且つ感情は一般に有意的に之を發現することは難し詳言すれば吾人は事物に對する觀念は之を記憶して自由に必用なる時に於て之を再現し得れども意思を以て喜怒哀樂の情を發起すること難し要するに吾人は自覺によりて自由に情を發することと能はざるなり然れども人によりて特別なる敎育と練習とによりて感情を惹起することを得るものにして彼の慷慨家、宗敎熱心家及び愛國者等の如きは觀念によりて感情を容易く呼び起し得て爲めに他人を感動せしむれども此の方法を以て感情を起すは非常の練習を要し尙且つ己の主觀に於て觀念の聯合作用が容易く行はるゝものに限るを以て一般人に於ては決して有爲的に之を發現せしむること能はずと云ふも可なり

三、感情發動の原因、己に知る如く感情は自然なり故意に發現せしめ得るは特別の練習を重ねたるものに非ざれば能はず感情は其の發する前に於て豫め其の種類其の度量を推定すること能はず然れども感情は偶然發現するものに非ず必ず之を發すべき原因あるなり其の原因たるや固より一にして足らず身體の狀態知

識の範圍及び周圍の境遇等種々あれども之を大別して內部原因及び外部原因の二つとなす

A、內部原因　之に屬するものは其の原因吾人の主觀に存するものを云ふそれ反省心が一度活動して義務の觀念を生ずるときは此の觀念は直ちに德義心を生じ德義心生ずれば茲に父母には孝行せずには居られず長上には從順にせずば氣がすまぬと云ふ感情を起すに至るべし若し反省心が活動して一の觀念を生ずるも之れに或る感情が伴生せらるゝにあらずんば充分實行に表はす程の勢力を有せざるものなり吾人は自ら反省して國家に對しては如何なる義務あり家族に對しては斯々の義務あり等の觀念を生ず然れども只其の觀念のみにして更に感情を惹き起すことなくんば吾人は決して之を行爲に表はすに至らざるべけれども心情の發達は或る感情と觀念とをして親密に結合するを以て一度觀念となりて發動するときは其の敎育及び練習の程度に從ひ幾許かの感情は之れによりて惹起せらるゝに至るものなり加之自信、自負等の觀念よりして得る所の快樂の情、正義に對する欲望等は何れも皆此の內部原因に屬するものなりとす

第五章　感情論

B、外部原因、之れは其の原因外にありて吾人の五官に觸れ心中に一種の感じを生せしむる所の發情機にして身體の健康の有樣生理的情態。敎育、天然的及び社會的境遇等を包含すされど同一の原因に遇ひたりとて常に必ずしも同一の感情の起るものに非ず故に若し吾人が發動したる心の現象によりて其の原因を尋ぬるも決して求むること能はざらん何となれば已に屢々述べたる如く感情の發動は自然にして發したる感情と之を發せしめたる原因との間に決して一定の關係法則の成立し居るものに非ざればなり此の如く其の原因と發する感情との間に何等の法則關係なきにも拘らず感情の多くは此の外部原因によりて直接に發動せらゝものなり內部原因に屬する反省作用は只感情が迸り出づるに都合よき道を造くるに止まりて直接に感情を湧出せしむるの力なし

此等の原因によりて發動せる感情は何れも自然なりと雖も或る度までは間接に之を左右し得べし例へば健康より來る感情は自然なれども吾人は故意を以て身體の生理的構造を變化することを得隨ひて健康に保つも之を害することも得べきを以て之より發する感情も亦幾分か制裁を蒙るべし又或る種の原因より生ずる不快の感情は吾人之を除き得るもの少なからず其の他敎育によりて發現する感情に至りては其人爲を以て自由に之を變せしむることを得べし天然的の境過の如きも人爲を以て之を變更することも亦爲し得ざるにあらず此の如く吾人は感情には直接の制裁を加ふること能はざるも其の原因の狀態を變更するによりて發現する感情も亦幾分かの制裁を玆に蒙らざるを得ざることゝなるべし

第一節　感情の性質

四、感情の安定及び不安定　感情の安定とは何ぞ快樂の最高點に達したるとき之れなり此の有樣にして過不及あるときは吾人之を不安定と云ふ不快或は苦痛之れなりそれ然り各感情は自己の性質を維持せんが爲めに相互の間に衝突を起し競爭を生ずべしと雖も自覺の上より之を圓滿に活動せんと欲するものなり此の如く感情はそれ〴〵安定の有樣に歸せんと欲するも各其の保存の爲めに或るものは消滅に歸することあり或は自覺の撰擇作用によりて勢力を得ることあり卽ち人は他の事情の爲めに自己の情を枉げ自己の欲望に反したるものをも忍ばざるべからざる場合少なからず快樂を好むは人の天性なりと雖も往々種々の事情の爲めに止むを得ず不快或は苦痛を堪へ不安定の有樣に耐

第五章　感情論

へざるを得ざる場合あり然りと雖も之れ決して人の本性にあらず事情之を然らしむるなり物質の下に向ひて落つるは其の固有の性なるにも拘らず種々の關係より或は空氣の上昇するが如く噴水の上に向ひて騰注するが如きのみ之れ豈に水及び空氣の本性ならんや水は一定の場所に於ては平準に歸して始めて安定なるが如く人の感情は快樂に於て始めて安定なることを得其の暫らく不快を採ることあるは是れ一時の勢によりて然るのみ

五、感情は演習によりて其の強度を增す。人の經驗の差等は感情の差等を生ずる基にして各人の興味は決して同一にあらず甲の快とする所必ずしも乙の快にあらす甲は奏樂に耳を傾け乙は之れに注意を引かるゝことなけれども繪畫には非常に attraction を有して全心を之に傾くる等其の品類差等一樣ならざれども經驗の有無は恐らく其の主要なる原因たらずんばあらず、それ經驗の差等は心情の興味に大に影響を及ぼすものにして商家に生れ幼少の時より商業上の事にのみ經驗を有するものは商業程面白きもののはなしと確信し細工人の子は父兄と共に幼より細工物にのみ經驗を有して小細工物をつくる程面白きことはなしと信じ農

家の子は農業を悦び漁師の子は漁獵を以て最大の快樂として他を顧みず社會全般の事業皆之によりて各專門的に其の業を執り彼と此と全く相反せる性質の事業に從事して各皆自分の執る仕事を面白きことと考ふ是れ畢竟心の興味性は其の境遇によりて各經驗する所に從ひて定まることを示すものにして人の感情も亦幼少のときより時々反復演習するによりて其の度を高む同情を表すべき機會に多く遭遇せるものは同情心強く愛するの性を強くし慈善家の子は憐憫の情に厚き等の事實によりても明かなり彼の猛虎一聲山月高と云ふが如き詩句に對しては地勢の平坦なる都會の地にの み生活せる人士には何等の感情をも惹起せざるべきなり

六、感情は感情を生じ又感情を制す、已世に愛せられんと欲せば先つ世を愛すべし國民に愛せられんと欲せば己先つ國民を愛すべし母の子に對する愛は子が母に對して有する愛情となり玩具を與ふる快樂の感は玩具に對する同情を生ぜしむ感情に此の性質あるが故に吾人は他人の喜びを見て自ら喜ぶことあり他人の苦痛を聞きて自ら不快を感ずることあり是等は直接に間接に或る一つの感情が

他の感情を惹起したるものにして兒童の感情が共に生活せる人若しくは其の周圍に立ちさはりて常に影響を與ふる所の人の感情によりてつくらるゝこと少々ならざるは吾人の實際見る所なり感情に此の感染する性あるは最も敎育上可能性を有する所にして特に前章父兄論及び家庭論のありし所以なり

それ然り感情には一の傳染する性質を有して甲の愛情を生じ敎師の感情は其の養成を受くる生徒の感情に影響することは各人の認むる所なり是に於てか少しく論歩を進めて今日の感情が後日の感情の基礎となることを述べんと欲す語を變じて之を云へば感情は交感し傳染するのみならず生殖するの性を有す、それ社會國家の公益の爲めに力を盡くし同胞の爲めに其の一身を犧牲となす等の感情は其の幼少なる時に當り母を愛し父を敬し師に從順にして之を尊敬し家風を重んじて之を遵奉する等の感情及び親族朋友に注ぐ所の同情が漸次生殖繁茂したる結果と云はざるべからず

元良博士は愛國心を惹き起すべき要素數ヶ條を掲げられたり(同博士著心理學)

第一、自然故郷に固着するの情即ち先入主となるの理に基つくもの

第二、父母親族朋友に固着すること

第三、故郷の山川風景は殊に慕はしきこと

第四、言語の同一なるは人をして結合せしむる大要素なること

第五、風俗習慣の同一なる爲め同情を生ずるを大に助くること

第六、同人種なること

第七、爵位、財產、名譽及び國民より其の人に對する信用、

博士の掲げられたる此等に對する感情は大に敎育及び自覺の助けによりて成りたるもの多きことは明かなれども其の一より七に至るまで一として幼少の時に發現せる簡單なる愛情の萠芽が繁殖して其の幹を大にし其の枝葉を蔓らしめたるにあらざるはなし

それ感情は感情を生ずれども雖も亦一方より考ふるときは感情を制するものも亦感情なり此の事に關して元良博士の說明こそ其の例解實に詳かなれ今其の一節を茲に略述すれば(同博士著倫理學)

第一節　感情の性質

〔人あり好んで讀書をのみなし常に机に對して座するの習慣ありて体操の如きは

更に心を用ゐず友人の忠告を聞きて其の健康に害あるを知れども尙習慣を破るに至らず後日大に健康を失ひ大に恐怖の情を發し舊來の習慣を破りて体操に力を用ふるに至れり

第五章　感情論

又茲に人あり常に金錢を得んと欲す或る時偶然他人に少しく害を加ふれば大利を得べき場合ありき其の人思らく私利を得んとて他人に害を與ふるは不當なりと然れども其の慾心強く之を制する能はず繇て思ひらく他人に害を與ふれば一時は自己を利するも其の罰は到底免るべからず如かず今一時は利を得ざるも他人を害せずして永く利を求むるの道を講ずるにはとて目前の利をすて永久の策を求む是れ利慾心が利慾心を制したるなり又人ありて私利の爲めに他人を害したり而して後思ふに利を得ると得ざるとに拘らず他人を害するは惡しと初めは只道理のみを考へたれども暫く詳細に注意して一種の感情を生じ他人を害せしにより不快の感情を惹き起したり是れ所謂良心の呵責なり此の感情利慾を禁止して終に不正の私利を計るを止むるに至れり」云々

博士の例解たる固より其の假設的なりと雖も之を實際に徵するに現時の社會に

第二節　感情教育の困難

於ても亦之に類する現象のあるにあらずや彼の喫烟の如きは其の經濟上（假令少々たりとも）生理上社會の交際上子弟教育上幾多の方面より之を見るも其の非なることは何人も許すす所にして又此の理を解せざるもの殆んどなからん然れども之を知りつゝ尙自ら禁ずるを得ざるは恐らく喫烟者の多くが經驗する所ならん是れ畢竟此の習慣を破るに足るべき否定的感情の湧起せざるに歸因す之により吾人は知る理は情を制すること能はず感情よく感情を制すること論道理的知識は其の禁止を助くるは云ふまでもなきことなれども只に知識のみにては情を制するの力なく知識と想像と相伴ひて直接なり間接なりに一種の感情を發現して始めて習慣をも破るべく感情をも制し得べきなり

第二節　感情教育の困難

心理學者は曰く快樂と苦痛とは精神と身體との調不調によるものなりと、されど精神と身體との活動の調不調たる吾人未だ之れにつきて明瞭に研究されたるものを見ず

第五章　感情論

抑も感情の發現たる人により時により境遇によりて毎々其の形を變じ其の量を異にして精神現象中此の如く雜駁不測にして端倪すべからざる作用は他にあることなし特に前節述ぶるが如く感情は自發的のものにして其の性質たる善の分子を包含するあり惡の分子を包含するあり境遇あり時としては高尚なる情操となり時としては下賤なる慾望となり肉體の快樂にのみ心を奪はるゝ情慾の奴隷あり自家の利益を追及するに汲々として他を顧みざる利己家あり他人の幸福衆人の利益を計らんとする道德家あり他人を害し國家を賣りて己一身の快樂を滿足せんとする惡漢あり信實に其の感情を盡くさんが爲めに一身を犧牲とする愛國家博愛家等ありて各人の感應の區々たる實に拘束すべからず特に所有の欲の如きは之を過ごすことは貪慾守錢奴吝嗇家となり不足するときは浪費者となり驕侈者となる自負となり不足するときは自棄となり謙遜の過ぎたるは卑屈に等しく不足なるは傲慢となる等其の同種類の感情と雖も其の量の程度に從ひて全く反對したるものとなりて外部に表彰せらるゝもののなければ知力及び意思とは全く其の趣きを異にし其の原因と結果とによりて之を研究するも到底其の本體の幾分をも知ることを得ざるべし是れ感情の心理が明かならざる所以なり是を以て從來西洋の學者も之を正當に解するの道なく之を論ずるも亦最も輕易に經過し其の多くに至りては殆んど此の問題に論究せざるを通例とす、されば敎育書に於ても亦感情に關する章を挾まざるを以て策の得たるものとせる傾ありしは事實なりそはコンペーレー氏の言に(能勢榮譯根氏敎授論)

「或る著作家の如きは敎育書中に感情の章を省略するは敎育家の名譽にして之を殊更に論述するは却て汚辱なりと論じ尙キゾー氏の言を擧げ其の例證として(同書)

「余を以て之を見ればモンテーン氏が感情の養成に關する敎育につきて殆んど全く沈默なりしは氏の賢明を顯彰するに足る新らしき證據なりと云へりしを擧げて其の感情の敎育が等閑にされしを論じたるを以ても知るべし

以上述ぶるか如く感情そのものゝ性質に已に駁雜不測吾人に端倪せられざるものあるのみならず感情其ものに亦敎育し難き點の存するを見るそは吾人が前に

第五章　感情論

言へる如く感情は常に表はれ居るものにあらずして其根抵は心の最も深奥に潜伏し時により機に觸れて其の作用を發現するものにして知力及び意思の作用の如く徐々として繼續する者にあらず電光石火忽ち發し忽ち沒し之を拘束して研究するを得ず之を觀察して其の實際を求むること難し是故に感情は一の學科として之を習はしむること能はず知力の開發の如き方法を以て之を會得せしむること能はず要するに感情は之を一般學習の方法を以て授受すること能はずして注意を惹き起すが如くに感情を發現せしむること能はざるものなり現今新刊の或る教育書などには感情の養成の方法と題して其の五段教授の形式をさへ示されたり吾人は知識が人の腦中に類化せらるゝと同一の手續を以て感情が心中につくらるゝと云ふことの證明の確立せざる以上は到底此の如き簡單なる方法を以て教育し能はざるを信ず五段の形式を以ては感情は養成せられずして教授せらるゝなりもし斯くして兒童に授けたらんには遂に僞りて喜び僞はりて哀しむ僞道德家をつくるに陷り教育の本旨に悖ることなきか況んや感情は精神の作用中最も天賦に屬すること多きものにして造化は名人に厚薄冷熱甚しき差異を以て

之を賦與せり故に人によりては教育の力を以て温厚仁愛の情を與んと欲するも全く其の功を奏せざるものさへある事は吾人の常に認むる所のものなるをや感情教育の困難なること已に斯の如く尚且つ感情は知識の今日教へて直ちに記憶せしめ類化せしめ得るが如き簡易なるものに非ずして一つの感情を得しむるにも幾多の方面より之が發動を促がし心に感染せしめ之を傳染せしむるは常に間接の手段によらざるべからざるのみならず其の効果の著しかざると其の効驗を檢察するの難きと長日月を要するとは實に此の教育をして不限宛のものと速斷せしむるに足るべき難點なり

第二節　感情教育の困難

是を以て從來の教育者及び教育學者が容易に感情の教育に論を進めざりしなりさりとて感情は決して教育し得ざるにあらず否大に教育し得べしと信ず吾人が前に述べたる感情の性質はまさしく人の感應は修練によりて之を抑揚し得るものなることを示すにあらずや只模範を示して之れに習はしむる如き簡單なる方法を以て修養し得ざるのみ

第三節　感情教育の必要

感情の教育は固より智育に於けるが如く正確に其の方法を攻究して一の課業として之を施すを得ず臨時に偶然に事により折に觸れて其の媒介物の出で來るを好機として之を施さゞるべからざるや勿論或る部分に於ては幾分か之を課業的に施し得べき點なきにあらざるも此等は其の主要の部分にあらざるを以て此の教育につきては多少隔靴搔痒の感なきにあらず然れとも困難なり不限定なり効驗著しからずとも之を抛擲して舊來のまゝを繼續すべきか吾人は決して之に左袒するを得ざるなり何となれば感情それ自身の性質に於て吾人が利用して以て修練し得べき點決して少なからざるのみならず義務の觀念を強め德性を鞏固にし人品を高尚にするの基は亦感情にあるを思へば此の感情豈に忽諸にするを得んや請ふ暫らく其の要項を述べしめよ

それ人の行が只に道理心にのみ偏して更に感動の分子と伴はざるときは吾人は其の行爲に對して充分の信用を置くこと能はざるなり何となれば人の觀念たるや其の內包極めて狹くして冷澹なるも尠なければ例へ行爲の善なるにもせよ之を

實行するに於て充分の勢力を有せざるや明かなればなり子たるものは親に孝行すべきものなりとの道理にのみよりて親を養ふに孝養せざるには居られずと云ふ愛情よりして父母を養ふと其の行爲に於て何れか價値ある只觀念の反省にのみよりて義務を行ふと此の反省に伴ひたる快樂を以て好んで義務を果すと何れか其の價値貴きか快樂により刺戟されたる善行と只義務の觀念より出でたる善行と其の行爲は何れか最も堅固にして何れか最も確實なる爲さゞるべからずとして爲すことゝ樂しんでなすことゝは何れか最も永續すべき此等のことについては何れを考ふるも人は德義を愛して始めて其の人の德義は堅固となり善行を樂しむに至りて始めて眞に善人と云ふを得べし（アリストートル云へるあり曰く「德を樂しむ人のみ有德の人なり」と孔子も知之者不如好之者好之者不如樂之者と云ひしにあらずや是故に吾人は眞理の貴ぶべきことを知ると同時に之を好まざるべからず之を好むと同時に之を樂しまざるべからず善の喜ぶべきことを知ると同時に中心より之を好まざるべからず吾人は美の價値を知るのみならず之を愛せざるべからず兩親の愛敬すべきを知ると同時に中心より之を愛敬せざるべからず國家

の愛すべきことを知るに止まらずして眞實に之を愛さいるべからず

然るに之を日常の經驗に徴するに理と情とは必ずしも常に相一致するものに非ず生理學の知識は酒と煙草は養生に害あることを明かに示し各人は其の理の然る所以を知ると雖も些細の事を名として之に戀々として斷然禁止することを得ざるの輩多きにあらずや吾人は德義の善にして且つ美なるを知り不仁不義の惡にして醜なるを知るも而も吾人の感情は常に必ずしも前者を快とし後者を不快とせざるなりされば孔子も吾未見好德如好色者也と歎せられしにあらずや此の如く理と情とは必ずしも一致せざることあり之れ吾人が感情の教育の必要なりと主張するの點にして此の教育が最も困難なりとする點も恐らく是にあらんか

第四節　感情教育の目的

題して感情教育の目的と云ふ固より無情冷淡を去り怒るべくして怒り悲しむべくして悲み喜ぶべくして喜び笑ふべくして笑ふ所の天眞爛熳たる獨立の人物を作らんとするにあり卑屈怯懦諂佞阿諛の醜を去り勢氣活潑なる氣品の高尚なる

仁愛忠恕の君子をつくらんとするにそれ氣品の高尚てふものは高尚なる快樂を求め高尚なる事物に感應するより自然に外貌に流出したる一種感情の表彰にして之を意識の方面より云ふときは自己の滿足となり意識外の方面より云ふときは品性の完成となるべし

高尚なる快樂とは何ぞ快樂に階級なるものありや感情には貴賤高下の別ありやこれ吾人が暫らく研究せざるべからざる問題なりとす此の事に關してはミル氏は說あり今氏の說の概要を掲げんに

「快樂は程度的の差別即ち分量的の別あるのみならず種類上の區別あり肉慾の快は學術美術上の快と比較すれば後者の快樂の上品なることは何人も許すところなり」と

氏は尚は進んで曰く「人は高位の快樂と下位の快樂とが矛盾するときは下位の快樂が其の程度上にては强く且つ大なるも高位の快には曲げて從はざるべからず豚になることを好むかソクラテスになることを好むかと云はゞ縱令不滿足なりともソクラテスをとる方が滿足したる豚よりも尚甘んじて執り易きは之れ高位

の快樂を執らんとする自然の情より出でたるなり」云々元良博士は曰く「同博士著倫理學」

ミルの實利論につきて之を觀るに感官より來る所の快樂は下等にして精神上の快樂は高尚なりと看做すものゝ如し然り何を以て上下の區別をなし得べきかミルは之れに答へて曰く「茲に二個の快樂あり而して此等二個の快樂を經驗したるものが道義上の義務的感情に關係なく殆んど皆甲を以て乙よりも優れりとせんか是れ即ち最も望ましき快樂なり或は又甲は乙よりも尚多くの不滿足を生ずるを知りながら尚且つ甲を以て乙に優るものなりとなすのみならず其の他の快樂ありと雖も敢て動かざるは是れ甲と性質の優れるによるものにして其の度量の如きは敢て重んぜざる所なり」と此の論の當否につきては異說なきに非ずと雖も余の見る所を以てすれば其の論の抽象的にして實例に照らして論ずる所なきが故に世人をして果して此の如き場合に存在するや否やを疑はしむるものなりと信ず學者にして一科の專門的研究に從事し精神上の快樂を以て最も高等となしこれが爲めには身體の快樂を顧みざる者なきに非ずと雖も必ずしも此の如き人

を標準とし精神上の快樂は比しては衣食住の快樂を以て顧みるに足らずとすべからず何となれば社會生活の本義は先づ衣食住を充滿ならしめ而して後精神を發達せしむるにあるべければなり所謂文明の進歩は先づ衣食住の快樂を進歩せしむるにありとす是に由て之を見れば快樂の進歩を計るにありとす是に由て之を見れば快樂を進歩せしむるは同時に精神の快樂の進歩を計るものと云ふ能はず」云々

それ理論上より嚴密に之を見るときは快樂には高下の別あるものに非ざるは明かなりと雖も吾人は實際上に於て快樂に上下の別あるを認むるなり何となれば飽食暖衣の快よりも芳名を千歲に傳ふるの快は優り眼前の利害に感應するとは國家將來の利害を思慮して之に感應するとは其の優劣決して同等にあらず同じく自愛の情なれども身體を强壯にし容儀を整へ堅固なる志を以て世に立ち父母の名を顯はすと自己目前の利に汲々たるとは其の優劣果して如何社會の幸福の爲めに已むを得ざるに出でたる君子の怒りと前後も慮らず妄りに怒ると何れか高尚なる芝居見物の快と慈善の快とは如何「さらん」を弄するの快と讀書の快とを同一

第五章　感情論

視することを得るか是等の實際的方面より考ふるときは自ら其の中に上下の階級なき能はざるなり是に由て之を觀れば快樂は決して高下の別あるものにあらず凡ての快樂皆同等の價値を有するものなりとは主觀的方面より見たる議論にして之を客觀的方面より見るときは自ら高下の別あること明かなり

斯の如く快樂は其の之を觀る方面によりて階級を有すると有せざるの異論を生ずる所以は快樂そのものに高下あるにあらずや吾人の快感が一種特別の種類上の差異を生ずるにあらずや吾人は思ふ茲に芝居見物の快と慈善の快とあらんか之を比較するときは吾人は慈善の快を高尚と認むる所以は快樂そのものにあるにあらずして快樂物そのものゝ價値如何によりて快感に別を生ずるものならんと今之を方程

式に示さば尚ほ一層の明瞭なるものあらん

右に示せる x x' x'' は吾人が實際上に於ては之を快樂と分離して考へ得ざるを以て特に快感に或る芝居、慈善、讀書、君子、匹夫等の形容詞を附して之を稱ふるのみ而して x なる未知元素は慈善と芝居との函數にして其の元素を攻究するは之れ本論のよくする所にあらず暫らく倫理學者心理學者に讓らんも只吾人の遺憾とする所は現時人類の用語にして未だ是等の快樂に能く其の心情の感に適する名稱の附ずることと能はざるにあり此の名稱を此の條件に隨て附せんには恐らく芝居見物の快と慈善の快との性質に於て分量の差異に於て定質的定量的に之を區別し得るの能を有せざるべからず斯る研究の域には未だ現時の科學が進歩しあらずとせば後來に於て大に研究せざるべからざるの責存するに非ずや

上式に、示せる、x、は、快樂、物たる、芝居、と、慈善、との函數にして、x'、は、トランプ、と、讀書、と

第五章　感情論

の函數なりとせばx及びx′は快樂にはあらずx″は忿怒にはあらず語を變じて之を云へば快樂の量忿怒の量を增減すべきものにあらず只快樂とか忿怒とかの形を變じて望ましき快望ましき怒りとなすに與かるものなり其の望ましき快望ましからざる快と判斷する所のものは之れ吾人の先天的に有する所の分析し能はざる最後の感じなり吾人の心意を支配する窮極の感じなり良知と云ひ良能と云ひ良情と云ふもの皆此の感じの變態なり後悔と云ひ改悔と云ふも皆此の感じの表彰なり吾人は之を名つけて ought の感と云ふ

それ ought の感は吾人の有する天性にして教育を受けて始めて起るものに非ず只教育によりて發達するものなることは疑ひなきなり人の人たる價値は全く此の感じの存在による詳しく曰はゝ吾人は快樂を感ずると同時に吾人の浩然の氣を增養するものあり之を飢餓せしむるものあり苦痛を感ずると同時に浩然の氣を增養するものにして吾人は ought の感と快樂とれ只に ought に伴ふと伴はざるとによるものにして吾人は ought の感と快樂とが衝突する場合に於ては ought をすてゝ快樂に隨ふことを許さゞるなり之れに叛くときは吾人の心情は慈善の快をすてゝ芝居の快をとりたる如き感を生じて

何となくものの足らぬ心地するに至る要するに ought に叛く快感は吾人之を內心より快とするごとを得ず語を變じて之を云へば安定なる快樂となすを得ず ought の感は此の如き威嚴を有す吾人の感ずる快感は此の感の命ずる所に從はざるべからず從はざれば吾人は滿足の狀態にあるを得ず

善を見て快樂を感じ不善を見て苦痛を感じ一は之を求め一は之を避けんとす之れ吾人の天性にして所謂 ought の感之を司どる己の義務を果し己の責任を完うし中心一點の曇りなきは是れ則ち ought の感が吾人の快樂に贊成をなしたるときにして吾人は中心より快樂なり滿足なり曩きに所謂高尙なる快樂とは此の謂にして感情教育の目的とする所一に此の高尙なる快樂を求めしむるにあるのみ

それ人は ought の感に從へば從ふほど高尙なる人物にして氣品も亦隨ひて進むものなり人格も亦之れによりて亦固たることを得るものなり故に吾人の目的は其の第一步として飢寒の苦は忍ぶべくも ought の感の苛責には忍ぶこと能はざる人物をつくるにあり此の感明かなれば吾人の悔恨亦盛んにして常に人を道德の門に驅逐す而して最高の目的ほ道德と一致し ought の感に驅逐せられずして

自ら好んで自ら樂んで此の感の滿足を得るにありて此に至りて ought は快樂と一致するに至る此の勢力の順境なるに於ては吾人は始めて安心立命の地を得たること、なる此の頂點を稱して人情の圓滿發達と云ひ品性の完成と云ふ人は此の域に達して天をも怨みず人をも咎めず己を行ひて滿足し以て始めて天眞爛熳たる獨立の人物となることを得んか

第六章　方法論

第一節　身體と感情との關係

身體の健康を保ち及び之を保たしむるは兒童訓育上最も注意せざるべからざるものなることは言を待たずして明かなり然るに幼者の身體に關して世の父母たるもの幾人かある是れ吾人が家庭論に於て衛生上の知識生理上の知識が家庭に必要なる條件として揭げたる所以なりされば スペンサー氏は世の幼兒の多くは父母の無知不注意より其の羸弱を來せることを論じて曰く（スペンサー氏教育論）

「數萬の幼者は幼兒の中に病死し數十萬人は病弱の身を以て僅かに生存し數百萬人は未だ必ずしも達し難きにあらざる体格の強健に達せずして止むものあるを想へば世の父母たるものが生活の理法に暗きが故に其の兒に加ふる禍害の輕少ならざることを了知するに足らん更に幼兒の日に時に受くる所の鍛錬は彼等の一生の禍害若しくは幸福の繫がる所を思ひ且つ處置を誤まるの道は百中の二十に居ると雖も利益を招くの道は百中の一に過ぎざることを少しく思考するときは世間普通の無分別無思慮の規法の爲めに兒輩の被る損害の實に莫大なる所以を測定するに足らん男兒に給するに輕少なる短衣を以てするに決定せんか其の戶外に遊ぶときは寒氣の爲めに手足を赤色に變せしむるに至らん此の決定は該兒の生涯に影響し或は疾病となり或は生長の中止となり或は元氣の減損となり或は生長の後の其の得べき充分の强壯を得ざることなり隨つて成業と幸福との幾分を減損す兒童常に一樣の食物を給せられ或は滋養缺乏する物を給せらるゝ不幸の運にありとせんか必ず之れが爲めに後年の体力を損じ男子たり女子たるの實力を減ずるに至らん彼等にして喧しき遊戲

を禁ぜられ或は衣服充分ならざるより冒寒に堪へざる爲冬日には戸内に閉塞せらるゝとせんか此の如き事情なかりせば則ち遙し得べかりし充分の健全と強壯とに達するを得ざるなり」云々

實に斯氏の論ずる所少くも現今我國の父母たるものに一鍼を加ふるの價値ありと信ず

それ身體の健康の有樣生理的狀態の如何は感情發動の客觀的大主因にして其の基礎にして不充分ならんか決して需むる所の人物を得能はざるは勿論なり蓋し從來の心理學に於ては知識の部分は精しく論せられ且つ實驗せられて大に其の研究進歩の見るべきものあれども感情の研究等に至りては只學者の推理憶測に任せられつゝありき近來生理的心理學の上より品性陶冶を論ずるものあるに至れり今是等の學者の說く處を抄畧して兒童の感情の發現する有樣を述べん

それ兒童は觸覺と手の運動とによりて物の深さ物の距離等を知るを以て最初は手の達する範圍のものゝ深さ距離を知るに止まれども身體を動かし得るに至りて遠き隔りを知り色と形、距離等を連絡することを得るに至る是に於て始めて物

を握むにも最も正確に最も近き道を撰び得るに至るなり之れ畢竟色と形と巨離との三者が初めは毫も其等の間に連絡なく個々特立の現象なりしも是に至りて一致關連して眼を刺戟したるによるなり吾人は之を稱して法に適ひたる運動と云ふ兒童が最も近き道を採りて物を握むは之れ彼等が種々の不規則なる運動中最もよく自分に役に立ちたるものあるときは此の運動を後まで保存するによる發音の練習の如きも亦然り役等は種々の發音をなす間に於て時としては偶然に適當なる音を發することあり此の音が後まで保存せらるゝものにして此等の練習より遂に自由運動隨意發音をなすに至るものなり以下述べたる運動は何れも反射的運動に基づくものにして有意的の運動は未だ認むることを得ず此等の反射的運動の保存せらるべき價値あるものは後日有意的運動を生せしむべき內因となる者にして最もよく法に適ひたる運動は意識の上に最も強き印象を止むる何となれば法に適ひたる運動は兒童の快樂を起すべきものなればなり是に於てか斯る場合を望ましきものと感ず、一度之を感すれば之れが復起せられ容き樣子となりて保存せらるゝは當然にして此等の運動が役に立ちたりと感すれば感せ

らるゝ程益々望ましくなるに至る此の感が兒童の腦中に蓄積するときは兒童は最初に起り來りたるものに對して反射的運動をなしたる如き場合を自ら造り出して此の快を感せんとするの傾を有するに至る之れ則ち有意的運動の基礎なり要するに感情は有意的運動即ち行爲の原因にして感情の原因は氣力にあるなり氣力とは或る方向に運動せんとするの勢力に外ならず果して然りとせば感情搆成は其の根基に於て已に身體の各機關の運動に大關係あること明かなり加之人間氣質の根本は生理的狀態身體の健康如何にありて醫學者は人間の神經質多血質粘液質膽液質等の四質は固と之れ決して先天的に定まれるものにあらず全く營養の如何によるものにして生理的の事情を變ずるときは大に之を改むるを得即ち營養完全にして身體強壯なるときは血液豐盛にして感情も亦穩當圓滿なれども身體衰ふるに從ひて神經過敏となり尙衰ふるに及んで不活潑懦弱のものとなる云々さればカントも多血液膽液質の二つは共に感情方面に屬し神經質粘液質は共に執意的方面に關すと云ひヴントは之を感情の度量と速度との關係に當てはめ神經質は强にして速、膽液質は强にして遲、多血質は弱にして速、粘液質は弱

にして遲なりと曰へり（此の事は既に述べたり）此等の研究は之を心理學者に讓るべきが將た生理學者に讓るべきか要するに科學の進歩するに從ひて心意作用の根原を直ちに身體の腦細胞の變化、神經の生理作用の物質根原に一々其の基因を尋ぬるの任は實に心理學者にあるなり

以上は身體の狀態と感情との關係につきて諸家の論ずる所を略述したるものなれども吾人の日常經驗する所を以てしても各人は疲勞の爲めに幽鬱を來すを知るそれ幽鬱なるものは感情の壓迫せられたる最も不安定なる歪みたる狀態を指したる稱號なること明かなり若し夫れ疲れたるときは吾人の感情は實に其の平均を失ひて錯亂せらるゝものなり故に人の腹の滿ちたる時よりも飢ゑたるときは支配し難しと云ふは全く之れに基因するものゝ如し

身體の健康其の度に適し筋肉の營養其の當を得たる人は活氣充滿して外觀に形はれ顏色も亦自然に快樂の徽を呈するは之れ生理的圓滿なる狀態なり是の時に於て人は最も精神作用活潑敏捷にして最も進歩的の思想を有し懦弱、無氣力、短氣、偏屈、幽鬱等の如き心象は絕て腦中を去りたるなり是に於て始めて能く喜び能く

慈、能、く哀み、能く愛する、と云ふ得る獨立男子の基礎を得たりと云ふべし（）兒童の身體を強壯ならしむるは徒に筋肉其の他の爲めのみにあらず必ず意の爲めに強壯ならしむるは勿論必ずや理明かなるの表裏の如く一面を害すれば從ひ其他面をも害せざるを得ず」と論せられ希臘古代の教育が美にして善なる人をつくるを以て現想となしモンテーン氏も一個の人は之を必ず意と身體と二分すべからずと主張したるが如く其の訓練を偏廢すべからずと云はれし等は實に此の意に外ならざるなり是れ吾人が本論に於て先づ兒童養育運動等につきて論せざるを得ざる所以なり（）

以上は其の總論の一部なり（）

第二節　子供の食物

幼兒の身體の取扱ひにつきては吾人未だ充分に經驗なき事柄に關し深く之を研究するの餘暇なきを以て本論の主要なる個條たるにも拘らず暫らく專門家の論ずる所に任じ之を省きて直ちに食物につきて聊か卑見を陳せんとす

初生兒には概ね乳汁を與ふ、是れ乳汁の性質たるや幼兒の消化器には最も適し其の滋養も亦幼兒の體方に應じて天然の斟酌あるものにして幼兒漸く生長し消化力も亦增進するときは從ひて乳汁は其の成分を增加し其の質も亦濃厚となるものなり以て知るべし母乳は造化が赤子に授與したる最良の滋養物なるを、

然るに近來二つの流行物として器械を用ゐて牛乳を幼兒に與ふるものあり但し此の事たる母親の乳汁の不足なる場合若しくは母體の病氣等より醫師の禁制により哺乳を停止されたる場合に於ては臨時には用ゐるは止むを得ざることなれども中流以上の社會に於ては徒な母乳の分泌如何に拘らず好んで牛乳を用ゐるの弊あり中流以下に於ても之れに摸倣して折角天然の與へたる母乳を粗末にして人工哺乳を用ゐて以て小兒養育の一新法を得たりと考ふるものなり實に思はざるの甚しきことと云ふべし、それ母乳は全く天然が其の子の營養物として賜與したるものにして牛乳は牛兒を養ふ爲めに天然が賜與したるものなり然れども其の滋養に於て頗る價値あるとは吾人も夙に知らざるには非されども食道の內面

消化液の分泌不完全なる消化器を有せる幼兒の唯一の營養物として存する所の母の乳汁を措きては他に適當なる食物を未だ有せざる幼兒に好んで之を强ゆるに至りては酷も亦甚しと云ふべし今牛乳を幼兒に給する場合に於て不利と認ひる數點を擧ぐれば

一、牛乳は小兒には其成分强きに過ぐるを以て之を用うる場合には多少の水分を混せざるべからず其の水分を混ずる割合は幼兒の生長身體の如何により又は其の加減料酌を加ふるに際し其の適度を得易からざるとにして且つ長時間空氣に暴露されざるべからざるを以て母の乳房より直ちに幼兒の口中に吸入せらるゝ如き新鮮のものゝみを常に供給し能はざること

二、牛乳は極めて腐敗し易きもの

三、販賣者の不德義より益々增進して其の量を增加せんが爲めに他の液體を混入せずと云ふことの保し難きこと及水混入せらるゝも單簡なる試驗法にては之を發見し能はざるを以て其の正否を辨ずること能はざること

四、牛乳を用ゐるには必ず哺乳器を使用せざるべからず隨ひて哺乳器の清潔保持の困難なる動もすれば器の局部に附着せる乳汁が時を經て腐敗して新鮮なる乳汁までも腐敗せしむるの媒介となるの恐あること

五、牛乳を用ゐるには常に他より温度を與へて之を温めざるべからず然るに其の温度の調節維持は決して母の血温を以て温めたる如き中庸を得難きこと

六、幼兒の飲み殘したる乳汁は之を保存するも何の益もなく之を再び用ふるときは却て大害を釀すの恐れあれば常に之を捨てざるべからざる如き不經濟的のものなること

牛乳そのものゝ滋養如何は暫く措くも其の取扱に於て非常に困難なる其の性質に於て信を置くこと此の如くなるを察せば母親の乳汁の眞正なる其の便利なる其の消化力に適合せる決して同日の論にあらず然るに之をすてゝ彼を取る世人の奇を好む實に嘆せずんばあらず

今小兒養育に於ける牛乳の位置を述べんとす、それ母親の身體薄弱にして乳汁の分泌少なく小兒の胃を飽かしむるほど母乳の供給し能はざる場合に於ては出來得る限り乳母を撰ぶを穩當なりとす然れど其撰定法につきては最も注意せざる

べからざるなり今乳母撰擇の標準を示せば

一、乳母の身體は健全にして乳汁に富み且つ遺傳病等の血統上の憂なきもの

二、年齢に成るべく生母に等しきか或は之より若きものにして二十年以上三十年以下のものたるべし且つ其の體質の最も生母に近似せるもの或は之れに優れるもの、

三、資性温順にして苟も輕卒の振舞なく且つ最も正直なるもの

四、生來賢く且つ感情の平和なるものにして特に愛情に富み親切なるもの

五、生理上の要則を守り暴飲暴食等のことなく且つ清潔を重んずるもの

六、成るべく出産の時期が生母と大なる差なきもの

七、言語丁寧にして品性の賤しからぬもの

以上掲ぐる個條中にも固より輕重の存するあれば此の標準に合格せる乳母の撰擇し難き場合に於ては一、二、五、の資格を有するもの以上たらざるべからず是等の標準に據りて比較上合格に近きものを撰びむも猶ほ注意せざるべからざることは乳母を家に雇ふと乳母の家に子を托するとの場合につき考へざるべからず乳母を家に雇ふの場合に於ては常に生母及び家族が共に生活し居るを以て左程の面倒もなけれども中等以下に於ては多くは幼兒を乳母の家に托するを通例とす斯かる場合に於ては右に述べたる標準の外尚其の夫たるもの人と爲り其の職業及び其の家風の如何を察もして之を托せざるべからざるなりそれ母親の身體薄弱にして乳汁の分泌少なくして小兒の胃を飽かしむること能はざる場合に於ては乳母を撰びて之を雇ふか若くは之に托すべきも乳母にして適當なるものなく或は適當なるものあるも之に依頼して小兒を養ふ程の資力なきもの或は生母が臨時の病症等にて哺乳を暫時停止せざるべからざる場合に於ては止むを得ず牛乳養育に依頼せざるを得ざるなり牛乳を哺ましむるには必ずや其の乳の純良なるものにして且つ新鮮なるものを撰ばざるべからず之を用うるに先ちて先つ醫師の手を經て其の乳の資質を檢し之れに混和すべき水分の割合及び糖分の割合を定め漸次に其の割合の變化をも知らざるべからず斯くして之を哺ましむるには適當の温度に温め哺乳器により

第二節　子供の食物

なる事を得ば牛乳養育も隨分其の効著しきものにして牛乳養育によりて生長して健康体を保ち居るもの現今小學生徒中に往々見る所なり然りと雖も前已に述ぶるが如く其の品の清鮮なる純良なるものゝ得難きと之が調合の適度を誤まり易きと動もすれば腐敗に歸することゝ哺乳器の取扱の面倒なる等は吾人は小兒の身體に恐るべき危害を受ける理自ら存するを見るのみならず實際に於ても亦其の例少なからざるなり是れによりて之を觀れば牛乳は小兒の食物としては第三に位するものとせざるを得ず

現時坊間に販賣する「こんでんすみるく」も亦其の原料は牛にして牛乳よりは少しく甘味を有し其の成分効用等は先つ牛乳と大同小異なり精鮮の乳を得難きの恐あるときは寧ろ之を採用するの便なるに如かず然れども之れにも種々正否ありて品等を撰ばざるべからず特に哺乳器の清潔に對して守らざるべからざるの注意は毫も牛乳と異ならず其の用法及び水分の混入一回の量等は大抵鑵の周圍に案内しあるものなれば使用便にして臨時の救濟には最も便利なる幼兒の滋養品ならんか

第六章　方法論

第二節　幼兒の食物

茲に注意せざるべからざるは從來母親若くは乳母は小兒の啼聲を發するを聽けば直ちに哺乳せしむるの風習あるも元來幼兒は飢ゑたるときにのみ啼くにあらず種々の事情より不愉快を感じ亦啼くものなるを其の度毎に乳汁を與ふるは誠に心得ざること云ふべし西洋の家庭に於ては常に時間を定め其の定刻に至らざれば如何に泣くことあるも決して規則を破りて濫りに其の欲するまゝに乳を與ふることなきは勿論總ての事食極めて正格なる規定に從ひて取扱ふことに馴れしめ此の習慣は子供第二の天性となり時至らざれば其の請ふ所を得其の欲する所をなすこと能はざるものと心得小兒は漸次其の良習に馴れて容易に泣き叫ぶことなきに至ると聞く然ればにや西洋人の幼兒は我國の幼兒の如く叫ぶことは少なしと現時に我國にても此の法を實行し居るものも或る部分にはあるやに聞けども未だ一般に行はれ居るにあらず今後の幼兒に對する食物の供給に於ては其の時間と回數と量とを定め之に從ひて與ふるに非ずんば如何に清鮮なる乳汁を有するも之れ只に幼兒の胃を害ふの具となるのみ、

尚注意すべきは哺乳の際幼兒の眠りたるとき是れなり斯の場合に於ては往々哺

したる乳を嚥下せずして口中に存在せるまゝ睡むることあるものなり若し此の如くしてありたらんには是等の乳汁口中にて腐敗するの虞なきにしもあらず保護の任にあるもの哺乳の度毎に必ず口部を布片にてよく拭ひて清く美はしくなすこと肝要なり

小兒の身體自然の要求として糖分を好むものなり之が爲めに一般に菓子を子供に與ふるの習慣あり我國現時の菓子たる糖分の多きに過ぐるのみか澱粉質に非常に富むもの多し從ひて小兒の消化器を害すること甚し吾人が第二章に述べたる如く小兒の消化器は澱粉質脂肪質等には後年に至るも之を消化するの機能に乏しきものにして只蛋白質の消化は比較上早くより行はるゝを以て菓子に於ても是等の方面より品質を撰んで之を與へざるべからず只に兒童の好みにのみ一任するは強ち最良の法にあらず

幼兒已に滿三年頃よりは乳汁を以て滿足せず好んで大人の如く箸を以て食はんと欲し茲に膳椀等を要求し飯を食するに至る或る人曰く穀類の食物を小兒に與ふるは消化も肉類に比して惡しきを以て米の如きは粥となし麥粉なれば湯に溶かし少量を與ふれば害なしと是れ或は一理なきにしもあらざれ共吾人の實見する所を以ては四五才の小兒にして而も能く運動する壯健の兒にありては左程に心配するに及ばず大人の食物と同樣のものを食してよく運動するに於ては三食の間にも眞に空腹を感じ食事を要求すること屢々なるものなり此の時期に至れば粥のごときものを與ふるも壯健なる男子にありては決して滿足せざるなりとて吾人は常に小兒の爲めに肉類を用意せんことを父母に要求するの無理なるを知る是に於てか吾人は通常の大人の食物に多少の斟酌を加へて之を與ふるを穩當なりとす卽ち高年の老人などのある家庭にありては飯を柔かにして之を進むるを通例とす是等の程度を少しく加減して兒童に與へたらんには左程の面倒もあらざるべし但し牛乳或は「こんでんすみるく」の如きものを一日一回與ふるは最も効果あるものとす其の食量の如きに至りては異說なきにあらずと雖も吾人は甚しき制限は此の時期に加ふるを好まず要は其の兒の運動の奬勵如何によるものと信ず

第三節　衣服

第六章　方法論

吾人が茲に述べんとするは小兒の衣服としては如何なる形を以て適當とすべきかにあり之を撰ぶの標準は他にあるにあらず運動自由にして身體の取締上便宜なるものを求むるにあり勿論其の品質も亦衛生上決して忽諸にすべからざれども吾人は其の品の高價なるものを出來得る限り避け之を汚すも破損するも決して惜氣なく取扱ひ得べき廉價なるものにして且つ柔軟と輕暖との其の度を得たるものを希望せざるべからず之れが爲めには綿布及びふらんねる等を適當なりとす

其の幼少なるものにありては男子も女子も服制を異にするの要を見ず只其の仕立方の寬にして動くも走るも自由なる樣にするこそ肝要なれ漸く生長して五六歲に至れば幾分か男子と女子との服裝に於て異なる所なかるべからずそれ現時流行の男兒の筒袖は大に其の形式の子供風にして運動にも亦大に便宜なるが如し然れども其の袖の餘りに細きに過ぐるは大に着脫に不便なるのみならず肩脇等を壓迫するの恐れあれば時々刻々發育の盛なる兒童には大に注意すべきことな

り特に冬着の綿入の如きは吾人全く其の不利なるを知る、それ綿入は兒供の爲めには運動不自由にして常に身體を壓し且つ洗濯に不便なるは天下の父母の知る所ならん冬季寒氣凛々たる日に當りても元氣活潑なる兒童にありては寒さに感するつらさよりも寧ろ衣服の重ね着の爲めに適意に運動し得ざるのつらさの遙に大なるを見るなり要するに綿入は老人には適すべきも小兒には極めて不適當のものなれば曾て國府寺氏が其の敎育學に於て其の改良說を稱へしも强ち極端にあらざるべしと信ず

女子にありては吾人大に改良せざるべからざるものあり、と信ず、我國從來の婦人の服制は敢て支那風の如き程にはあらざれども隨分女子を御座敷の飾り物の風につくるの弊あり是を以て女子の著物は實に步行に不便なること甚し特に吾人が衛生上身體の發達上世の流風に逆ひて改良せざるべからずと主張するは婦人の帶にあり婦人の帶たる其の質の善良なるものにありては堅くしめて且幅廣く之を締めるときは胸部と腰部とを同時に壓迫し少年の女子には特更やの字形とか背負帶とか云ひて背部全體に之を負はしむるに至る之れ勿論盛裝したるときの

第六章　方法論

有樣なれども平時に於ても此の習慣を以て女子の帶を仕立るを以て自ら布幅の廣き實の堅きを貴びて之を用うるを常とす且つそれ帶は衣服の附屬品たるに拘らず婦人用のものにありては其の價より云ふときは尊ろ衣服が帶の附屬品たるの感あり是の如く我國の婦人の帶が經濟と衝突し衛生と衝突するも尚之を用ゐて飽足らず之に加ふるに帶揚げとか脊負揚げとか及びばちんの如きものを以て特更に締めつけて非運動的とす此の風たるや徒に成人したるもののみならず五六歲の女兒より之を見て眞似し最も無邪氣に無頓着に運動すべき必要なる時期をして斯る弊習の爲めに妨げらるゝは吾人の實に憂ふる所なり家庭に於ては專ら此の點に注意せざるべからざるにあらずや

人或は曰はん然らば吾國の婦女には帶を締めしめずして之に代ふるに何を以てせんかと吾人帶の改良につきては聊か說なきに非ず左に之を一言せん

從來の女子の衣服は其の大人にありては身長よりも六七寸も長く製して着用の際下締を以て之を着丈けに締め揚げ而して其の上に帶を締め帶の上に種々の附屬品を締めつけるを通常とす此の如く軀幹の主要の部は常に是等の締物の爲めに壓迫せらるゝものにして衛生上の不利なること言を待たずして明かなり吾人は徹頭徹尾此の帶と衣服の繃折とには贊成するを得ず吾人は之を全廢して全國の女子少くも壯年以下の女子には一般に婦人袴を着用するの利なるを主張するものなり特に家庭に於ける學齡以前の女子にありては筒袖に加ふるに袴を以てせば其の格好の如何に可愛らしきことよ決して現時の長袖と脊負帶の比にあらざるなり況んや其の運動とか身體の自由とか立ち居振舞の便利なる到底同日の論にあらさをや

それ婦人袴の現時或る一部の婦人社會即ち女學生、諸工業場に於ける工女、看護婦等に着用せらるゝを見るに其の歩行の便なる衛生の理法に適せる幅廣の帶の如き高價を要せざる等の利あるのみならず後來吾國の令嬢達が一般に之を着用するに於ては之を現今の風に比して姿勢を規す上に於て女子運動奬勵の上に於て女子職業の上に於て非常の便利を來すべく尚且つ蟲妓風に遠かりて氣品も亦一層の高きを加へんドクトルベルッ氏曾て女子の衣服につきて曰く(茗溪會雜誌)

「日本の女子の衣服の端折と云ふものはどうゆうものであるかと云ふに着物を

第三節　衣服

引くときに其の端折を降して長くし又歩くときは端折つて置く爲めに附いて居るものであるそれ故に日本の女子が衣服を着る時には始めに上の褄先を揃へ下の腰紐を緊めて端折の少し上の方はそろは好い加減に滿着して置くそれ故に紐を以て腰を強く緊めるばかりでなく端折のあまりたる襞まで皆腰の處にたぐめて置いて益々腰の運動を妨ぐる即ち其處のだく〳〵の始末をつける爲めに紐が幾本も要るので又帶を締た上でも脊負揚げばちんと云ふやうに澤山の紐を結びつける此の端折の爲めに運動を妨ぐることも亦實に非常なもの、それ故に平素戸内に在りて裾を引く樣な生活をしないものは何も別に端折をする必要のなくつても宜しい端折をする必要のない婦人は始めから男衣の樣に着だけに仕立てゝ了へば宜しい禮服は長くして置く必要もあるが通常の着物は始めから着丈けに拵へても差支へはない何も腰部に衣服の貯蓄をして置くには及ばない是れだけはどうぞ速に明日からでも廢して戴きたい古の女子の衣服を見ると決して端折は無かつた端折がなくても少しも差支はない故に廢すに如くはない」云々

第六章　方法論

第三節　衣服

右はベルツ氏の意見を三島氏の代演したるものなりと雖も現時の風を看破したるものなること明かなり吾人思ふに端折は兎に角一般に婦人の着物は長きに過ぎ從ひて女兒の衣服までも長く製するの傾きありと思はざるの甚しきものと云べし

家庭に於て最も注意すべきは小兒に美服を裝はしむること之れなり勿論父母は自分の愛子を飾ることなれば或は其の度に過ぎ易きは人情なれども其の品柄の上等にして價の高きものは之を着る當人の心情に及ぼす影響少なからず之を汚し之を破るときは或は父母の叱責を蒙る恐ある場合に於ては專ら之を顧慮して其の遊戲運動を快活に行ふこと能はず要するに美服は男子にありても女子にありても運動を抑制する傾きあるものなれば勉めて廉値にして更に是等の心配のなき樣のものを撰ばざるべからず東京のみならず地方に於ても都會の商人等には往々自家の威を世間に吹聽せんが爲めに特更ら其の子女に盛裝せしむるの弊ありと聞く若し斯かる動機より兒供に美服をつけしむる如きことあらば最も其の子を害するものと云はざるべからず何となれば元來兒供特に女兒にありては

天性衣服の美を競ふの風ありて父母が之を奬勵するに於ては益々卑劣の心情を養ひ單純潔白なる情操を失はしめ加ふるに卑屈不活潑なる氣質を養成するものなればなり故に嘗へ父母自然の愛情より出でたるものと雖も非は則ち非なり吾人は子女の爲めに其の父母に忠告せざるを得ざるなり況や前途多望なる最愛の子女をして示威的廣告的の人形視して之を盛裝せしめ毒性甚しき紅粉を塗抹して他人の稱贊を得て得々たるに於ては豈此の風を矯正するの必要なしとせんや之を要するに衣服の用は身体の溫度を調整し夏季に於ては炎熱の逼迫を禦ぎ寒氣の侵入を阻止するにあるを以て第一に此の目的を滿足せしむるに足るべきものたらさるべからず然れども人体の皮膚たる其の鍛錬の如何によりては隨分寒暑に堪へ得るものにして顏面の皮膚の如きは祖先より之を露出し來りたるの習慣として之を寒氣に暴らすも被服を以て被服は寒暑を凌ぐの具たるに相違なしと雖も家庭に於て子女の皮膚を適度に強からしむるの方法を考へ時に當り偶々薄着になりたる位にて直ちに感胃に侵さるゝ如き

柔弱なる子女をつくらざらんことに注意すへし勿論人の皮膚は顏面のみならず如何なる部分にても其の訓練の仕方に從ひて習慣づけ得るものにして少しく寒き空氣に觸るゝも之れに堪へざるものあり寒風凛々たる朝に於て水中に飛び込みて更に平氣なる漁夫ふり彼も此も同一の人間にして其の强弱の差を生ずる此の如し世徒に輕暖之れ務めて子女を軟弱につくりたりと考ふるものあり誤まれるの甚しきものと云ふべし

若し衣服にして此の第一の目的を達し得るものなれば吾人は衣服の仕立方を研究して身体を壓迫し生長を妨害せざらんことを目的とせざるべからず此等の二條件を滿足せしむるものにして而も亦運動に便宜なるものたらさるべからず之れ第三の必要なる條件にして此の條件を滿足せしむる能はざる衣服にありては如何に第一第二の條件を充たし得るも小兒の衣服としては採用すること能はざるなり何となれば吾人が前節より述べ來りたる食物衣服は最も身体を營養保護するに必要なる元素なれども此等をして窮極の目的を達せしむべき期成原因は

第四節　兒童の運動

人は如何程口に美味を喰ひ身に輕暖を纏ふも運動の一法を欠くときは決して身體の健全を維持するを得ず、それ筋肉の性質たる之を適度に使用し運轉すれば隨分よく熟練し發達するのみならず之によりて得る所の吾人の幸福は消化作用を助け食慾を進め血液の循環を促がし精神を爽快ならしめ幽鬱の氣質を除き全身の活力を增進するにありて適度によく運動をつとむるものは古今東西を問はず常に快樂に且つ長壽を保ち得ることはよく人の信ずる所なり已に知る如く兒童は天然に活動の性に富み其の睡眠時間を除くの外は自由を渴望し瞬時も休止することなく常に五官に觸るゝものに應じて運動するものなり吾人は此の性を利用して充分に其の躰軀の發育をはからざるべからず之が目的を達せんには宜しく幼少の中より適宜に之を奬勵せざるべからず小兒は二三歲より漸次運動を始め四五歲の頃に至れば其の健全なるものにありては能く運動するものにして常に之を自由に放任するときは一局部の運動にのみ止まりて均齊の發達をなすこと能はざるに至ることありよし發達は均齊なりとするも尙且つ父母の不注意より發達して從々兒童を左きゝにすることあり之れ將來小學校及び中學校に入るの時に當り非常の不便を感せしむるのみならず軍隊の如きに於ては右手を多く用うるの規律なるを以て左手をのみ使用するの習慣ありしものには大に困難を感ずる所なり是れ偏に父母の幼者に對する監督の不行届より遊戲運動の際に得たる習慣なり父母たるもの傳婢たるもの專ら注意して其の遊戲運動の間にも務めて是等を監督せざるべからず且つそれ兒童が天然に有する活發の特性にのみ放任したらんには徒に局部の運動練習に偏するのみならず時としては快樂に誘はれて其の度を過ごすの弊あり運動過度なれば疲勞を來し爲めに發熱することあり適度の斟酌は最も必要にして又敢て爲し難きに非ず

兒童四五歲頃に於ては大概運動は特別の奬勵を待たずして行はるゝものにして要は其の向け方一つにありて適度にも過度にもなるのなり只一般に行はれ居らざるは夕食の散步なりそれ父母たるもの傳たるもの兒童をして毎夕郊外に出で

ゝ廣濶なる所に於て散歩しつゝ新鮮の空氣を呼吸せしむることは精神の給養上身體の衛生上實に必要なることにして其の男兒たると女兒たるとを問はず一般に此の習慣をつくらんことを望む斯くして子女を育つるによりて習ひ性となり其の子をして終身運動を好むの人とならしむることを得べし

運動を好む兒童にありては寒暑によく堪ふるは勿論食物の少し位の過量は決して胃を傷ふの憂なく筋肉の發達と精神の快活とは之に伴ひて得らるゝ結果にして人の幸福の大部分は全く是に基因するものゝ如し

吾人現今の社會を一覽するに概して彈健なる身體を有し夏は一葛冬は一裘よく之に堪へ而も逞しき筋肉と爽快なる精神とを有するものは下等社會の勞働に從事するものに多し高等社會の人士に至りては男も女も顏色憔悴冬は輿津に寒を避け夏は函根日光に暑を凌ぎ然も尚ほ其の幽鬱を霽らすこと能はざるもの多し遂に世人をして身體の壯健を求むれば貧窮なるに如かず富を望めば健康を失はざる可らずと云はしむるに至れり一は粗衣粗食而もよく健康彼が如く一は美味佳肴輕暖是纏ひて而も軟弱此の如し畢竟是れ身體の健康は專に食物衣服にのみ

第四節　兒童の運動

よらざるの例證たらずんばあらず吾人は衣服飮食の以て健康の大元素たるを知る。然りと雖も是等の元素をして身體の健康に役立たしむる如く取扱ふは吾人の自己に對する義務にして之を有効ならしむるは只運動の一あるのみ

上流社會に於ては已に衣食の大元素を充分に具備しあるを以て若し其の運動を奬勵し之を實行せば將來我國の有力なる社會に強壯なる身体を有する人士を見る決して難きにあらざるを信す

それ西洋諸國に於ける上流社會の人物は其の強健の度決して下等の勞働社會の人に讓らず否寧ろ滋養の優れる丈けそれ丈け多く強壯なりと聞く之れ實際の風習上彼の勞働を好み運動を奬勵し吾は勞働を恥ぢ運動を輕蔑し共同的運動の如きは兒供らしきことゝ考へ居るもの多きの致す所なり西洋諸國の公園等にては休日には老少相混じて無邪氣に活潑に其の技を戰はして運動するの風あり我國人にも少しく此の風を習はしめ老人氣取の風は之を排除したきものなりと或る紳士は語られき

近來は少しく運動を奬勵するに至りしも之れ只學生に於ける一部のみに限らる

るが如し之を全社會に求めんには吾人先づ之を家庭に求めざるへからす何となれば運動を好む家庭には運動を好む青年を生するは爭ふへからざる事實なればなり只に牛乳を飲み雞卵を食するを以て衛生養護の道を得たりと思ひ更に筋骨を働かしむるに注意せざるは所謂健康に入らんと欲して其の門を閉づるものにあらずして何ぞ

以上は現時に必要なる一二を掲げたるに過ぎず要は今後の兒童には幼少より運動は最も衛生に必要なる條件にして一日運動せざれば一日の健康を損ずることを知らしめ之を實行して筋骨を強壯にし快活純潔なる精神を養はしめ以て以下論ずる感情の教育の基礎をつくらしめんとするにあるなり

第五節　家庭に於て養成すべき感情

前數節に於て聊か身體に關する注意の二三を擧げたれば茲に家庭に於ては如何なる感情を養成すべきかにつきて述べんとす

それ感情の性質たる其の顯はるゝ方面は甚多くして自愛的の元素を含むものあり他愛的の元素を含むものあり審美的元素を含むものありて決して一括して論ずる能はざれども其の家庭にて養成し得べく且つ養成せざるべからざる感情は同情及び美情之れなり吾人は此の二種の感情の由て來る所を研究し其の範圍を明かにせんとす

一、同情　元良博士曰く「同情とは其の字義によりて明かに解さるゝ如く他人の感情の外に現はるゝを見て自身の精神中に之と同樣なる感情の發するなり」と吾人此の情の發現する根原を攷ふるに其の源自ら自愛に出づるが如し俗諺にも「吾身を捻りて人の痛さを知れ」と云へり實に人は己の不快なることは人も亦不快なり己の快樂とする所は人も亦快樂なるべしと知り己を以て人に推し始めて他人の行爲境遇に同情を表することを得るなり然れども同情の根原たるや心理學者間に も種々異說ありて吾人其の何れを撰んで之に從ふべきかに惑へる所なきにしもあらず然りと雖も吾人は此の情は全く自愛の情が其の根原となりて一種特異の性質を有するに至りたるものなることを信せんとす語を變じて之を曰はゞ同情は自愛を目的として其の方便に發するものにあらず自愛心が自然に人間に賦與

せらるゝより遂に之が擴張して此の精を發生するに至りたるものなり例へば己の欲せざる所は人に施すことなかれ、己の欲する所は之を人に施せと云ふが如き格言は東西の賢哲共に唱ふる所のものなれども是等も皆自己と云ふ自愛心より推して遂に他を愛するに至りたるものなること明かなり故に吾人は曰はんとする同情は自愛より分化して生じたる感情にして決して自愛の方便にあらずと、何となれば同情の性質として往々自愛と衝突することあるを見ても明かならん如何に私利私慾を滿足せしめんとする人と雖も己の子弟が非常なる困厄に陷るを見る時は之を見捨てゝ唯自己の安樂を以て快とする如き人はあらず況や普通の人情を有する人にありては其の困難を見るに忍びず自己の快樂自己の幸福を犧牲にするも其の難を救はんとするに於てをや之れまさしく同情の命ずる所にして曾て此の情が自愛の方便自愛の從屬たらざることを表示するものなりと云ふを得べし

それ同情は自愛を目的とせず且つ此が方便たらざること明かなり果して然らば同情は全く自愛と無關係なるか同情は先天的に存するものなるか人に自愛の情

なくして同情は存在し得るかと云はんに吾人は全然先天的なり自愛と無關係なりと斷言し得ざるなり何となれば人にして己を愛するの情なくんば人を愛する情の起る理あらざればなりそれ人は耳ありて音響を知り口ありて言語を發するも し外界の刺戟に感應する所の感官即ち聽官神經の感性なからんか吾人は音聲を聽くことを得ず隨ひて言語を發することを得ざるべし人の筋肉にして感覺なからんか吾人は如何にして吾身を捻りて人の痛さを知ることを得んや自愛と同情との關係恐らく此の如きものにして他人の感情と自分の感情とを結合せしめ理解せしむるの元素は全く自愛の情なり故に其の發達の初めに於ては殆んど自愛に近くして漸々發達するに從ひ益々之れと遠ざかり遂に其の高等なるものに至りては全く反對の元素より成る如き觀を呈するに至る然らば眞正に同情を發するは眞正に自己を愛するより起ることと明かにして自愛の感深きものにして始めて同情の感深きに至るべし之れ吾人が第二章に於て兒童の自利性を利用して自他幷立の幸福を覺らしむること恰も熟練なる漁師が逆風を利用して船を風上に進めしむるが如くすべしと云ひしは此の理に外ならざるなりされば人は已に苦

痛の經驗なくんば以て人の苦痛を察すること能はず同病相憐むとは之れ此の謂ひに外ならざるなり是を以て吾人は同情を養成するに先ちて自愛の情につきて之を改究せざるべからず況や人にして自愛の情放任せられんか世界は實に殺風景なるものとなり圓滑なる交際は得て望むべからざるに於てをや是に於てか自愛の情は亦家庭に於て充分注意せざるべからざるものとなるなり

二、美的感情、何をか美的感情と云ふ一言以て之を蔽へば花鳥風月の醜美を見て快不快を感ずる如く善を行ひて滿足し不善を行ひて不安を感じ他人の行爲に欽仰し或は賞讃し或は輕蔑し眞理を聞きて之を悦び不實を聞きて之を避くる等人の精神活動及び其の人と爲りを見て發する所の一種の感情を指して名づけたるものにして道德上の快不快凡て其の範圍に屬す

それ美の感の由て來たる所を尋ぬるに全く先天的に其の源を有するものにして只に理解とか經驗とか云ふ如き學習によりて初めて生じたるものに非ざるなり一枝の花を採り之を美と感ずるは吾人が美の感性を有すればなり其の美の元素を研究せば或は眼球筋肉の感とか色澤の調和、觀念の聯合とか種々の原因ありて吾人に感動を與ふるには相違なきも之を美と感じて快樂を惹起するは吾人の先天的要素のあればなり砂糖は甘きものなり然りと雖も之を甘しと感ずるは吾人の感受性なり此の感受性を有せざらんには如何に美味美形の元素を指摘して之を說明し其の理を會得せしむるも之れ徒に知らしむるに止まりて感せしむることは能はざるなり已に人には美を感じ善を悦ぶの天性あり然りと雖も之を養成するにあらずんば決して其の全きを得ざるなり

人の心意發育の順序として易より難に簡より繁に有形より無形に進歩するものなることは明かなり惟ふに有形の美を愛するの感情は無形の精神活動の美を愛するの情と一致し易く繪畫彫刻の美を愛するの情は進んで道德眞理の美を愛するの情と和合して益々其の强度と確實とを加ふるは之れ自然の理法にして已に感情の性質によりても此の聯合の起り易きを見るを得るなり故に吾人は美を愛するの情を以て善を愛するの情の階段と見做すにあらずと雖も兩者相待ちて愈其の完きを得るに至るは明かなり是に於てか家庭に於ては善を愛するの情を養ふと共に美を愛するの情を養ひ置くこと肝要なり

以上述ぶる所によりて現時の家庭が其の子女を敎育するに當りて養成すべき必要なる感情の種類は之を大別して三種とすることを得べし今左に其の大略を列擧して之を表示せば

一、自愛情……（好奇心、求知心、愛讚心、
　　（忿怒、恐怖、失望、嫉妬、

二、同　情……（玩具、花木、禽獸等に對する初步の同情、
　　（父母、兄弟、朋友等に對する愛情、
　　（一般人類に對する愛情、

三、美的感情（有形……（美術的製作物、繪畫、彫刻、建築、音樂、唱歌、天然の風景等の美情、
　　（無形……（眞理の愛、
　　（善の愛、

第六章　方法論

以下節を逐ひて是等の感情の養成法及び取扱法につきて注意すべき要件を述べんとす

第六節　自愛的感情の取扱法、

自愛の情は天然が各自に賦與したる自衛自護の心的活動にして其の下等なる體慾より高尙なる精神的欲望に至るまで皆此の情の變化調節して各其の所を得たるものにして自由を愛する如きも又廣き意味に於ける此の情の發動なりと云ふを得べし

吾人熟々此の情の發動する有樣を考ふるに概して他の補助を待たずして自然に過度の發育をなし易き傾向を有するを以て其過大の生長を抑制するの必要あるを認むれども或る場合に於ては之を刺戟鼓舞するの必要あるを見る要するに此の種の感情は發達せしむべきものと其萠芽を抑止すべき者とあるのみならず兒童の性質によりて亦大に此の他に斟酌を加へざるべからざるものあるなり吾人が第二章に於て兒の特性として揭げたる諸種の心情は主として此の自愛の情に基づくものなれば其の天性に逆はざる限り是等の調節を謀からざるべからず兒童の感惰は其の初めに當りては肉體の快樂苦痛を以て滿たされ居るものにして其の數年間は全く其の身體生活と下等感覺との聯合し居るを見る是を以て動

もすれば自利に陷るの弊あるを以て暫らく此の情の必要なる場合と其の調節の方法とを述べんとす

自愛的感情中求知心、好奇心、愛讃等は最も必要なる感情にして人が他を摸倣し自然を眞似し自家の熟達を得るは全く此の好奇心の發動に基づくものにして目前に必要なるに非ざるも將來に大に必要なる智識の基礎を得るは求知心の存するによる特に此等に愛讃心の結合あるによりてよく忍び難きの困苦に耐へ奮ひて事を成さんとするの勇氣を與へて社會の進歩も亦之れによりて增進し學理の發明も眞理の發見も皆之によりて得らるゝものなり故に是等の情の利用は第九節眞理の愛に於て精しく述ぶることゝせん

恐怒、恐怖、嫉妬、失望の如きは之を吾人の概念より考ふれば好ましからざるが如き感情なれども人として是等の感情皆無なりせば決して完全なる人物にあらず語を變して之を云へば或度までは是等の感情も保存し置くの必要あるべし以下聊か是等につきて述ぶる所あらんとす

一、恐怒　兒童が此の情を釀し易きことは明かなる事實にして此の感情たる社交

の平和を破り自身の不快を來し人としての品位を卑くするは勿論にして平時に於ては此の情は全く不要なる感情なり人は之れが爲めに爲し得べきことも成就せず人を害し家を滅ぼすに至るは古今其の例少なからず吾人熟々兒童の此の情を勵ます機會を考ふるに全く其の父母長上の怒りを見て之に摸擬するもの多きが如し勿論其の由て來る根原は今茲に論究するの必要なきなり

兒童は生來怒り易きものゝ怒るを見ざる時は此の感情は自然と勢力を失ふに至るべきも其の周圍のものゝ怒りを見ることあれば此の感情なる怒りを見ることあれば此の感じ自然と彼等の心腦に印象して後日此の如き機會に遇ふときは自身必ず之れに摸擬して怒を發したるの狀を示すものなりされど此の如きは未だ眞の恐怒となるの勢力なしと雖も日を重ね月を經るに從ひ益々之を演習して其の基礎を固くし遂に自身にも抑ゆること能はざる眞に燃ゆるが如き恐怒の情となる一度此の如きに至れば之を靜めんことは他人には勿論自身にも如何ともなし能はざるものなり世には此の情を發するの不利なることを覺り自ら之を制せんとするも其の機會に臨める瞬間には如何ともなす能はず

して事終りて後悔ゆるものあるにあらずや天性此の情に富む兒童あれども多くは父母長者より傳染して彼等の腦中を支配するに至るものなれば家庭に於ては兒童の面前にては勿論平常と雖も專ら注意して此の情を外部に表出せざらんことを務むるは兒童の心情を教育する父母たるものゝ任なりとす

然らば此の感情は全然必要なきやと云ふに吾人決して其の然らざるを見るなり人は何事にても平和を望みてのみ過ぎ得るものにあらず時としては忿怒が大に其の人の品位を維持する上に必要なることあり人我に不正の兇害を加ふれば吾人怒りて之を責めざるべからず道理に背き人倫を無みするものあれば吾人は之を默するを得ざるなり彼の義俠心の如きはまさしく一部分は忿怒の情より成るにあらずや故に適當の場合に於ては自己の權利を保護し外惡に抵抗し得ざる如き不活潑者は後來生存競爭の場裡に入ること能はざるなり吾人は同情仁愛の念を養ふと共に適當に此の忿怒の情を調和せざるべからずアリストートル云へるあり曰く「眞に怒らざるべからざる時に怒ること能はざる者は之れ愚なり無神經なり其の身を護ること能はざる憶病者なり」と古人も亦一角あれや人心と云ひしにあらずや

然りと雖も吾人は兒童に望むに君子の怒りを以てせんことの難きを知る孔子が一度怒りて少正卯を誅したる如き武王が一度怒て天下の民を保たしめたるが如き止むを得ざるに出でたる高尚なる忿怒は未た以て家庭に望み得べくもあらざれば出來得る限り此の情を抑制せんことを務めざるべからず

之が爲めには兒童を取り扱ふこと極めて公平にして此の情を醸し易き機會を與へざることゝ此の情を摸擬すべき父母長上の怒りを表示せざることゝは勿論兒童が此の情を起すべき機會に遭遇して曾々忍耐したる如き實情を見たる場合には之を賞讃して此の德を養ふことを計り生長するに從ひ反省力を發揚せしめ事物に當りて正當なる見識を有せしむることを務め此の情の激發を抑止し一方に於ては之れに反對の親切同情等を養成せざるべからざるなり

二、嫉妬　此の感情は毫も快樂の分子を含むことなく人情中最も卑屈にして亦最も賤しむべきものにして他人の幸福を羨やみ之を惡みて其の不幸を來さんことを希ふ心にして社會に何等の利益をも與へず小にしては一身の禍を招き大にし